
IS - unconscious -

天童翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS - un consciousness -

【Zコード】

Z9451R

【作者名】

天童翼

【あらすじ】

ある少年は転生するにあたり、女神からある能力をもらう。

その能力の名前はKNF。

その能力とはK（言葉に意味をもたせられて）N（狙ったようなタイミングで現れる）F（フラグメーカーになる能力）なのを少年は知らない。

Prologue (前書き)

初めてまして天童翼です。

この度、他の小説の連載があるのに掲載したい衝動に駆られて少し
ストックを持つていいるI.Sの二次作を掲載してしまいました。

この小説ではK（言葉に意味をもたせられて）N（狙つたようなタ
イミングで現れる）F（フラグメーカーになれる能力）を持った主
人公が無意識の内に一夏から女の子を略奪していきます。（一部、
マインドコントロールみたいに見えるかもしませんが、あくまで
KNFです！）

ある意味、究極のアンチと呼んでも過言ではないと自負しています。
ですので、そういうのが生理的に受け付けない人は絶対に見ないで
ください！

さらに、主人公あるいは作者が独自の視点でI.Sの世界を見たり、
独自の技術を開発したりします。

この一次作はそういうのを前提で書いていますので！
それでも構わないという人のみ本文へどうぞ。

それと、この一次作内で出てくるオリキャラ、オリ企業、独自解釈
が入った政府は、フィクションであり、現実世界の人物、企業、政
府には一切関係ないことを先に言わせていただきます。

それと、この一次作の文体は試験的に普通のライトノベルと同じよ
うに書いていますのでPDFファイルおよび、縦書きの方で見るこ
とをオススメいたします。あくまで、試験的にですので、今後、変
更するかもですが。

と思っていたのですが、アクセキ解析を見た結果、圧倒的に携帯
での観覧が多かつたので、一旦、改行して携帯用に変更させていた
だきます。

最後になりましたが、これからよろしくお願ひします。

Prologue

「死んだ……」

少年はしつかりと覚えている。

死という事実を。

最後は車にひかれそうになつて『いる女の』人を助けて死んだということを。

「まさか、大学の入学式の前の日に死ぬなんてな」

少年から青年に変わる、そんな時期に彼は死んだ。

「意外と冷静だね」

少年は驚く。

ただ白い世界に自分以外の誰かがいたとは思わなかつたから。

「誰?」

少年の目の前に一人の少女が少年の前に現れる。

唐突に。

「普通、ここに来る人はもつと、大騒ぎするのに」

「冷静なのが珍しい？」昔から俺、周りと違つて良く言われたよ

「さうなんだ」

白銀に輝く神と透き通るような蒼い瞳を持つ少女は微笑む。

「実はや、あなたに転生してもらいたいんだ」

「転生？」

「そ、転生、本来なら死んだら輪廻転生の理論で全てを消されてもう一度、やり直すんだけど、上からの命令でね。一回、誰かを私たちが創った世界に転生してもらいたいの」

「…………ようは俺は実験動物扱いか？」

「まあ、悪い言い方をすれば、そうだね。でも、悪い話しじゃないでしょ？ 本来なら消えるはずだつた存在を私達が救つてあげるんだから」

少年は少し考える素振りを見せる。

そして

「俺が転生する」と、その世界は壊れないのか？」

そう聞いた。

「大丈夫、そのあたりは『あなたのためだけに』一つの世界を作るから。他の世界と違つて相当壊れにくくなる。ただし、物語の世界

だけどね

「物語？」

「そう、私達が一から世界を創るのには膨大な時間がかかる。そんなことをしていたら、あなた達が消滅するかもしれない。それを回避するために、人間が設定した物語を元に世界を創るんだ。もちろん、あなたというイレギュラーに入るから、人間の考えた物語とはだいぶ違つてしまつけど」

「…………俺達が消滅つていうのは?」

「セレは言えないわ。もし、言つてしまつたら、あなたは行かない」という選択肢を選べなくなつてしまつ

「…………俺はもう、行くと決めている。だから、教えてくれ

「いいの?」

「ああ、どうせ、なくなる命だったんだ。だから、チャンスをくれたことに感謝することはあっても、拒否するつもりはないよ

「…………ありがとう。それなら、説明するわ。あなた達の世界は今、未曾の危機に瀕している。魂が溢れすぎているの」

「溢れすぎている?」

「ええ、発達しすぎた故に魂が生産されすぎた。世界に魂が溢れすぎると、世界はそのエネルギーに耐えきれなくなつて潰れてしまうの。だから、それを回避するためのテストケース。あなたが成功す

れば、もつともくの魂を色々な物語の世界に転生してもいいなって思うの、その時は本当の輪廻転生になるけど」

「…………俺の場合はテストしてもらひ特典についてとか

「ええ

「それで、俺が転生する物語つて?」

「要望があれば聞くわよ」

「決めてなかつたのかよ…………」

「私も暇じゃないの」

「それなら…………科学が発達した世界がいいな」

すると少女はニヤッと笑う。

「分かつたわ、それなら私の好きなアニメの世界にしてあげる

「頼んだよ」

「それで一つだけ能力をあげるわ。何が良い?」

「…………何でも良いや」

「え?」

「別に元の世界で何か物足りないと思ったことないし

「そりなの…………それなら私が決めてあげるわ」

そこで少女は一矢之とからに笑う。

それはもう、計画通りと言つた風に。

しかし、少年には見えない角度で笑つてゐるので問題ない。

「じゃあ、能力は私が勝手に決めてつけておくから、じゃあ、次の人生に祝福を」

「ありがとう」

少年は白い光を受けて旅立つて行つた。

「ふう、やつぱり、あの子を選んで良かったわ。オタクとかだつたら、何か私があげたい能力とは別の能力を要求してきそうだし」

そこで少女は嬉しそう笑う。

「さてと、あの子はISの世界（イントライア・システムズ）をどんな風に改変してくれるのかしら あの子につけた能力はKNFだから絶対荒れるわよね、ふふ。楽しみ。あ、そうだ。どんなISでも乗れるようにしとかないといけないわね。これはおまけつてことで。さて、仕事に戻ろうかしら。あの爺どもの相手をするのは疲れるからね。私にも、これくらいの娯楽あつたていいじゃない」

女神が少年に与えた能力 K N F とは K (言葉に意味をもたせられて) N (狙つたよつたタイミングで現れる) F (フラグメーカーになれる能力) の略なのだが、それを少年が知ることは一生ないのだった。

女神「さて、と。」これから面白くなるわね
天童翼「面白そうなつて……いいのか？」

神「まあいいじゃない。今回はKNFつまり、言葉に意味をもたせられて狙つたようなタイミングで現れるフラグメーカーになれる能力の説明をするわよ！」

翼「…………すげえ無理矢理な能力、…………」

神「でも、ある意味、数ある能力の中でも最強クラスの能力だもん」

翼「KNFって結局はどんな能力なの？」

神「ふふん、よくぞ聞いてくれました！ NFは分かるわよね」

翼「言葉、通りの意味だよね？」

神「そうね。ただ、狙つたようなタイミングで現れるフラグメーカーになれる能力よ」

翼「Kは？」

神「言葉に意味をもたせる能力、これが最大のチートよ！」

翼「言葉に意味をもたせられるだけのに？」

神「そうよ！ 例えば『翼！ 勉強しなさい！』この言葉を聞くと

翼は嫌な思いをするでしょ？」

翼「そうだね」

神「でも、これは翼のことを心配している意味を持っているわ。普通の場合はあまり伝わらないわ。でも、この能力があれば伝わるの！」

翼「ん？ 伝わっても普通だろ？」

神「全然、違うわ。もし落ち込んでいる時に『気遣い』や『愛情』や『心配』の意味をもった言葉をこの能力を使っている状態で聞くと直にこの思いが伝わるわ。それがどれほど強力なことか……」

翼「惚れるな……」

神「ええ。交渉後の場においても、もし、この力を使われたら……」

…」

翼「交渉したいという意志が伝わって交渉が成功するのか……」
神「そうよ。ただし、悪意も伝わるから、もう刃の剣とも言えるけどね」

翼「そうなのか……」

神「また、能力が発動する場面になつたら、現れてあげるからね」

翼「了解です。では、次話へ」

神「ばいばい」

Episode 01 KZFの旅立ち（前書き）

今回は原作開始までの主人公の過去編！
次話から本格的に本編へ

Episode 01 KZFの旅立ち

「リアム、忘れ物はない？ ハンカチは持った？ ポケットティッシュは？」

俺の前で俺のこと心配してくれる、女性の名前はナターシャ・ファイルス。

俺の遠い親戚のお姉さんで俺の面倒を三年程してくれた恩人だ。

彼女が鮮やかな金色の髪をしていられるのは、毎日、丁寧に手入れをしているからだと俺は知っている。

彼女の格好は格好いいブルーのスースはビジネススーツではなく、オシャレなカジュアルスーツだ。

正直に言って親戚だと分かっていても、その女性特有の膨らみにドキドキしてしまう。

そんなナターシャ姉さんと俺がどうして空港にいるかと言つと俺はこの春から日本にあるHIS学園に通うことになった。

そもそもの始まりは数年前に遡る。

俺の転生した先の父はそれなりの資産を持った男性だった。

天才といつべき頭脳を持ち、一代で機械や兵器を扱う会社を立ち

上げた。

俺はそんな父を本当に尊敬していた。父のようになりたいとかえ思つた。

そんな父だったが世間と一つだけ違った所があった。父には『三人の妻』がいた。

世間一般では父は色魔とか呼ばれていた。

しかし、父は頑なに『俺の妻は三人だ！ 誰にも優劣をつけるつもりはない！ なぜなら三人共愛しているから！ 惚れた女を幸せにして何が悪い！』と言い張った。

世間一般で言われるハーレムといつやつだった。

俺は前世の記憶があつたため父が言っていることを初め理解できなかつた。

そんなことが道徳的にいいのだろうか？ という疑問すらあつた。

しかし、父と俺の生んだ母を含む三人の母達は幸せそうだつた。

三人の母達はとても仲が良くなつたし俺を生んだ母以外の母も俺のことを本当の子供のように可愛がってくれた。

両親を見ているうちに俺は、だんだん、ハーレムがおかしくないよつに思えて來た。

確かに世間一般ではダメでも幸せなら、それでいいじゃないか、

と。

しかし、事件は起きた。

それは俺が小学六年生になった頃だ。

俺の生みの親の母の誕生日の日に両親達は俺が学校に行っている間に四人でデートに出かけた。

別にそれは変わったことではなく、いつも通りのことだ。

しかし、いつもと違つたのは両親達ではなく、世界だった。

爆破テロ。

狙われたのは民間が経営するショッピングセンター。警察や軍の調べでは両親を狙つたモノではなく無差別だつたらしい。

しかし、問題は父が会社の経営者だったことだ。

俺には莫大な財産と会社が残された。

それも、国からの見舞金も物凄い額になつたため俺の親戚一同は荒れに荒れた。

正直に言つて金の力というのは怖かつた。

そんな親戚一同を田のあたりにして怒りをあらわにしたのは、昔、数回会つたことのあるナターシャ姉さんだつた。

姉さんはIIS学園を今年、卒業し軍に所属する」ことが決まつていた。

もう単位はたりているから、いひりて戻つて俺の面倒をみると。

もし、それがダメなら、IIS学園に連れていくと。

親戚一同はナターシャ姉さんを金田町の田舎だ！ とか散々、罵倒した、けど……俺は嬉しかつた。

姉さんは俺の両親の遺産などいらない。

自分が稼いだ金で俺を養うと言つてくれた。

ただし、俺の両親の遺産は、おまえたけに一切くれてやらない！

その言葉を聞いて親戚一同はさうに荒れた。

俺の両親の遺産が目当てなのがまる分かりだつた。

耐えきれなくなつた。

親戚一同に俺は遺産を全て自分が管理すると言つた。

さらに、ここにいるナターシャ姉さん以外の人間を親戚とは思わない。

両親の葬儀にも出るな！と強く宣言した。

それを聞いた親戚一同は態度を一変に変えた。

俺の『機嫌とり』。

ナターシャ姉さんは俺を騙す悪女だと俺に認識させるための説得をし始める者もいた。

正直に言つて見苦しかつた。

昔、数回しかあつたことはなかつたが明らかにナターシャ姉さんは、そんな人じゃない。

俺の心は怒りに染まつた。

父さんの親友だった軍人を呼んで、頼んだ。

父さんの遺産をこんな奴らに渡したくない。

力を貸して欲しいと。

すると、分かった、と、父さんの親友は呟いて。

父さんの遺言状を出してくれた。

正直に言つてそんなものがあるとは俺も知らなかつた。

そこには、こう書かれていた。

父さん達の財産は全て俺に直接、渡せ。そして、俺の親権は俺の認めた人が持つ、と。

もし、これが守られないようなら、俺に訴訟を起こせと父さんの親友は言つてくれた。

さすがに軍人がバックについて、正義がこちらにある以上、親戚一同は黙るしかなかつた。

それと父さんの会社の方は俺と仲良くしてくれていた副社長に譲つた。

譲つたはずなんだけど……『私は！　若様以外にこの会社を渡すつもりはありません！　若様がこの会社を継がれるまで私が守り

ます！』と言つて将来、俺に会社を継がすと言つて周りの意見を一切、聞かない。

嬉しい。

物凄く嬉しい。

俺ではなく父を慕つてくれてるのは分かっているけど。

そして、晴れて俺はナターシャ姉さんと暮らすことになった。

『言の通りナターシャ姉さんは自分の給料で俺を養ってくれた。

軍属で家にいないナターシャ姉さんは家の家事をした。

ナターシャ姉さんはそんなことをしなくても良いと言つてくれたけどそれでは俺の気持ちが収まらないから、勝手にしていた。

そんな生活が一年程、続いたある日。

ナターシャ姉さんがISの国家代表選手に抜擢された。

正直に言つて物凄く嬉しかった。

俺は、今まで溜めていた、こづかいで少しだけプレゼントを贈つた。

正直、そんなに高い物じゃなかつたけど、ナターシャ姉さんは喜んでくれた。

両親の遺産でプレゼントを買つのは何か違つ気がしたから。

ちょうど、その時期だつた俺が工場に興味を持ち始めたのは。

俺は元々、機械類を弄るのが好きだつた俺はナターシャ姉さんに工場の実物を見せて欲しいと頼んだ。

そうしたら、ナターシャ姉さんが操縦する工場を特別に見せてもらえることになつた。

もちろん、我ままだつたのは分かつてゐる。

そして、いや軍の監視のもと、見学を許可してもらつた時のことだ。

まあ、軍と言つても父さんの親友の女性が色々と手配してくれたみたいだけだ。

そこで……事件は起つた。

俺が触らせてもらつた工場が起動してしまつたのだ。

それを聞いた、アメリカ政府とアメリカ軍は大慌て。

I.Sは日本人である篠ノ之博士しのののが開発した女性にしか使えないパワードスーツだ。

俺が初めて男子で初めて使える、ということになる。

正直に言つて最高のモルモットだった。

実験動物にされてもおかしくなかつた。

そこで、俺の身柄を守つてくれたのはナターシャ姉さんと父さんの親友の軍人と父さんの今の会社の社長さんだった。

アメリカ政府と交渉して俺がI.Sを動かしたデータを献上する代わりに俺の身の安全を保障するというものだった。

ナターシャ姉さんは国家代表。

父さんの親友は軍で位は知らないけど、相当、上の地位の人間。

そして、父さんの今の会社の社長さんはアメリカで一、二を争う企業、そこの社長。

正直に言つて、これ以上、凄いバックなど存在しないだろう。

そういう訳で俺の身は保障された。

世間的には俺のことは公表されなかつたが。

ちなみに、父さんの起^こした会社で俺の専用機が俺の意見をかな

り組み込んだ状態で作成してくれた。

本当に今の社長さんは頭が上がらない。

それから一年ほど経つたある日のこと、いつも通り、ナターシャ姉さんと同僚の人達とEISを使った実験をしていた時、ある報道が俺たちの下に飛び込んでくる。

EISを動かせる男が日本に現れたという報道が。

名前は織斑おりむら一夏いちか。

初代ブリュンヒルデの弟にして篠ノ之博士とも交友があるそうだ。おそらく、俺みたいなイレギュラーではなく篠ノ之博士がおそれく何かしたのだろう。

彼がEIS学園に入学することになつたらしいので俺もEIS学園に入学することになつた。

その時に俺がEISを操縦していたデータを渡せと色々な国が言ってきたらしいけど、俺の祖国が必死になつて守つたらしい。

色々な陰謀を余所に俺は今日、無事に旅立つことができる。

俺の相棒である『オーディン』と共に。

「じゃあ、行くよ。姉さん」

「…………何かあつたらすぐに連絡するのよ。虐められたら、その国

に抗議するから言こなさい。絶対よ

……国家代表のナターシャ姉さんが言いつと……〔冗談じや済ま
ないのが若干、困る。

そんな訳で俺のI-S学園へ向けての飛行機は飛び立つのだった。

Episode 02 KNF、学園に到着

「 いじが IIS 学園か……」

俺は今、IIS 学園の前に来ている。

正直に言つて長時間のフライイトで疲れている。

でも…………それ以上に周りの視線が痛い。

IIS 学園にいるのは基本、女の人だ。

教師から生徒まで。

唯一の男は理事長くらいだ。

先方の話しへ、まだ織村一夏は IIS 学園に来ないそなうので、
まだ俺一人ということだ。

好奇の視線を受けるのは仕方のないことだらう。

俺はゆつくりと、しかし、堂々と歩いて事務所を探す。

いつも時にびくびくして いたり逆になめられる。

俺は別に犯罪者じゃないんだから。

そこで一人の女の子の視線に気づいた。

正直に言つて普通の人じゃない。

俺の存在が公表されてから、俺のことを探ろうとしていたスパイに近い。

しかし、そのスパイも大抵は CIA に潰されているはずなので……いないはずだ。

それに…… IIS 学園にスパイを送り込める程の組織がいるとしたら国家単位。

しかし、そんなことをしたら、バレた時にリスクが高すぎるため誰もしない。

それなら……。

俺は右手につけられた指輪にさわる。

俺の専用機をいつでも起動させられるよう。

「そんなんに警戒しないで」

不意に俺の後ろに立つ女の子。

その子に俺は見覚えがある…… それも良い意味での見覚えじゃない。

最悪だ。

IIS 学園で一番、会いたくない人に一番始めにあつてしまつた。

俺は一步下がる。

「う ん？ 君は歳上好きだと思つたんだけどな」

明瞭快活で文武両道、料理の腕も絶品で更に抜群のプロポーションとカリスマ性を持つ完璧超人の表向きはEIS学園の生徒会長。

名前は更識^{さらしこなたてなし}楯無。

しかし、その実態は違うロシアの代表選手。

アメリカとは未だに険悪なムードが続くロシアの代表選手……候補生ではなかつたはずだ。

俺が親しくして良いわけがない。

「何の用ですか？」

「あらあら？ 思春期の男の子と話すのは久しぶりだから分からなければ私、変だったかな？」

あくまで笑顔を絶やさず口にそいつ言ひ更識……さん。

EJの人人が本当にロシア代表なのか、疑つてしまつ。

「いえ、あなたのよつな綺麗なお姉さんと話すのは稀ですから、緊張してしまつて」

「あらあら、嬉しい事を言つてくれるじゃない」

そう言つて近づいてくる更識さん。

「それ以上、近づかないでください」

「ん？」

「ロシアの代表である、あなたが俺に何の用ですか？」

「知つてたんだ」

「ええ、 CIAをなめないでください」

「そつかあ、君のバックにはアメリカ軍だけじゃなくて CIAもいるんだあ」

「…………対暗部用暗部のあなたに言われたくないですね」

「そつかあ、それもばれちゃつてるんだ。でも安心して、お姉さん個人的には君に危害を加える気がないから」

「…………個人的にはでしょ？」

「ふふ、手厳しいわね」

更識楯無…………想像以上に読めない人だ。

ナターシャ姉さんが氣をつけなさいと言つた理由も分かる。

「それじゃあ、俺は事務所に行かないといけないので」

「私が案内してあげるわ」

「結構です」

「お姉さん、振られちゃったあ 」

特に気にした素振りも見せず、それだけ言ってどこかに消えていく更識楯無。

あの人の真意といつよつロシアの真意が分かるまでは警戒し続けないといけないのか…………厳しい。

もつと、楽な学園ライフを送りたかったんだけど…………

まあ、ISを動かせた時点で無理か。

「さて、ど。事務所を探すか」

余談だけど、事務所を見つけるまでに一十分かかったのは内緒だ。

「ふう

俺は今、H.S学園での受けを終えて、街へ出でてきている。
別にあぬことがなかつた訳じゃない。

だけど、ナターシャ姉さんに向か日本のお菓子を送つてあげよう
と思って田本のショッピングモールを田指してこる。

別にナターシャ姉さんが何か送つてくれと言つた訳じゃないけど。
俺が送りたい。

ショッピングモールに着き、ぶらぶらと店を歩いてこる時だった。

「やめてくださいー」

少し、気の強そうな女の子が数人の男に囲まれている。

女の子は頭にバンダナ？ かな？ 何か布を巻いてこる。

似合つてるのでおそらくオシャレか何かだらう。

いくら女性が優遇されている世界といえども、やはり生身では男
の方が強いからだらうか？ 女の子の足が少し震えている。

「いいじゅん、そんな奴、ほつとこてせ

「やつやつ、お兄さん達と遊ぼうよ

アメリカでも、日本でも「いつにいつをする男は同じよつな輩なんだな。

俺はゆつくじと呪を女の子のいる方向に向ける。

「失礼、美味しいお菓子を売っているお店を知りませんか？」

女の子に微笑みかける。

「え、あ？　はい？」

突然のことに啞然とする女の子。

まあ、当然か。

「ああ、テメエなにせん何者だよ？」

「おい、待て、コイツ、なかなか……」

俺が女の子の手を掴んで離れようとした時だった、絡んでいた男が俺の肩を掴んだ。

「俺は男だ。男に俺は興味がない」

「つー？　「イツ、男の癖にポニー・テイルにしてるのかよー！？」　キモ」

男が言つ、俺は髪を腰まで伸ばしてポニー・テイルにして結んでいる。

ナターシャ姉さんがお揃いにしたい、とかそんな理由で髪を切るのを禁止にされているのが理由なんだが、コイツ等にそんなこと言つてやるつもりはない。

「おまえ達が勝手に解釈しただけだろ？ 僕は急ぐ」

「ああ！ 僕達が先にこの子に声をかけてただろ！」

「退け」

俺は静かにそう言い放つ。

「つー？ なんだよ…………なんだか、俺達が悪いことじつまつてるみたいじゃないか…………」

「おー…………何、弱気になつていいんだよ…………」

俺はもう一度、静かな声で言い放つ。

「消えろ」

なぜか、昔から俺はこういつ風に話すと人は従つてくれる。

相手に俺の意思を伝えるようにして言葉を放つと。

「くつー？ 分かったよ…………ほら、行くぞ」

「ああ…………」

男達が言つた後、俺は女の子に向き直る。

「大丈夫だつた？」

今日のあたしは機嫌が悪かった。

私の好きな人である織斑一夏さんがＩＳを扱えることが分かつた、
その日から一度も会えていないからである。

何でも一夏さんは今、身柄を政府に拘束されているらしい。

そりやあ、私だって一夏さんには無事でいて欲しい。

だけど。

恋する乙女としては会いたい。

だけど、無理だから、今日は馬鹿兄を連れてショッピングモール
に来ていた。

もちろん、荷物持ちだ。

さて、と。私は色々な場所で買い物をした後、下着売り場に行つた。

もちろん、馬鹿兄は『デリカシー』の欠片も持ち合わせていないので着いて来ようとしたが、みぞおちに一発、叩き込んで黙らせた。

そして、いざ、下着売り場に向かおうとした時に

「ねえ、君、今、一人?」

チャラ男が二人、話しかけて來た。

ナンパは別にこれが初めてじゃなかつたから、私は

「連れがいるので」

そう言つて、逃げようとした。

すると、このチャラ男達はあらうつことか、私が行こうとした方に先回りして私の進路を塞いだ。

しつこい。

私は

「やめてくださいー!」

そう叫んだ。

それでもチャラ男達は

「いいじゃん、そんな奴、ほつといてさ」

「そりそり、お兄さん達と遊ぼうよ」

一向に諦める気配を見せない。

ムカつく。

一発、殴りうつと思つた時、その人は現れた。

長い金色の髪を靡かせて。

「失礼、美味しいお菓子を売っているお店を知りませんか？」

外国人だと思つけど丁寧な日本語を話す、その人は間違いなくイケメンだった。

そんな彼に私は

「え、あ？　はい？」

としか答えられなかつた。

そんな私と違つて何を思ったのか男達は

「ああ、テメエ 何者なにものだよ？」

「おい、待て、コイツ、なかなか……」

彼のことを女と勘違いしたみたいだ……キモ。

彼はすぐに私の手を掴むと、どこかへ行こうとしたけど、それをチャラ男が止める。

「俺は男だ。男に俺は興味がない」

「つー? コイツ、男の癖にポニー テイルにしてるのかよー? キモ」

この外人さんがしても、大丈夫だと思うんだけどな……何と言つかオシャレで。

そんな私の考えを余所に外人とチャラ男の話しさ進む。

「おまえ達が勝手に解釈しただけだろ? 俺は急ぐ」

「ああ! 俺達が先にこの子に声をかけてただろ!」

…………このチャラ男とこの外人さん、どちらに着いて行く? と道行く人に聞けば間違いないく、外人さんを選ぶ人が九割の人気が占めるだろう。

一割くらい、変わり者がいると思うから。

そんな時、外人の口から

「退け」

男達に向かつてその言葉が放たれる。

不覚にも、その言葉にドキッとしてしまった。

何で囁つかな?

この人に連れて行つてもらいたい。

うん、うん、着いて行きたい。

そんな衝動に駆られる。

一夏さんにはない魅力……

あ、ダメ!

私が好きなのは一夏さん、なんだから……

「消える」

もう一度、彼の口から彼から、似たような言葉が放たれる。

また、胸がドキドキする。

私つてMだったのかな……

こんな言葉に興奮するなんて……

「くつー? 分かったよ……ほり、行くぞ」

「ああ……」

チャラ男達もそんな外人さんの不思議な魅力に負けたのか逃げていぐ。

そして、外入さんは私にこう言つてくれる。

「大丈夫だった？」

「俺の名前はリアム・イーリー。君は？」

「わ、私は五反田蘭です」

「蘭ちゃんって言つのか。ごめんね。もつとスマートに助けてあげられたら良かつたんだけど」

「い、いえ」

できたら、こう、もっとやり方があったのかもしれないけど、今俺にはあれくらいしか思いつかなかつたからな。

未だにエリ学園に入学する前なごと、エリを使つて騒ぎを起しきす
訳にはいかないからな。

「それじゃあ、俺はこれで」

俺は本来の目的であるお菓子を買ひに行ひりとする

「ま、待つてくださいー。」

突然、蘭ちゃんに服を引っ張られた。

「ど、どうしたの？」

思つた以上に蘭ちゃんの力が強かつたので多少、焦つてしまつ。

といつよつ、俺がいなくとも大丈夫だったのか？

「あの、その…………えっと…………お礼を…………」

「別に気にしないで」

「い、いえ！ セウコウの訳にはー。」

日本人が義理固いつて聞いていたけど、この子も日本人つてこと
か。本当にナターシャ姉さんが持つていた漫画と同じだ。

「それじゃあ、お菓子を置いている店を教えてくれないかな？ で
きたら日本のお菓子がいいんだけど」

「わ、分かりましたっ」

ナウトヒト蘭ちゃんは俺の手を元こして歩き出した。

ああ！

私、この人のことも好きになっちゃったのかな……

でも…………リアムさんの言葉を思って出すけどしゃが止まりなくなるし…………

こんなに積極的に……

私、一夏さんの手も握ったことないのに……

じつじよう！

ひゃあー？

分からない！

「あ、そりこえぱ…………ロアムセんせーに向をしこ来たんですか？」

「留学しようと思つてね。蘭ちゃんはどこの学校に通つているの？」

「わ、私ですか！？ 私は……」

私の通つている私立聖マリアンヌ女学園中等部は筋金入りのお嬢様学校。

……箱入り娘つて思われないかな…… 外国の人みたいだから、大丈夫かな？

「聖マリアンヌ女学園ですか？」

「聖マリアンヌ女学園？ 確か、優秀な学校だつたね。凄いじゃないか」

「え、あ、その、ありがとうございます！」

何でリアムさんは外国の人なのに知つているの！？

「高等部？ たぶん、俺は高等部だと思つたんだけど」

「うう、中等部の一年生です。この春から二年になりますー。」

「やばりか、俺は今年の春で高校生だから、蘭ちゃんより一つ上だね

「そ、そつなんですか？」

てつきり、大学生かと思つた……

リアムさんって滅茶苦茶、大人びているんだもん。

外国の人だからかな?

「リ、リアムさん、あ、名前で呼んでも……」

「うん、名前で呼んで、イーリーって日本人には言ひにくいよね」

「あ、ありがとうございます。リアムさん、リアムさんって、ビリーの国の出身なんですか?」

「ビリーだと思つ~。」

…… | 裕さん、ごめんなさい。

私、今、リアムさんの笑顔に見とれました!

別に一慶さんとは付き合つてゐ詫じやないけど……

「イタリアですか?」

「はずれ アメリカでした」

「アメリカ……」

「ん？ 何かアメリカに悪い印象でもあつた？」

「い、いえ。そんなことないです……」

「そつか。それなら良かった。とにかく、蘭ちゃんの案内してくれていた、日本のお菓子の店つて」「じやないの？」

「え？」

リアムさんは、ちょいと、私が通りすぎようとしたとしていた日本の老舗の高級なお菓子を売っているお店を指差す。

「あ、いえ……その」

「ん？ 違つたかな？」

「その…………そこは…………」

私達みたいな庶民とは殆ど縁のない店なんですよ、とは言えない……。

「違つたのかな？」

「いえ、そんなことはないんですけど……」

「入つて見ても良い？」

「は、はい」

店に一人で入ると、ショッピングモールの中だというのに和服の

お姉さんが、いらっしゃこませ、と挨拶してひびきに寄つて来る。

「う、じれじやあ、ニアムさんは買つしかなー……散財させち
やうかも……どつしょい。」

「本日はどのよつなお菓子をお探しで?」

「日本独自のモノを探してこるんです。女性が喜びそつな」

「あら? じんな可愛い女の子を連れているのに、別の女の子で
すか?」

店の人の言葉を聞いて私は顔を真っ赤にして俯いてしまつ。

恥ずかしい……

「いえ、故郷くわにいる姉に、です」

「あら、それは失礼。海外の女性の方はいつもセットを好んで買
つていかれますよ。今なら少しサービスもしますよ」

店員さんが指差したのは……零が四つ程あるお菓子の詰め合わ
せのセットだつた。

確かに色々な種類の和菓子が沢山入つていて、美味しいしつだけど
学生に進めるには高すぎる……

店員さんも私と同じでニアムさんの年齢を間違えているのかな?

「そうですか……確かにナターシャ姉さんも喜びそつだ。後、こ

れにおせんべい？ とこつお菓子もあつまませんか？」

「はー、それなら…………」
「わざわざ？」

店員さんが持つて来たのは三千円程の値段のお煎餅だった。それなりに量もあるけど、やはり学生には少々、高い。
「試食のよつなことはできませんか？ なにぶん、食べたことがないモノで」

「ええ、構いませんよ」

店員さんは奥に一度、戻つてからすくごくお盆に一枚のお煎餅とお茶を載せて戻つて来た。

それをリアムさんは馴れた手つきで受け取り私にもくれる。

「あ、ありがとうございます」

「ハシと微笑んでくれる。

「う、笑顔が眩しくわかる。

「美味しいですね。このお茶も販売されているんですか？」

「ええ、しておつまむ」

「それなら、このハシをください。海外に送るサービスなどね？」

「ありがとうございます。いたしておつまむ」

そして私がお茶を飲み終わる前にリアムさんは会計を済ませるべく移動する、私も急いでリアムさんの後を追つ。

たぶん、私を待たせないために先に行つてくれただろうけど……この店で一人でいるのは辛いからおいていかないで欲しいです……

なんとかお茶を飲み終えて私はリアムさんの少し後ろで待機する。

リアムさんは馴れた手つきで財布から万札を一枚取り出し、代金を払う。

凄い…………私からは考えられないかな。

そして、送り先の住所を紙にスラスラ書いていく。

そこで少々、店員さんが慌てる。

「じゅ、十五歳なんですかー!?

「ええ、そうですよ」

やっぱり…………もつと歳上だと思つてたんだ。

慌てて送料はサービスいたします、と付け足す店員さん。

十五歳のリアムさんにそんな高価なお菓子を進めた罪悪感が多少あるのだろう。

店員さんの、ありがと「アマモ」でした、とこうお礼を背中で受けながら、店を出る私とアマモさん。

「蘭ちゃん、ありがとう、おかげで良い買い物ができたよ」

笑顔で微笑んでくれるアマモさん。

それに私は

「え、あ、はー」

と、曖昧に返事をする。

はあ、何で私、こんなに緊張してくるんだろ？

「あ、おーー、蘭！ そいつ、誰だよー！」

そこで、忘れ去っていた男の声が聞こえてきた。

「お、おーーー蘭！ そいつ、誰だよー！」

蘭ちゃんに良いお店を紹介してもらひたので何かお礼を、と考え
ていたら後ろから声をかけられた。

蘭ちゃんと同じような髪留めをした男だった。

「馬鹿兄……」

蘭ちゃんが小声でさう呟く。

お兄さんなのかな？

もしかして、俺はお兄さんと買い物していた蘭ちゃんを無理矢理、
引っ張り回してしまったのか……

「「めん、蘭ちゃん。お兄さんと買い物に来ていたんだね」

「い、いえ！ 大丈夫です！」

「つー？ テメエ！ 何、蘭のことを名前で呼んでいるんだよー！」

……確かに、許可をとるのを忘れてた。

でも、何でお兄さんが知っているんだ？

「兄！ 違つのー！」の人は

「テメエ…………良くも俺の妹に手を出しあがつて…………」

俺の胸元を掴んで来るお兄さん。

……やめやかるのは簡単だけじ。

なんか俺が悪いみたいだし……

「違ひつて言ひしるだろー 馬鹿兄ー。」

蘭ちゃんの右ストレートがお兄さんに決まった瞬間だった。

もう少し淑やかな子かな？ と思つたんだけじ……元気な子
だな。

「いや 。悪い、悪い、まさか逆に助けてくれた方だったとは」

「いえ、気にしませんよ」

今、私のストレーントから回復した兄はリアムさんと和解した。

本来なら怒つてもおかしくないのに、リアムさんは嫌な顔一つせずに兄を許してくれた。

なんて心の広い人なんだね!。

それに比べて……兄は……はあ。

「それにしても、助けてもらひにばつがじやあれだな。そりだ。俺の家で飯食わないか?」

「え? 悪いですよ」

「いや、良いって。俺の実家、五反田食堂っていう料理屋なんだ
いや、リアムさんみたいな、お金持ちを定食屋に誘うつて、ちょっと!」

「本当に良いんですね?」

「ああ

「それなら、お願ひします」

「え? センは断りましょつよー」

「リアムさん!」

「じゃあ、帰るか。蘭」

そう言って……実家に帰らつとある兄……ちよつと待てや、

その馬鹿兄……

女神「出た…………いきなり、落としたわね」

翼「…………確かに原作、始まる前に…………」

神「今回、リアムはチャラ男たちに言葉通りの意味 + 自分より弱い者に命令するような思いを込めたから外国人に気後れしていたチャラ男たちには効果的面ね！」

翼「その上、蘭ちゃんを守りたいって気持ちも込めてたから蘭ちゃんはその思いを感じてドキドキしてたんだな…………」

神「それも一夏君に会えなくて寂しかった、あの子にしてみれば、その優しさは酷く嬉しいものね。さて、完全にいつ落ちるかわから、クッククク」

翼「ちやつかり、お家まで行くことになつていいし…………」

神「次回は、リアムに卒業してもらいたいものね！」

翼「…………何を」

神「禁則事項よー、言つたらノクターン送りになるわー！」

翼「それは…………確かにやばいな」

神「では、また、KNFが発動した時に会いましょうー！」

翼「ではでは…………失礼します」

Episode 03 KZFの食事と試験

俺は今、蘭ちゃんと弾（蘭ちゃんの兄）の実家が経営する五反田食堂で夕食をいただいている。

別に夕飯をいたくために助けた訳じゃないんだけど、これは日本語で棚から牡丹餅つて言つんだったかな？

「す、すみません、リアムさん……兄が無理を言つて」

蘭ちゃんが俺に気をつかつてくれる。

優しい子だな。

「うわわわ、こんな美味しい料理を」「やつしてもいいって、申し訳ないくらいこだよ」

「あ、そうですか……」

「なあ、リアム、おまえついでに住んでるんだ？」

一緒にテーブルについている弾がそう聞いてくる。

そこで、ギロツと効果音が、つきそつな程、睨む、五反田食堂のマスター。つまり、弾のお爺ちゃんなんだが。

「おい、弾、食わねえなら、下げつけめりや」

「うーんめぐら」

食事中に喋るのはあまり、行儀の良い行動じゃないからな行儀に
厳しいお爺さんだ。

その点、ナターシャ姉さんはそうこうの元の通り甘かったからな。

まあ、俺の生みの親じゃないけど、一人そうこうの元の通りの母さんがいたから、俺も話しかけられない限り、あまり話さないけど。今になつては良い思い出だ。

俺は返事をせずに苦笑してから、酢豚？ 定食を食べる。

ちりぢり、と俺の方を見てくる蘭ちゃん。

きっと、俺の箸づかいがきこじらないのを見て心配してくれているんだろ？

「大丈夫だよ」

「えつ？」

俺がそいつ言つと、蘭ちゃんは少々、驚いた顔になる。

「箸の使い方はまだ馴れてないけど、いつか来る前に多少は練習していたから」

「は、はい……」

ぎこちない笑顔を俺に返してくれる蘭ちゃん。

それにしても、この酢豚？ って美味しいな。

ナターシャ姉さんにも送つてあげたいな。

それから少しだけ、食べ終えた俺は会計を済ませるべく向かう。

「ど、どうしたんですかー？」 リアムさん

それに蘭ちゃんが慌てた声で反応する。

「え？ 今会計を済ませないと」

「そ、そんな」

「そんなことをガキが気にするこじやねえー。」

蘭ちゃんが何か言い終わる前に蘭ちゃんと達のお爺さんの声が厨房の方から聞こえてくる。

俺は一瞬、キョトンとしてしまつが、すぐ意味を理解して。

「あっがと！」 わざわざ

と、お爺さんに頭を上げる。あとで、蘭ちゃんを助けたところ話を聞いた俺に対してのお礼なのだ。でも正面を向かって、そういうことを言えるようなタイプではないマスターせいひつて、俺にお礼をしてくれていいのだ。

それをお爺さん

「ふん」

と、顔をそむけながら、無視した。

良い人だ。

「そ、そんな

」

「そんなことをガキが気にすらんじゃねえ！」

お、お爺ちゃん！？

リアムさんに何で「こと」を言つてゐるの！？

普通、「こと」と言われたら怒るよ！

ただでさえも、馬鹿兄ばかがリアムさんに失礼な「こと」をしたのに……

私は怒つてこぬであらアマサの顔をあかねると見る。

やつぱつ……怒つてなー?

それドリウカ、二ツ一ツ顔で

「あつがとハジゼコモク」

やうお嬢ちやんに言つてくれる。

あれ?

それを聞いたお嬢ちやんは

「ふん」

と、鼻を鳴らしながら顔を背ける。

そんな」としらた普通に、怒つてー、リアムさんでもー。

「蘭ちゃんのお爺さんって良い人だね」

「はー?」

私の考えとは裏腹にリアムさんは笑顔でやつ言つてくれる。

……また、笑顔に見とれちゃった。

一夏さん……「めんなれー。

「」の時、私はそんな私を神妙な顔つきで見てくる兄の視線に気づくことができなかつた。

「なあ、リアム、俺達の家で話さないか？」

「ほお」としていた私を置いてけぼりにして、兄は話しを進める。

リアムさんは右手につけた高そつな腕時計を少し見て、『少しだけなら』と返事をする。

これに私は少し嬉しくなつた。

もう少しだけ、一緒にいられるんだ。

「それじゃあ、行くぜ」

兄の後に私もついて家に入るため店を一度出る。

お店と血では別々になつてゐる。

繫がつているとお店に私生活が紛れてしまつかもしれないから、とお爺ちゃんが昔、言つてこつた。

そして、リビングで少し話を始める。

「せつぞくも聞いたけどリアムってビルに住んでこむんだ？」

「HJ学園」

「はあ？」

え？

「HIS学園だよ、ほひ、この近くにある」

「い、いや、それは知ってるけどさ…… HISって女こしか……」

…

「織斑一夏？ つてこいつも動かせるだね？」

「確かに…………だけじゃ、そんなことコースでは…………」

「あ、そうか、まだだつたんだ。ん？ 確か、今日か

リームさんはテレビをつけても良い？ と聞いてテレビをつける。
すると、速報です。ヒースが流れます。

『本日、アメリカ政府より、我が国にも HIS を操縦できる男がいる
との情報が各国のメデュアに送られてきました！』

兄と私は顔を見合わせる。

「ね？ これ俺のことなんだ」

『え つー？』

私と兄の声が重なったのだった。

「ふう、気持ち良かつた」

蘭ちゃんの家で少し喋った後、俺はIS学園の俺専用の一人部屋に戻り、シャワーを浴びた。

なぜ、一人部屋かと言つと俺が一人部屋を希望したからだ。

俺は色々と本園や会社と色々としているので、相部屋だと色々とまずいから。

まあ、データを盗みそつた奴なんて見たらすぐに分かるけどな。

IS学園の今年、入学する生徒と在校生と教官の情報は既にCIAから送られてきて見ていく。

警戒するべきは会長である更識樋無くらいだ。

織斑千冬も、もちろん、警戒することはないが、正直、

彼女は『武』の才能はあっても『政治』の才能は皆無だろ？。

そうでなければ、第一回モンド・グロッソで織村一夏を『亡国機業』に誘拐されることもなかつただろうし、ドイツにした借りの交渉も、もう少しマシなものにできただろ。

そもそも、ドイツが『亡国機業』を手引きした可能性さえある状況で織斑一夏を日本に置いてドイツに一年もいるなど下策も下策、正直に言つて気がどうかしているとしか思えない。

なぜなら、モンド・グロッソの決勝戦の日に『たまたま』織斑一夏が誘拐されるなんて、変としか言いようがない。

大会が始まる前から既に、織斑千冬は優勝候補だった。もし、織斑一夏を誘拐するなら警備が薄い大会前でなく、決勝戦に出る選手の関係者として警備が厳重になるはずの日に誘拐するなんて内部に裏切り者がいるか、国家がテロ組織に力を貸したとしか考えられないから。

織斑千冬がドイツにいる間、篠ノ之博士（しののじ）が織斑一夏を守つていた可能性も否定できないけど。

今年、入学する代表候補で俺を除けば一人の専用機持つている。その一人、セシリア・オルコット？ という子は悪いけど眼中にはいと言つて良い。BT兵器の適正が高いだけ。

入学試験の時の映像を見せてもらつたけど、正直、酷いものだつた。

最低限の装備しかしていない日本製のISである打鉄（うづがね）を装備した教官に対して専用機持ちならノダメージで勝つて当然なのにダメ

一ジを受け、なおかつ、一十分もかかった時点で負けと言つてもおかしくない。

専用機と入試に使われる量産機（最低限の装備の状態）では、プロの野球チームが中学生の野球チームと試合すると同じ位、戦力差があるというのに。

政治に関するてもイギリスはBT兵器の技術を守る側であつてアメリカの技術を奪う気はないだろう。

もし仮にアメリカの技術を盗めたとしても実現するにはBT兵器の開発を中止しないといけないからな。その場合、コストの問題で正直、利口と呼べない。

確か、ドイツも今、AIC（慣性停止結界）の開発で忙しいはずだ。

まあ、AICはアメリカの第三世代よりも作るのに金がかかるのが問題と言つていたからな……表向きの第三世代だけど。

唯一、アメリカの技術を欲しがるとすればフランスくらいだろう。あそこには色々と大変だからな。

後、最大の懸念が更識櫛。さうしきかんりこの子については、ほとんど情報がない。IS学園の入学試験の映像さえも、公開されていないから本当に謎と言つても良い。唯一分かっているのは更識櫛無の妹であることだけ。まあ、アメリカ側の人間だけの話かもしれないけど、今後、ある程度、探ればいいか。

ふと、テーブルを見るとマナーモードにしている携帯電話が鳴つ

てこるのに気づいた。

携帯を開いてディスプレイを見ると、映し出されたこの瞬間はナターシャ姉さんだった。

「もしもし」

『リアム？ 大丈夫だった？ 道に迷わなかつた？ 変な人に絡まれなかつた？』

…… | いつも記憶にある。

「だ、大丈夫だよ」

『………… 本当?』

「本当」

『一応、信じてあげる。それで、今日、何か変わつたことは?』

若干、納得していなそつだけど、話しが進めるナターシャ姉さん。

「………… 更識権無が接触して來た」

『つーへ』

おやうへ電話の向こう側で絶句していくことだらう。

『ちょっと、リアム！ その話を詳しく話しなさい！ 最悪、上に報告しないといけない案件よ！』

「大丈夫。挨拶くらいだよ。向こうも、たぶん『俺』といつ人間性を見たかったんだと思つ」

『……本当に何もなかつたのね？ ちょっと、私はこれから本国を離れるから、なかなか連絡をとれないと思つけど……何かあればすぐに、イーリスに相談するのよ。くれぐれも無茶はしないよつに』

「え？ どなが演習でも行くの？」

『…………じめんなさい。機密だから』

「分かつた。それじゃあ、わざわざ、日本のお菓子をそつちに置くたんだけど無駄になつたかな？」

『何よ、それ！？ いつ、届くの？』

「え？ たぶん、四日後」

『ギリギリね、うん、受け取つてから行くから大丈夫。安心しなさ

「そつか、良かつた。じゃあ、しきみもう夜だから、寝るね」

『ええ、おやすみなさい。私のリアム』

「はあー。」

（反論じみつとした時には既に電話は切られたようすで、何を言つて

も返答はなかつた。

「はあ」

一度、盛大にため息をついた後に俺はベッドに横になる。

これから、大変になるだろ？

「どうじつ」とですか？」

時刻は未だ早い時間。

リアムは一つの演習場に呼びだされていた。

リアムの存在が一般のメディアに公開されたのは昨日のことだが、政府、つまり、各国の代表とE.S学園の関係者は一月ほど前、つまり織斑一夏がE.Sを起動させて三日後には知っていた。

「おまえは学生なのだ。高校に入学する場合試験を行つのは当然である？」

そう言つたのは、黒のビジネススーツをきつちりと着こなす美人、織斑千冬だった。

「……アメリカ政府および、EV社の許可は？」

エターナル・ヴァルキュリア

EV社、それはリアムの父が設立した会社であり、リアムのHSの開発を担当している会社である。

「むりんだ」

「……相手はあなたですか？」

「いや、違う」

それを聞いて驚くリアム。

「俺の戦闘データはこちらに届いていないのですか？」

「ああ、おまえに関しては、ほとんど情報は開示されていない」

「……だからですか」

「どういう意味だ？」

「俺は既にHS学園卒業後、正式にアメリカの国家代表になることが決定しています。どこかの誰かは学生の間に国家代表になっていますが。あれは特例でしょう。俺の相手をあなた以外の教師に務まりますか？」

「……思い上がるな。おまえは、私からみれば、まだまだ、新米しょじんしゃだ」

「分かりました。お相手いたします」

「分かつた」

そう言つて、ゼニかに通信すると一機のエリがこちらに近づいてくる。

「あれは……『ブラックティスクイーン練習の女王』…………そりが、エリ学園」…………

「本人の前でその名前で呼んでやるなよ」

苦笑気味で言つ千冬に

「分かりました」

リアムは素直につなぐ。

「お待たせしました」

近づいて来たエリはラファール・リヴァイヴ（疾風の再誕）。

フランスのデュノア社製の第一世代型だ。

それに関しては別に驚かない。

リアムが驚いたのは

「装備が完全ではない」……

「わづだ。試験用の装備だ」

そんなリアムの驚きを千冬は何事もなことひでひでのける。

「いへり、『練習の女王^{プラクティスクイーン}』が操ると言つてもあれは専用機持ちをなめていりでしょ」

リアムは千冬にしか聞こえないよつて話す。

「それでも、公平を期すためだ」

しかし、リアムの言葉は千冬に受け入れてもらえなかつた。

「…………」解しました

仕方ないのでリアムは『練習の女王^{プラクティスクイーン}』^{やまだ まや}と山田真耶の前に立つ。

「え　　ヒ、HSを展開してくださこ

「じでじますよ」

そう言つたリアムの服装は、おそらく学園の制服のままだつた。

I.S学園では寮以外の場所では基本的に制服の着用が義務付けられている。外出する場合は別だが。

「シールドバリアーは展開しています。問題ありません」

そう言つコアムに、普段温厚な真耶も多少、怒ったようで、目つきが険しくなる。

『Ready.....GO』

その開始の合図と共に

「来い、グングール！」

リアムは黄金に輝く槍を展開する。

本来、武器の名前を呼ぶのは初心者のすることなのだが、リアムは気合を入れるためにあえて名前を呼ぶ。

それと同時に真耶はラファール・リヴァイヴ（疾風の再誕）の装備であるサブマシンガンを連射する。

と、言つより、入試用なのでサブマシンガンしか装備されていない。

そもそも、I.S学園はI.Sを学ぶための学園である。

既にISを学んでいる代表候補生などを除けばISを動かしたことが皆無な人間ばかりを対象に試験する。

教師が使うISの装備はこれだけで十分なのだ。

たいていの生徒はISに乗っていたとしても、これを避けきれず

にエネルギーを零にされる。

真耶はリアムの右から左にかけて連射する。

これでリアムは左にしか移動できない。

もちろん、ISを装備しているなら上といつ選択肢があるのだが、
あいにくISを展開していないリアムにとつては違つ。

しかし

「そんな！？」

リアムは空を飛んでみせた。

それは見た真耶まるでリアムが生身の人間ではないように思えた。
しかし、これは普通のことである。ISは部分展開が可能なパワー
ドースツである。

その応用でE.Sが空を飛ぶ基本システムであるP.I.C部分展開
できたとしても、何もおかしくない。誰もしないだけであつて。

そんな真耶の驚きを余所にリアムは

「貫け！」

グングールつまり、黄金に輝く槍を真耶に向かつて投げる。

リアムが飛んだことににより動搖していた真耶だったが、そこは仮にも『^{ブラックティス}練習の女王^{クイーン}』の称号を得ている女性。

サブマシンガンでグングールの軌道を変えようとする。

しかし、弾いたはずのグングールは真耶に向かつて再び向かう。

「追尾性！？」

そうオデイーンが使つたとされる槍は相手に必ず当たつたとされていいる。

それを再現するために、この漆黒のグングールにはミサイルのように追尾する性能がつけられている。

例え、サブマシンガンを受けようとも、その中心に存在する核が^{コア}破壊されない限り、リアムが狙いを定めた相手に向かつて飛んでいく。

「ぐつー？」

真耶はグングールを回避するため、上、つまつ、空へ飛ぶ。

しかし、それは罠だった。

「え？」

この間にカリアムは真耶の田の前までやつて来ていたのだ。

「これでお終いです。デコランダル！」

リアムが握っていたのは、これも黄金に輝いているロングソード。ロングソードとは馬上では片手、徒步では両手で使つ剣である。

それが真耶の田の前まで迫つてくる。

真耶はそれをギリギリの所で避ける。

この奇襲を避けたのは真耶の経験がなせる技だろう。

しかし

リアムは口元を軽く緩める。

「あやあー？」

真耶はリアムのヒューランダルを避けるべく上に行くのを諦めて右

に移動する。

その回避方に驚いた。

リアムが初めに放っていたグングニルが真耶に直撃したのだ。

不意をつかれてしまったため、あきらかに軽傷ではない。シールドバリアーが発動してしまっている以上、かなりのダメージだ。

おそらく、いくつか動作不良を起こしている部品もある可能性がある。

なぜなら、ISを操縦している人間はシールドバリアーによって守られている。しかし、ISの装甲は実体を持つている攻撃を受ければ壊れるのは自然の摂理だ。

「終わりだと言ったでしょ？」

そこからリアムはデュランダルを使い、真耶を斬る。

それも装甲がない所を、つまり、シールドバリアーが発動する。

先ほど、グングニルに貫かれたために受けたダメージとの攻撃によつて受けたダメージは相当なものだ。

本来のラファール・リヴィアイヴ（疾風の再誕）ならば、ここで自らのダメージを受けるのを覚悟で手榴弾を使うのだが、生憎、試験のためにラファール・リヴィアイヴ（疾風の再誕）に備え付けられている装備はサブマシンガンだけだ。

「くつー!?

真耶は何とかリアムと距離をとるが

「終わりと言つたでしょ?」

いつの間にかリアムの手に戻つていたグングニルが、また真耶を貫く。

また、シールドバリアが発動する。

本来より試験用に少ないエネルギーしか積んでいないラファール・リヴァイヴ（疾風の再誕）のエネルギーはそこで零になつたのだつた。

試験が始まつてから、終わりの合図が聞こえて来るまでに三分しか経つていなかつたことにリアム以外にここにいた者は全員、絶句していたのだつた。

Episode 03 KZFの食事と試験（後書き）

女神「戦闘シーン手を抜きすぎじゃない？」

翼「戦闘シーン、あまり書きたくありません、ISでの戦闘シーン書くの難しいから……」

神「…………あんたねえ…………」

翼「だつて、この物語はロミコニケーションと心理描写がメインであつて、別にISでの戦闘重視じゃないんだもん！ 何のためにリームを究極無敵のチート機に乗せるのか！？ 早く戦闘が終わるから！ そのためです！（ちなみに、オーディンは未だに未完成）」
神「…………まあ、次回の展開は読めるけど…………真耶攻略、頑張りなさい。ちなみに、にじファンの口間ランキング、昨日の一十一時頃…………一位だつたわよ…………」

翼「はい！ 次回は真耶がメインのお話です！ それと、ランキングについては、応援してくださっている皆様、ありがとうございます！ ただ、そのプレシャーに若干、ジビツてます（汗 これからもよろしくお願ひします」

Episode04 KZFのシャワールーム（前書き）

活動報告の方に、リアムのプロフィール（専用機情報などを除く）を公開しました。

よろしければ、見てやってください。

Episode 04 KNFのシャワールーム

「す、すいませんっ、織斑先生、あれほど、新人に負けるなって言われてたのに」

今、俺はとても、後悔している。

早朝に呼び出されたことと、明らかに俺を舐めた学園というより織斑千冬の対応についつい苛立つて怒つて本気をだしてしまったけど……田の前で泣かせてしまっている女の子を見ると、ただ、罪悪感が押し寄せてくる。

業界で、つまり工IS業界では、知らぬ者がいない『練習の女王』その特徴を俺はすっかり忘れてしまっていた。

『^{ブラックティスクイーン}練習の女王』は涙もろい。

織斑千冬も若干、泣い顔をしている。

仕方ない。

「えっと、山田先生」

「は、はひー！？」

かなり齧えられてしまつてゐる。

『練習の女王』はナターシャ姉さんより上だつたはず…………だけど、顔が童顔なせいか、かなり幼く見える。俺よりも下に…………見える。

そんな『練習の女王』に向かつて

「申し訳ありませんでした」

頭を下げた。

「え、え？　ええー？」

「申し訳ありません。生意気なことをしてしまつて」

生意気なことをしてしまつたのは本當だ。

例え、いらいらしていることは、いえ、田上の人生意気なことをして良い訳がない。

「い、いえっ。私も完全な装備じゃなくて…………」

「それでもですか」

俺は頭を上げると、『練習の女王』の手をとつて、『練習の女王』

の田を真つ直ぐ見詰めながらそつと離れた。

「は、はふっ」

なぜか、山田先生は顔をなぜか真つ赤にして、俺の手を振りほど

いて織斑千冬の後ろに隠れてしまつ。

「織斑さんにも、申し訳ありませんでした」

「ふん、気にするな。それから、これからは教師だ。織斑先生と呼べ

「分かりました」

「それで、なんですか」

「どうした?」

「ここから近いシャワールームはどこですか?」

本当に寮まで戻つて浴びるのがベストなんだが、生憎、このアーナから寮までは結構な距離がある。

例え、今が春でも未だに少しだけ肌寒い、汗をかいたまま寮までの距離を歩くのはできる」となら避けたい。

「…………やうだな。ここアーナのシャワールームを使いつらう。ただ……」

「はい、女子用しかないんですね」

このアーナはこの部屋をするためのアーナ。

つまり、女性しか使用しないのだ。

わざわざ、必要ない男子用のシャワールームを作るはずがない。

「それなら、山田君」

「は、はいっ！？」

「申し訳ないが、イーリーをシャワールームに連れて行つてやつてくれないか？ 私はこの後、少々、外部の人間と会わないといけないものでね。時間がないんだ」

「え、でも…………そのお…………」

何か申し訳ないことをしているような気がする。

「すいません」

やつぱり寮に帰ります、と言つより早く織斑先生が口を開く。

「山田先生、仮にもあなたはこの春から教師になるんですよ。生徒にシャワールームを案内することくらいはあるでしょう」

まるで親が子供にわざよつて織村先生は『練習の女王』^{プラクティスクイーン}そう言つ。

「…………そうですね…………分かりましたっ！ 頑張ります」

大きな二つの膨らみ前でガツツポーズをとる『練習の女王』^{プラクティスクイーン}教師に向かつてこんなことを言つものじやないけど、一瞬、可愛いと思つてしまつた……

「では、え　　と」

「リームです。リーム・イーリー。これからよろしくお願いします
ね」

「私は山田真耶です。」ムツヤマヤ

「では、後はお願ひします」

そう言つて織斑先生はどうかに行ってしまった。

「では、私達も行きましょつか」

「はい」

そう言つた時だった。

山田先生が何もない所で躊躇いた。

俺は咄嗟に体を山田先生の前に滑り込ませる。

そして、受け止める。

幸いなことに山田先生の背は俺よりも遙かに低い。

そのおかげで、なんなく受け止められた。

しかし……山田先生の女性特有の膨らみが俺の胸にあたる……

「す、すこませんっ！？」

慌ててビリビリとするから余計に俺の胸に山田先生のが……あたる。

それもHISースツは基本的に昔の日本のスクール水着のようなスツだ。

直に感触が伝わると言つても過言じやない。

それも山田先生のHISースツは扇状に胸の部分が開いていて胸が見える。俺の胸に当たって潰れているせいでの、それが余計に強調されている。

正直に言つて男としては、非常にまずい状況だ。

「す、すぐこじらきますからっ！」

そう言つてくれるが……山田先生は足を絡ませて、もう一度、俺に倒れ込んで来る。

うつ、考えないよつこじしていたけど……山田先生の胸つてナターシャ姉さんよりも……大きい。

つ！？ 俺は何を考えていたんだ。

「山田先生…………俺に任せてください。体の力を抜いて…………」

「え? あ、はひ…………」

ふう、俺はゆっくりと息を吐きながら、山田先生の肩を持つて立たせてあげる。

「ありがとうございます」

山田先生はモジモジしながら、少し涙目でじらりを見てくる。

「い、いえ」

「そ、それじゃあ、シャワールームに行きましょうか!」

無理矢理といった感じで元気を出して、シャワールームに案内してくれようとする山田先生。

良かつた…………あんまり氣にしてないようだな。

少し離れた所で、本当に小さくだけど山田先生は

「…………どうしようつ…………もひ、お嫁にいけない…………」

と、山田先生が言つてこいるのを聞いてしまつた。

……山田先生が初といふのもあるんだらうけび、あれほど、胸を不可抗力とは、いえ、異性に押し付けてしまったのは乙女としてはいけないことなのだろう。

俺にできることと言えば……

「山田先生！」

「はひい！？ 何ですか！？」

「もし、誰の所にもお嫁にいけないなら、俺がもらってあげますよ」

微笑みながら、そう言つ。

もちろん、俺が山田先生のよつな美人を本当にお嫁にもらえるとは思っていないし、それは失礼にあたるだろつ。

だけど、やつぱり、事故とは、いえ、俺が傷つけてしまつたんだ。

責任くらいはとるわ。

「つー？ あ、いえ…………その…………でも…………あの、わたひい…………あつあつ」「

顔を赤くする山田先生。

やつぱり、男にこんなことを言われた事なんてないような初な人
だったのか……俺も言つたのは初めて、だけど……

それから、俺は真っ赤なトマトみたいな顔をした山田先生に連れ
られてシャワールームに向かつたのだった。

皆さん……初めまして、山田真耶ですう。

今年から先輩である織村千冬先輩と同じEJ学園に勤務すること
になりました。

本番に専ら弱かつたため代表選手には選ばれなかつたのですが基
本的な技術が認められて見事、EJ学園の先生に抜擢されたんです。

織斑先輩もいるし、本当に楽しくなるだろつ、と思つていました

しかし、私はそつそつに失敗してしまいました。

世界で初めてEISを使える男の子である織斑一夏君のEISの試験を受け持つました。

そこで私はてんぱつてしまつて織斑君に突撃してしまいました。

そして、それを避けられて……負けてしまいました。

物凄く、怒られました。

織斑先生が一緒に謝ってくれたので、なんとか首にはなりませんでしたが。

その名譽挽回をすべく、もう一人の男の子のEIS操縦者であるアメリカの子の試験を受け持つました。

その子は織斑君とは違い、専用機を持つているそうなので、私も頑張らないと！ と思い気合をいれて、アリーナに出たのですが……結果は惨敗。

相手の男の子はEISの展開すらしていません。

「なんだから『ブラックティス練習の女王』なんて呼ばれてしまうんだと思います……」

模擬戦では全勝……公式戦では全敗……だったから、つけられた名前。

EIS学園では、そんなことを言われないように頑張るつもり思つたのに……

そして、落ち込んでいた。「男の子をシャワールームに連れて行くよ」織斑先生に言わただうつよ、男の子と何て……喋つたこともなこのこ……

でも、イーリー君は悪い子じゃなさそうなので……勇気を出して連れて行こうと思いました。

すると……何も無い場所で躊躇してしまいました。

ああ、私つて何でこんなにダメな子なんだろう。

そう思つた時だった。

イーリー君が抱きとめてくれた。

だけど……その……男の子に胸を押しつけてしまつた。

じとんことしたことないですし……

恥ずかしい。

恥ずかしさを紛らわすために、何もなかつたかのようこ、「そ、それじゃあ、シャワールームに行きましょうかー。」

と言つた。

そして、少し言つた所で、ふと無意識の内に

「…………おひこね…………もつ、お嫁にいけない…………」

と、呟いてしまった。

そんなことを呟いてしまったことで、やがて顔が真っ赤になる。
何を言つているんだろう……

自己嫌悪に陥つてしまいそうになつた時、後ろからイーリー君が

「山田先生！」

「はひい！？ 何ですか！？」

声をかけてくれました。

そして、彼は

「もし、誰の所にもお嫁にいけないなら、俺がもらつてあげますよ」

そんなことを言つてくれます。

「うー！？」

私とイーリー君は教師と生徒なのに……でも、イーリー君の顔
を見ていたら……見ていたら……胸がどきどきしました。

こんな気持ち初めてです

織斑先生を見ていて思つ憧れとは違います……

そんな訳の分からない感情が私の胸の中に渦巻いていたから……

「つー? あ、いえ……その……でも……あの、わたひい……あうあう」

そんな変な返事しかできない……

それから、私は何も言わずにイーリー君をシャワールームまで案内します……

「先にどうぞ」

そう言ってくれるイーリー君……

「い、いえ、私は先生ですから、あ、後で構いません」

動揺しているのがまる分かりです……

「分かりました。では、お先に失礼します。申し訳ありませんが、誰も入ってこないよう見張っていてもらいますか?」

「…………わかりました」

イーリー君は、何事もないようにシャワールームに入つて行く。

ああ、私…………教師なのに……

でも、イーリー君が気をつかつてなのかもしれないけど……

… 言つてくれた言葉…………嬉しかつたなあ。

もしかしたら、私はHHS学園やめても永久就職できるのかなあ…

「ふう」

俺はシャワーを浴びながら、さつきのことを想える。

責任をとると言つたことに躊躇はないし後悔もない。

でも、やっぱ、もう少しだけ、色々なことを知つてから言つべきことだわ、さつきの言葉は女人の人にとつて一生が決まる言葉なんだから。

だから、反省は必要だ。

これからは、もう少し違つた慰め方をしよう。

今度、ナターシャ姉さんに相談するのもいいかもしない。

でも、ナターシャ姉さんも、ああ見えて俺という邪魔者がいるから彼氏とかいないだろし。

ISの操縦者は職場に出会いがないからなあ。

それも色々問題だな。

前にナターシャ姉さんの親友のイーリスさんが言っていたけど、IS操縦者というだけで合コンなどをする場合も敬遠されるらしい。

主に男の方が恐縮してしまって合コンにならないからだとか。

時々いる、勇者も、ほとんどが口だけのチキンだって言ってたからな。

そんな人にナターシャ姉さんは任せられない。

俺つて……シスコンなのかな？

でも、やつぱり、ナターシャ姉さんには幸せになつて欲しいし。

……と、話しがズレたな。

うん、今度、誰かに相談することにしよう。

さてと、あまり外で山田先生を待たすのも悪いし、出るか。

俺は備え付けられていたタオルを使って体を拭くと、また、制服を着なおす。

この時、既に太陽は真上、近くなつていのに俺は気づいていなかった。

Episode 04 KZFのシャワールーム（後書き）

女神「また、発動したわね！ KZF！」

天童翼「…………今日はリームが口説いただけのような…………」

神「違うわよ！ 今日は山田が落ち込んでいる状態で、励ましの意味もこもつての言葉よ！ ポ モンで言つなら効果抜群よ！…」

翼「………… そんなのかな？」

神「ええ、そうよ！ だけど、そろそろ、メインのヒロインを食べて欲しいわね………… ジュルリ」

翼「…………怖い…………ガクガクガク」

神「震えていても仕方ないわよ！ わたわと、次の話を書きなさい！」

翼「はひい！」

Episode 05 KZF、お嬢様遭遇す（前書き）

次回からは更新時間を07:00に変更します。
ご了承ください。

Episode 05 KNF、お嬢様遭遇

HS学園、それはある意味で俺にとって最悪な場所だ。

なぜなら、俺の性別が男だから。

そう、男と女で別れていて一番なこと困るもの……考えてもらえば、すぐに分かる。

それは『お手洗い』だ！

生理的現象のため、これをしないで一日過ごしていいことは不可能

そういう、俺も人間であるため、この現象は存在する…………だから、お手洗いに行く必要がある…………

事の発端は山田先生と別れて飯でも食いに行こうと思つていた時だ。

壁に備え付けられていた時計を見ると、時刻は十一時半。

うそ、昼飯にはちょうど良い時間だ。

しかし、ここで思い出してしまつた。

俺の試験は急な呼びだしだったため、朝からずっとお手洗いに行つていなかった。

いや、正確ではない。

正確には昨晩、寝る前に行つたのが最後になる。時間的には、ほんの一時間程経過している……

人間、意識すると急に行きたくなるものである。

しかし、ここは天下の女の園、IIS学園、男が使用できるトイレなど、外来用に備え付けられた職員室か事務所の横しか存在しない。後は、俺の自室ということになる。

ちなみに、俺が今いる所は、そのどちらからも遠い学校の食堂付近である。

山田先生がIIS学園の食堂が今日は祝日だけ営業していると言つていたので向かっているんだけど……

非常に不味い。

何が不味いかは鈍感な人以外は気づいてくれているだろう。

嫌な汗が背中を伝つ……

俺は事務室の横にある天国に全速力で走る。

確か、IIS学園の規則には廊下を走つてはいけないというものが

あつたが、今は緊急事態だ。ロシアがアメリカに向かつて核弾頭を発射しようとしている時くらい、やばい。

「この歳で、漏らしたなんて……俺は高校生活をIS学園で送れなくなってしまう。

それも、ここには各国から色々な人がいる。

やばい……これからIS関係の職につく場合、非常に不味い！

一瞬、ISを使おうか？ という誘惑もあったが、そこは厳しい規則により制限されているので、使えない。

ああ！ 何のために！ 存在するんだよ！ IS！

少なくとも、^{トライレ}天国に行くために存在するパワードステップではないことは知っているけど！

俺は走る。

ただ、走る。

天国に向かって。

周囲から色々と声が聞こえるけど、全部、無視！

よし、もう少し！

トライレ
天国が見えた時のことだ。

俺の目の前に俺と同じ金色の髪の女が飛び出して來た。

スカートをひざ下まで伸ばしているお嬢様風の女の子。余談だけ
ど、IIS学園の制服は改造? 可なので、大抵はミニスカートに皆、
改造している。そういう俺も長いスカートよりも、短いスカートの
方が好きなのは秘密だ。

「 チェルシー、事務室はこちちらで合っていますの?」

……思い出した、こいつはイギリス代表候補のセシリ亞・オル
ゴットだ。

急ブレーキをかけようとするが、間に合わない。

ドンと効果音が聞こえてきそつな程、綺麗にセシリ亞とぶつかっ
た。

「 きやあつー?」

俺がセシリ亞を押し倒す形になつて一人で転倒してしまつ。

……ナターシャ姉さんに見つかつたら大目玉だな。今、本国だ
から大丈夫だろうけど。

「 な、なんですかー? あなたは!」

俺の下敷きになつているセシリ亞・オルゴットは焦つたよつこ
う言つ。

そんなセシリ亞に対しても俺は、素早く立ち上がり、

「ぶつかつてしまつて、すみません、時間がないので、失礼します」

それだけ、言い残して天國に抜け出す。

「え？ ちょ、ちょっと待ちなさい！ 男のくせに私にぶつかつて、それだけですの…」

……女尊男卑の風潮が彼女にこんなことを言わせるんだろう。何が男女平等な社会だ。聞いてあきれる。

でも、今はそんなことを気にしている場合ぢゃない。

余談だけど、無事に俺は天國に辿り着くことができた。

無事に天國に辿り着いた俺は毎食を取るべくトト学園の食堂に向かわなかつた。

正確には一度、部屋に戻つて色々してから行こうと思つたのが間違つた。

俺の携帯を開いてみたら……着信回数二十六回、メール件数三十五通という、よく分からぬ状況になっていた。

メールを開こうとした時に三十七回目の着信が入った。

「もしもし」

俺が電話をとると

『若様！ オーディンを使ったとは本当ですか！？』

スピーカーから、大音量の声が聞こえてくる。俺の恩人である女性の一人だ。

「レーナさん、声が大きいです」

レーナ・アンクシャス。エターナル・ヴァルキュリア現E.V.社の社長にして経営、政治に関しては父さんに匹敵する程の天才。いや、この二つに関しては父さん、

さえ、上回るかも知れない。まあ、究極に運動ができない人だけど。

『も、申し訳ありません、若様……』

「大丈夫です。まだ、オーディンは使っていません。使ったのはグングニルとデュランダルだけです。二つとも能力は最低限しか使っていませんし」

『…………ですか…………それでも申し訳ありません。こちらのミスです。アメリカ政府の動きをよみきれませんでした…………まさか、この段階でオーディンでの戦闘をさせようとするとは…………』

「たぶん、EVAを良く思わない一部の官僚の仕業でしょう。だいたい、五星はついているんでしょう？」

『はい』

さすがは……レーナさん。

『近日中にアメリカ政府から追放しますよ。そういう輩は裏金に絡んでいる場合が多いですから』

「そうですね」

『それでですが、若様、やはり、オーディンのDQを完成させるべきです。若様の安全のためにも、あのシステムを不完全な状態で使用すれば、どうなるか分かりません。例え、若様の母君が開発されたシステムだとしても』

今、レーナさんが言つた母といつのは俺の生みの親のことじやない。俺のもう一人の母親の方だ。

「…………どうしても？」

『ナターシャさんにも先ほど、了解を得ました。すぐに本国に戻つて来てください。飛行機はこちうで用意させました。若様のオーディンは我々の希望でもあるのですからお願ひします。IS学園の始業式の日までには調整は完了しますから。それに母君も、きっと若様にはできる限り万全の状態でDQを使ってもらいたいはずです』

「…………分かった。戻るよ。フライテの時間は？」

『今から空港に向かつてもらえれば、ギリギリ間に合ひ便を用意しました』

といつゝ、やりとりがあつたため、俺は朝から何も食べずに本国に戻ることになった。

……腹減つたな。

「ふつ」

私は若様、つまり、私の恩人であるリアム・イーリーに電話をかけた後、政府の高官のリストを見ながら思考する。

若様は私が尊敬しているのは『若様のお父君』と、思われているようだけど、私が尊敬しているのは『若様のお父君』ではなく『若様』だ。

そもそも、私がこのEV社に入るきっかけも『若様のお父君』ではなく『若様』のために何かしたいと思つたからだ。

エターナル・ヴァルキリア

あれは、まだ、私が一般人ではなく、政府の高官を相手にするスパイに近いことを行つていた時のことだ。別に犯罪をしていた訳じゃない。ただ、お酒の席で政府の高官に近づいて極秘の情報を引き出したりするのが仕事だった。

そんな仕事をしていた、ある日、ある会社からEV社エターナル・ヴァルキュリアという会社の社長から情報を引き出して欲しいと依頼された。報酬は十年程、遊んで暮らせる額だった。もちろん、成功報酬の方だが。

そんな美味しい話しあるはずがない、と思い、調べてみると、その会社は私にそれだけの額を支払つても情報を欲したのには理由がきちんとあつた。

日本の科学者が作つたパワードースーツEV-Sの兵器開発権をEV社エターナル・ヴァルキュリア

にとりれそうになつっていたのだ。

確かに、EVの兵器開発には金がかかる、と聞いていた。もちろん、政府の高官からだけど。それを行うには、どうしても政府の援助が必要になる。

仮にその会社が政府の援助をEV社エターナル・ヴァルキュリアにとられてしまつた場合、たちまち資金が底をつき、倒産してしまつ。

私に来た依頼はどの政府の高官がEV社エターナル・ヴァルキュリアを支援しているかを調べることだった。おそらく、その政府の高官に裏金を渡して支援を漬す算段だろう。

主要な人物は分かるが、表立っていない高官は分からないから私に調べて欲しいのだろう。

エターナル・ヴァルキュリア
EV社の社長は女好きらしいから、簡単だうとたかをくくつていた。今まで誰にも肌を許したことのない私にとつては。

しかし、その考えが甘かつたことを知るのは、EV社の社長つまり、若様のお父君と話した時だつた。お酒の席で一緒になり、そのまま、ホテルなどへ、と思っていたのだけど、若様のお父君に案内されたのは若様のいる本宅だつた。

……三人の奥方に紹介するから、と言つて連れて行かれました。私を連れていったことが初めてではないよう奥方達は笑顔で迎えてくれました……

夜が遅かつたこともあり、私はイーリー家に泊まるように言われました……

こんなことは初めての私が戸惑つている間に泊まる用意を完了させたイーリー家人達によつて強制的に泊まらせられました。

その時点でのイーリー家は異常だと思っていたのですが、その家長男は私の想像を遥かに凌ぐ存在でした。

彼は私に会つた途端に

「大丈夫?」

と、聞いてきました。

さすがに、情報を聞きだすまでは愛想よくしないといけないので、私は

「心配してくれて、ありがとう。お姉さんは別に余所のお家に泊まつても、しんどくなじよ」

と囁いた。

そこで若様は……

「違うよ。お姉さん、辛そうな顔してる」

と……確かにそう囁いた。

今まで、こんな仕事をしていの私をあざ笑つかのよつな視線は受けたことはあった。

だけが、こんなまるで、実の親が実の子を心配してくれるよつな視線を受けたのは初めてだった。

私には家族はないから……

「…………僕、お姉さんは大丈夫なんだよ」

「ダメ。お姉さんは、無理してる。無理してたら、辛いよ。だから

そう言つて若様は私を二人の母君の元へ連れて行ってくださった。

「ママあ　　」

「なに？　リアム」

「この人、辛そう。だから、助ける」

「……………私は……………」

困ったような顔を浮かべた私に若様の生みの親であるリーナ様は

「ふふっ、そうね。一緒に何か楽しいことをしてあげなさい」

「うん！　だから、お庭に出るよー！」

その日、まる一日、私は若様と外で遊ぶことになった。

若様が言つてくれる言葉一つ一つに温もりを感じた。

日が傾いて来た時だった。

「じゃあ、戻ろうか

若様の言葉を聞いた時に気づいた。

私は既に大人だとのに若様と遊ぶことに夢中になっていた。

まるで、親が子供に甘えるように若様の言葉を遊びに甘えていた。

その日、私は生まれ変わることを誓つた。

それにから私はEV社^{エターナル・ヴァルキュリア}に就職し若様の助けになろうと必死に努力して副社長という地位についた時のことだ。

社長と奥方の死。

リアム様は一人になった。

私は若様を引き取りたかった。

だけど、若様はナターシャさんという方に引き取られた。若様の親類であつたし、若様の決定に私は異を唱えなかつた。

そして若様は私にEV社^{エターナル・ヴァルキュリア}を任せてくれた。

若様の母君の一人であるムーラ様が提唱したDQと共に。

……私はそこで再び誓つた若様に完璧な状態のEV社^{エターナル・ヴァルキュリア}とムーラ様が残したDQを守ると。

もちろん、若様のこともできる限りサポートしていくつもりで。

やつと私が社長代理に就任して落ち着いた時だった。

若様が IIS を操縦できることが分かった。

正直に言つて、若様ならできそうな気がして仕方なかつたので別に驚かない。

私は若様をモルモットにされないために、ナターシャさんと社長の親友である軍人のタリスさんと共に色々と根回しをした結果、E イターナル・ヴァリュア・V 社の専属パイロットにすることができた。

これで、私は本当の意味で若様に全てお渡しできる。

私は信用できる数人の部下と共に DQ 搭載 IIS オーディンを開発した。

技術的なことはムーラ様が提唱されてるので、正直、開発は難航しなかつた。

唯一の問題があるとすれば誰も扱えなかつたことだ、オーディンを。

若様を含めて。

一時はオーディンの開発は中止されようとしていた。

しかし、若様がムーラ様の遺品の中から最後の一ピースを見つけてくださいった。

キーボードシステム。

IIS をパソコンと同じようにキーボードで操作するシステム。誰

も思いもしなかった。

だけど、これで膨大な情報処理が可能となりDOは完成した。もちろん、並みの人間には扱えなかつた。だけど、若様は問題なく使用できたので問題ない。

そして、最後の調整をしている最中に若様はTJS学園に入学することが決まり、日本に行つてしまつた。

後は、想像通りになつた。

不完全な状態でのグングニルとデュランダルの使用……まあ、これには一部の政府の官僚が関与していたのだけど。

そして若様の安全を確保するためにDOを未完成ながらも調整する必要がある。

だから、一度、若様には本国に戻つて来てもらひつ。

ああ、不謹慎ですが、若様に会えるのが楽しみで仕方ない。

そして、ムーラ様が提唱されたDOを若様に完全に近い状態でお渡しできることも。

先行試作第五世代TJSオーディンと共に

女神「これは…………微妙…………」

翼「え！？」

神「なんで、こんな微妙なことするの？　ぶつかった拍子にキスくらいしなさい！」

翼「でも、オルコシトさんは…………戦闘『テレ』でしょ？」

神「はい？」

翼「戦闘して善戦したら『テレ』るといつ、新しい萌えなんでしょう？」

神「…………原作で『テレ』ているから…………否定できないわね」

翼「でしょ？」

神「それでも先行試作第五世代IS…………束さん、でも、『まだ』第四世代だつたわよね」

翼「いいんだもん！　思いついたからー　文句を言われても変えないもん！」

神「他の一次作の時と違つて、ここで翼つてなんか子供じゃない？」

翼「だつて！　自分がどこに向かいたいのか、分からんいんだもん！」

神「…………ダメだ、『ヒーフ』…………とりあえず、読んでくれている人にお礼をいつときなさい、ちなみにレーナさんはリアムのKZFの餌食になつてるわ。一応、最後に言つておいてあげる」

翼「こんな、作品ですが、読んでくれてありがとうございますー。」

「げつ！？ 関羽！？」

……俺が所属するはずの教室であるTIS学園一年一組から痛そ
うな音が聞こえてくる。

おそれく拳骨でも落とされたのだらう……

それに声からしておそれく男、……おそれく、この声の主が織斑
一夏だらう。

さて、なぜ、俺が授業が始まっているのにも関わらず廊下にいる
かといふと話は簡単だ。

エターナル・ヴァルキュリア
EV社がある本国に戻ったはいいが俺の専用TISであるオーディ
ンの調整にかなり時間がかかつたためだ。

まあ、そのおかげで、オーディンは完成したと言つても過言では
ないんだけど。というより、開発者であるムーラ母さんが死んでし
まっているため、これ以上の発展は不可能に近いと言つても過言じ
やない。俺も機械を弄るのは好きでも開発は専門外。

もし、オーディンの発展形を作れるとすれば、TISの開発者であ
る篠ノ之博士位だらう。まあ、あの人は今、どこにいるか分からな
いため、頼みようがないんだけど。

今、思えばムーラ母さんは何かを開発する面においては篠ノ之博
士を越える天才だったのだらう。もし、ISがなければムーラ母さ

んがEISに近いものを開発していただろう。

現実逃避はこれくらいにして俺は扉を開けることにした。

おそらく中で何か喋っているのは織斑千冬…………いや、織斑先生。

さつきから女子の悲鳴に近い叫び声が聞こえてくるのが良い証拠だ。

織斑先生はEISを操縦する女の子達の憧れの的だからな…………初代モンド・グロッソ優勝というのはそれほどまでに、凄まじい意味を持つているからな。

まあ、できレース…………悪く言えば詐欺みたいなもんだつたんだけどな。初回は。

未だに世界では第三世代を開発するのに、手間取っているのにあの時、既に織斑先生のEISは第一世代後半の力を有していたのだから勝てるはずがない。

勝つたものがいるなら、それは正真正銘の化け物だらう。

それにEISを開発段階から操縦していたのなら、誰よりも操作技術が上手いのも頷ける。

だから、機体と実力、両方の面から見ても織村先生は勝利して当然だ。

昔らか変わらないらしいスライド式の扉を開けると、そこには眉を吊り上げた織斑先生の姿があった。

生徒の方はキヨトンとしてしまつている。

「すいません。遅れました」

俺は何でもないよう言ひへ。

現に仕方なく遅れたんだ。

怒られる要素はどうにもない。

「…………話しさ聞いている。おまえの席はそこだ。さつあと座れ」

あきらかに、めんべくそいつな織斑先生を視界に残しながら、指定された席へと向かう。

余談だけど、山田先生もこの教室にいた。

初代ブリュンヒル^{ブランティス・クイーン}デ、『練習の女王』、世界で15を使えるたつた二人の男……後は、篠ノ之博士の妹。

あきらかに誰かの作為を感じる。

それだけ、織斑一夏を大切にしているのか、あるいは……『亡国企業』が動きだしたのが問題なのだろう。すでに、アメリカの工Sは一機、奪われたからな……国家機密だけど。

「お、お、男？」

俺が指定された席は織斑一夏の隣の席だった。

まあ、たつた一人しか男はいないんだ。当然と言えば当然か。

「初めまして、織斑一夏君、俺はリアム・イーリー」

「あ、ああ。よろしくな」

たぶん、良い子なんだろう。

「よろしく」

「いらっしゃい、私語は慎め」

織斑先生は頭に手を置きながら「いらっしゃいを見ている。

」の後の展開が読めているのだらう。

かくいう俺も耳に指をあてる。

そんな俺の動作を見て織斑一夏は首を傾げている。

「お、お、お」

誰か知らないけど一人の女の子が現実に戻つて来たようで、声が聞こえ始める。

『二人目の男おおおおおおおおお！？』

その後、クラスの大半の女子がそう叫んだのだった。

「な、なあ、イーリー……さん？」

「何ですか？」

今は一時間目が終わった休み時間。

織村一夏が俺に話しかけて来た。

俺、個人的な意見を言わせてもらえば、織村一夏のことは嫌いじゃない。というより、好きでも嫌いでもない。彼はおそらく、篠ノ之博士の最大の犠牲者の一人なのだから。

だつて？ そだら？ ISを動かせたことで世界各国どころか、本当の意味で『亡国企業』に誘拐される可能性まで出て来たんだから。

「本当にISを動かせるのか？」

「はい、動かせますよ。嘘をついても何の意味もありませんし」

「そ、そうだよな！」

織斑一夏は少し嬉しそうな顔をしている。やっぱり女ばかりの空間で男が一人というのは色々な意味でしんどいからな。

……先日のお手洗いで俺も痛い目をみたし。

「あのや、 HIS学園のたつた一人の男なんだし、 もう
そういうことか。

「ああ、 改めて、 よろしくだな。 俺のことはリックでいいよ

「じゃあ、 僕も一夏で」

「よろしくな、 一夏！」

「おひ

嬉しそうに笑う一夏。

基本的には俺は女人と初対面の人には気を使つて丁寧に話をするが、 男の友達は別だ。 気を使わずにフランクに話す。

そういう間に一夏に一人の少女が近づいてきた。

彼女は篠ノ之博士の妹、 名前は^{まゆか}篠。

おそらく彼女も姉である篠ノ之博士のせいで普通の学校では生活できなかつたのだろう。

HIS学園は厄介事を一つに纏めておくには恰好の場所だからな。

さて、 一夏が連れていかれてしまったので俺は女子ばかりの教

室で一人になってしまった。

別にこれ 자체には、戸惑わない。

これでも少しの間、ナターシャ姉さんと共にアメリカ軍のIIS部隊にいたんだ。問題ない。

「ちょっと、よろしく？」

事態は俺が考えていたよりも斜め上にいったのを、この時の俺は気づいていなかつた。

「何でしょ'うか？」

ふり返つて見ると、以前、事務所の前でぶつかつた少女であるセシリア・オルコットが立つっていた。

しまつた、彼女、同じクラスだつたのか。

「先日は失礼しました。なにぶん、緊急の用がありましたもので。それでご用件はなんでしょうか？ ミス・オルコット」

「ふんつ、多少は礼儀をわきまえているようですが、未だに自分が犯したことの重大さがわかつていないうですわね」

「謝罪はさせていただきましたが、それではお気にめさないのですか？」

「まあ、まだ、分からぬのですの？」

「だから男は、と付け足すセシリア・オルコット

「申し訳ありません。分かりません」

「教えて差し上げますわ。あなたはイギリス代表にして、入学試験におけるトップである私にぶつかったのですよ？ 謝罪のために下僕、いえ、奴隸になる位のことをしてみせたら、いかがですか？」

「……………」

一応、じつうが悪いので下手に出る。

俺は一応、常識人のつもりだから、馬鹿をいちいち相手にしない。

「どうしたんだよ、リアム」

そこで篠ノ之博士の妹さんを連れた一夏が教室に戻つて来た。

「あら、この方にあなたが、起こした罪を話していませんの？」

「罪？」

「ええ、この方は先日、私にぶつかったのです

「はあ？ そのどこが罪なんだ？」

「夏…………疑問は分かるが、こいつ輩には関わるな。

「まあ、無能の友は猿です。さすがは極東の地」

「夏も、さすがに驚きすぎて、何も言い返せないようだ。

「仕方ありませんわね。あなたのような無能の上に立つのは上の者の務め、今回は寛大な私は許してあげますわ」

そして高らかに笑うセシリ亞・オルコット。

はあ、何とか馬鹿の気は済んだらしい。後で一夏に礼を言つておこう。

ちょうど、チャイムが鳴った。

扉の方からコシコシと靴の音が聞こえて来る。織村先生か山田先生が近づいて来たのだろう。

自分の席に戻ろうとした所で、セシリ亞・オルコットは思いだしたように言う。

「あなたのような無能を生んだ親の顔を今度、ぜひ見せていただきたいのですわね」

「ああ、何て言つたんだ?」

「え？」

教室の扉が開く、そこに立っていたのは織斑先生だ。

でも、俺は構わず、もう一度、問う。

「今、おまえは句で言つたんだ？」

たぶん、怒氣を飄しきれていなー。

「おい、イーリー。授業だ。座れ」

織斑先生の言葉を無視して叫ぶ。

「テメエは今、何て言つたか、聞いているんだよー。馬鹿女ー！」

「あ、あなたのよつな無能を生んだ親の顔を見たい、と言つたのですわ！」

「外に出るー！俺のことをこう悪く言つても構わない！ださぞ

な！俺の親を侮辱するなー！」

「おい、イーリー、貴様、今、授業中だというのが聞こえなかつたのか？」

「黙つていってください、織斑先生！俺はー！」

「頭を冷やせ」

織斑先生は俺に向かって拳を放つがそれを俺は避ける。

「これだけは譲れません」

俺は織斑先生の目を真っ直ぐ、見据える。

「…………はあ、どうしても、か？」

「はい」

「分かった。それなら、午後の授業が終わった後、アリーナを使って決闘でもしろ。しかし、今はダメだ。オルコットもそれで良いな？」

「もちろんですわ。その思い上がりを私が叩きのめしてあげますわ」「そういう訳だ。イーリー、おまえも席につけ。おまえが誰であっても今は私の生徒だ。教師の命令に従え」

「…………分かりました」

「見苦しい所を見せたな」

俺は苦笑気味に一夏に声をかける。

「いや、そんなことないって。リアムにとつて、両親つて大事な人

達なんだろ？」

「…………ああ、大事な人達だった」

「え？」

「もう死んだんだ。日本でもニュースになつてたんじやないか？
ロサンゼルス爆破テロ」

「あ、あの、死者、五百人を出した…………そつなのか？」

「ああ、俺の両親四人はそこで命を落とした」

「…………『ごめん』」

「いや、もう気持ちの整理はついているよ。だけど、やつぱり、親
を馬鹿にされると、な」

「…………そつか。リアムはいいな。そんな誇れる位、立派な親がい
て」

「ああ…………ごめん。一夏も…………」

「いや、俺も気にしてないからさ。ち、飯食いに行こうぜ。籌、い
や、篠ノ之も誘つていいか？」

「ああ」

「筹、飯食いに行こうぜ」

「筹」

良い奴だな、一夏つて。

俺も両親のことと言われたら、すぐにキレる癖は直さないとな。
でも、どうしても、これだけはな……

はあ。

「だから、私のことは放つておけと言っているではないか、一夏……」

俺が考え事をしている間に一夏は篠ノ之を連れて來た。

「初めまして篠ノ之さん、俺はリアム・イーリーです」

近くまで來た所で俺は一応、挨拶した。

さつきのセシリ亞・オルコットとの会話でクラスの人が俺に近寄つてこなくなつてしまつたかな…………一応、一夏とセシリ亞・オルコット以外の人で初めて話すことになる。

「あ、ああ。私は篠ノ之篠だ」

「何、恥ずかしがつてんだよ、篠」

一夏はニヤニヤしながら篠に手をつかつて。

「なー? 私は恥ずかしがつてなどいない!」

顔を真っ赤にしながらそりそりと篠ノ之。

もしかして…………篠ノ之は一夏のことが好きなのか？ 授業中も何度も一夏のことを見ていたし。一夏はイケメンだから、モテテも不思議じゃないからな。

「はいはい、リアム、お待たせ、食堂に行こうぜ」

「ああ」

一夏は篠の手をがつちりつかんでズカズカと歩きだす。篠ノ之も満更でもなさそうだし。これはやっぱり。

俺は一人のことを微笑ましく思いながら後を追うのだった。

リアム・イーリー。アメリカ所属のIIS操縦者。

本国からはなるべく、この男に近づいて誘惑してもイギリスに引き込むよつに言われていますが…………正直に言つて最悪ですわ。

まず、初対面はIIS学園の事務所の前の廊下でしたわ。

それも**わたくし**私にぶつかるなんて、男の分際で。

寛大な**わたくし**私はですから、誠心誠意、謝れば許してあげませんこともあります。何でも今はまだ色々と事情があつて話せないそうですね。**わたくし**私は寮に荷物を置くとすぐに彼を探しました。

これほどまでに侮辱されたことはありませんでしたわ！

わたくし私は寮に荷物を置くとすぐに彼を探しました。
わたくしきちんと、**わたくし**私に謝罪させるために。

しかし、事務所は彼の部屋の場所を教えてはくださいませんでした。何でも今はまだ色々と事情があつて話せないそうですわ。**わたくし**私が聞いているというのに！

そして、結局、入学式にも参加していませんでしたので、私は彼を見つけられませんでした。

が、天はやはり、このセシリ亞・オルコ芝に味方していたようで、彼は**わたくし**私が所属する一年一組だったのです。

そして、一時間目が終わって彼が一人になつた所を見計らつて彼に声をかけましたわ。

リアム・イーリー、あなたがどれほどの罪を犯したか、教えてさしあげますわ。

会話も終始、**わたくし**私が制してあげましたわ。

まるで、お母様がお父様に話すよつて。

ふん、ここの男もお父様と同じような情けない男ですわね。

そして、類は友を呼ぶといつ日本^の言葉と同じよつて、リアム・イーリーと仲良くしていた織村一夏も無能でしたわ。私の前に屈しないなんて。

まあ、上流階級^の私^の前に恐縮しきつている庶民をいたぶつても楽しくありませんので、私は海よりも深い慈悲で彼らの行いを許してさしあげましたわ。

あ、でも、まだ、言い足りませんわ。

だから、

「あなたのよつな無能を生んだ親の顔を今度、ぜひ見せていただきたいのですわね」

そう言って差し上げましたわ。

すると、リアム・イーリーの顔つきが変わりましたわ。

突然、

「ああ、何て言った?」

と、今までとは違ひ低い声で私に言つてきた。

何て失礼な……と思つより先に、彼に恐怖した……まるで、憎悪をそのまま、叩きつけられたような感覚になりましたわ。それでも、私はセシリア・オルゴット、あのような情けない男に後れをとるなどできませんわ。

意を決して、言葉を開こうとした時、織村先生が私達の間に立てリーム・イーリーと話を始めましたわ。すると、あらうことか入学主席の私に対して決闘を挑もうとしてきましたわ。

何て愚かな。

その思い上がりを放課後、叩き潰してあげますわ。

わたくし
私の第三世代ISブルー・ティアーズ（蒼い雲）で。

Episode 07 KNFの決闘

「それで、リアム、大丈夫なのか？ 相手はあんな変な奴でも代表候補なのだろう？」

「篠さん、心配してくれてありがとうございます」

「そうだぜ、篠、リアムなら、あの、え と、金髪を倒してくれるぜー！」

時刻は五時を少し周つた頃、俺は一夏と篠さんと一緒に第五アリーナを目指していた。

アメリカ政府及び、エターナル・ヴァルキュリアEV社には既に、了解をもらっている。アメリカ政府を通してイギリス政府にも許可をもらつたので、もし、セシリア・オルコットをボコボコにしても外交問題に発展することはない。

もし、あの時、織斑先生が止めてくれていなければ、間違いなく外交問題に発展していただろう。の人には借りができてしまった。

まあ、先方、つまり、セシリア・オルコットの発言にも問題があつたため、俺が一方的に糾弾されることはないだろうが。もちろん、ボイスレコーダーでの時のやりとりは録音させてもらつてゐ。俺がキレた所を除いて。

ちなみに、篠さんは昼食の時から仲良くなつた。

一夏のことを聞いてみたら、案の定、顔を真っ赤にして

「い、い、一夏には内緒にしておいてくれ！」

と、頼まれた。

凛々しい感じな篠さんだが、その言葉を言つてこる篠さんは可愛い、と思つたのは内緒だ。

「じゃあ、俺達は観客席の方で見ているから、ああ、頑張れよ」

「ああ」

そう言つて、俺は更衣室に向かつ。

と、その前に篠さんに目で頑張れよつて合図を送つておいた。

まるで、壊れた人形みたいに顔を真つ赤にして口ク「口クと頷いた。かわゆい。

さて、あの時の怒りはもう、収まつているといつても良い。だけど、やはり、父さんと母さん達を侮辱されたのは許せない。イギリスの勘違いお嬢様にお灸を添えてあげようか。

今回、俺はI-Uを展開する。山田先生の時のような圧倒的な戦力差がある訳ではないので、手加減する必要はないだろ。それに、イギリスが開発しているBT兵器というのにも多少、興味がある。

「エターナル・ヴァルキュリア」
EV社ではムーラ母さんが残してくれたデータがあつたので案外、
簡単に完成したんだけど、イギリスの方で開発されたのにも興見がある。
ムーラ母さんが開発したのは、初めから追尾性能を持つ
るので曲がるから。本人の意思で曲げれる方が戦略としては確実に
良いので、羨ましいのも事実だ。

俺は自分の右手の中指に嵌めてある黄金の指輪にさわる。

「未来を掴もうオーディン」

すると、リアムは淡い光に包まれる。

「あら、逃げずにやつてきましたの？」

そう言つたのはリアムよりも先に第五アリーナに来ていたセシリ
ア・オルゴットだった。

「君に、敗北という言葉をプレゼントしてあげたかったからね」

「あら、それは強者が弱者に言つべし言葉でしてよ」

それを聞いてリアムは不敵に笑つ。

「もちろん、分かつてゐるが、世間知らずな、お嬢さん」

「つー? よくもぬけぬけと男の分際で!」

怒るセシリ亞・オルコットに対してもリアムは冷静だった。

もし、彼が冷静でなかつたならば、セシリ亞・オルコットに勝機はあつたかもしぬ。だが、今の彼は万全の状態と言つても差し支えがない。リアムの勝率を上げたのは、まさしく、織村千冬^{ブリュンヒルデ}、北欧神話に登場する戦乙女であった。それは彼の『うの名が『オーディン』ということに関係するか否かを知る者は誰もいないのだった。

「さて、始めようか」

「ええ」

一人が合意したことによつて開始の合図がアリーーナに響き渡る。

余談だが、このアリーーナには模擬戦を行う一人的他に織村姉弟、篠、山田先生と一緒に生徒、そして更識楯無、学園長がいるのだった。

警戒、敵I.S操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティのロック解除を確認。

「そうオーディンからリアムは報告を受けるがリアムは余裕な表情を崩さない。」

警告！ 敵I.S射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾工ネルギー装填。

「今度は警告を受けても動じない。」

「わたくし私には向かつたことを後悔なさい！」

その言葉と共に、セシリ亞はレーザーを放つ。

その先には、まるで、黄金の鐘のようなI.Sをまとつたりアムがいた。

だが、厳密には纏っていない。彼のI.Sであるオーディンはリアムの体に一切、密着していない。周りにあるだけだ。

リアムは無言でグングニルを実体化させると、上に飛び。

もちろん、BT兵器は最大活動時、曲がる。しかし、セシリア・オルコットは未だにそれを使いこなせていないため、避けられてしまつとそれで終わりだ。

「…………何だ、曲がらないのか」

「つー？」

もちろん、リアムはセシリア・オルコットがBT兵器を使いこなせていないことを知っていた、だが、あえて口にする」とセシリア・オルコットを怒らせた。

「思い知らせてあげますわ！」

その言葉と共に、セシリア・オルコットの手であるブルー・ティアーズ（蒼い霊）から四機のビットが展開される。

そして、その内の一機からリアムに向かってレーザーが放たれる、だが、それをリアムは何事もないように避ける。

右、左、上下から、攻撃を受けるが一切、当たらないリアム。

「イギリス代表候補、こんなものか……シールドビット展開

リアムがそう言つと、リアムの両腕、両足に展開されていた鎧が外れて、変形し櫛のような形になる。

「つー？ それは、まさか！？」

セシリア・オルコットは動搖する。自国の最高機密であるビット

システムが他国のIISが使ったのだから。そして、四機のビットを四機のシールドビットがマークしているので攻撃を放つたとしても、リアムには届かなくなってしまった。

「甘い」

そこで、見てしまったセシリ亞・オルコットはリアムの凛々しい顔を。そして、次の瞬間、彼は右手に持っていたグングニルが投げられ、セシリ亞を貫いた。

「ガンド」

そうリアムが言つた瞬間、四機のシールドビットから砲門が現れて、セシリ亞を貫いた。

その猛攻に、セシリ亞・オルコットのIIS、ブルー・ティアーズ（蒼い雲）は呆氣なく力尽きたのだった。

「お疲れ、リアム」

俺がピットに戻ると、一夏の他に、筹と山田先生がいた。織村先生はおそらく向側にいるのだろう。

「お疲れ様です。リアム君」

IISの展開を解くとすぐに山田先生が少し赤い顔で俺にタオルを渡してくれた。

「ありがとうございます」

IISという氣づかいは、本当にありがたい。

「それにしても、あの女、口だけだったな。リアム」

「いや、一年生の中ではトップクラスの実力だ」

「は？」でも、リアムに簡単に負けてたじさん

「俺は……IISの代表選手と一緒に訓練していたから、強くて当たり前なんだよ」

「代表選手？」

「IISの国家代表、モンド・グロッソにいる人達だよ」

「そんな人達の中でIIS動かしてたのかよ！？」

「ああ、俺の存在は世間から隠されたから必然的に国家代表選手と同じ扱いになつたんだよ」

ISの国家代表選手ともなると、他国からのスカウトが絶えない。だから、他国からのスカウトをなくすために基本的にISの国家代表選手の所在とかは隠されるからな。国家代表選手と同じ扱いの方が楽だったのだろう。

「まあ…………こより、ひどい環境だったよ。女人ばっかりだつたから…………ナターシャ姉さんがいなかつたら、俺は色々失つてたよ」

「…………人」とは思えないと……」

俺と一夏は無言で抱き合つた。

山田先生がなぜか、手で顔を隠しているけど、指と指の隙間が空いている…………見てているでしょ？

「そうだ、一夏、おまえ寮はどうなつたんだ？」

「え？ リアムと一緒にじゃないのか？」

「すまん、俺は色々とあるから一人部屋なんだ」

「な！？ ジャあ、俺はどうなるんだ！？」

「あ、それなら、織斑君は篠ノ之さんと同じ部屋ですよ」

『はあ！？』

一 夏と篠さんは同時に声をあげる。

……確かにそれは俺でもじつかと思つ。俺達は年頃なんだから。

「でも、他の子達と同じ部屋にする位なら、篠ノ沢さんとした方が安心だ、と織斑先生たつての希望がそうなりました」

……確か、織斑先生は以前から篠さんと面識があつたんだよな？ 篠さんがへタレだと知つていてるからか。

「し、しかし……」

口籠る篠さん。

はあ、せつかのチャンスなんだから、これを使わない手はないだう。

俺はそつと、篠さんの傍によつて

「チャンスだよ、この機会に一夏を落としてやれ」

さう小声で呟く。

すると、一瞬で完熟トマトよりも顔を赤くする篠さん。

「そ、そ、そ、そ、そ、うだな。うひ。一夏、良こぞ。私は

「本当に良いのか？」

篠

一夏は……鈍感だな。

さて、と。俺は今日のオーディンの稼働状況をEV社エターナル・ヴァルキリアに報告して休むとするか。

そして、この後、一夏は簾さんに殺されそうになるらしいんだが何をしたんだ、一夏？

私の名前は篠ノ之簾、私の姉はあの篠ノ之束だ……

正直に言つてその事実がとてもなく辛かつた。なぜなら、私の姉あねが天才だったから。

姉は私と親友の織斑千冬、その弟の織斑一夏にしか興味を示さなかつた。

父と母と私と囮んだ食卓はまさに地獄絵だった。厳格な父はふわふわした態度の姉をまるで、いなもののように扱い、私にしか話しかけてこない。さらに姉も、父と母には一切話しかけずに私にだ

け話しかける。ドラマなんかで見る一家団欒からは程、遠かつた。
唯一の救いが両親が織村姉弟を良く食卓に招いてくれたことだ。

そして、私が小学生に上がつて少しした頃だ。私は一夏に恋をした。

初恋だった。

学校で、道場で、私は一夏と二人でいた。

一夏はどうか分からぬが、私は幸せだった。

だけど、そんな幸せも長くは続かなかつた。

IS

姉が世界に公表したパワードースト。日本政府は私達の安全のため身柄を確保すると言つてきた。幼かつた私は一夏と離れたくなつた。だけど、姉のせいで別れざるを得なかつた。

最終的に私が一夏の傍にいると一夏に迷惑がかかると言わされて妥協した。

I Sなどといふものを作った姉を呪つた。その頃だ。姉が『ちょっとお空に行つてくれるよ』とか訳の分からぬことを言つて蒸発したのは……

それから、私達、家族は一つの場所に留まる事ができず、各地を転々としていた。

私は友も作らずにひたすら剣に励んだ。今、思えば吐き氣がする。あの剣を見て父が悲しそうな目をしていたのを今でも覚えてくる。

そんな生活を続けていた、ある日、政府の人間が私の進学先を I S 学園にしてみては、どうだ？ と聞いてきた。

I S 学園…………私の嫌いな I S を扱うための学校。

誰がそんなものに……

しかし、元から私の選択の余地などなかつた。I S に頼らないと私は職にもつけない。なぜなら……私が篠ノ之簾だから……普通の企業に就職しようものなら……その企業が……どうなるかなど分かりきつている。

だから、普通の職には就けない。なら、どうするか？ 剣では生きていいけない。

それなら……残っているのは I S だけ。私は決死の覚悟でその話を了承した。

そんな時だった。世界でたつた一人だけ I S を使える男が現れた

のは

織斑一夏

私の初恋の相手。

姉が何かしたのは分かりきっている。

だけど、不謹慎だが……嬉しかった。私のことを唯一、理解してくれた一夏と、また一緒にいられることが、姉の思惑であつたとしても。

そして、いざ入学してみると、一夏と同じクラスになれた。嬉しかった。

一夏に話しかけようかとも思っていたが、一夏が私のことを覚えていてくれないかもしけない、と思うと体が動かない。

そんな時だった。奴が現れたのは……

リアム・イーリー

世界でI.Sを扱えた本当の一人目。彼はいとも簡単に一夏の傍を獲得した。違う……そこにいるべきは……私は腹をくくることにした。迷っているのは私らしくない。次の休み時間、一夏と話をすると。

すると、どうだろ？一夏は私のことを覚えていてくれた。その上、中学の時に剣道の全国大会に優勝したのを知っていた。私は浮かれていた。

昼食にも一夏は誘つてくれた。

しかし……そこには奴がいた。

リアム・イーリー

「……」「……」一夏は私だけを見てくれるのに……

そんな私の感情を知つてか知らずか、リアム・イーリーはにこにこ顔で昼食をとる。

「俺、ちょっと、トイレ行つてくるわ

そう言つて一夏が席を立つた時、リアム・イーリーは口を開く。

「篠ノえさんって一夏のこと、好きだよね」

「い、い、一夏には内緒にしておいてくれ！」

私は飲んでいたお茶を吐きそうになりながらも……何とかそう返事をする。

まわか…………完全に隠せていろと黙っていたのに…………リアム・イーリー…………何と悔れない男だ。

「応援するから頑張つて」

笑顔で、そう言つてくれた。

胸がざわざわした。その笑顔に。

ええい！ 私は一夏が好きなのだ！ 何を迷つている！

「あ、ああ」

そう無難に返したが、気が氣でなかつた。

高校になつてできた初めての友に私は浮ついていたのかもしけない。

ま、まあ、悪い奴ではなさうだし、これから仲良くなれり。

一夏に楽しいのは何年ぶりだらう。

例え、こんな状況になつてしまつた原因を探れば間違いなく姉のせいだが、それでも、感謝します。こんな楽しい時間をくれた

束お姉ちゃん

Episode 07 KZFの決闘（後書き）

女神「まさかの篠ちゃんの心理描写…？」

翼「そうそう、あなたの思い通りにことが運ぶと思つなよー。」

神「あんた……セツシードにするのよ？」

翼「このまま、『レ?』

神「…………単純ね。だけど、私的には早くロインを落としたかつたから問題ないわね」

翼「次回、ついにセツシードかと思わしどってー、実はー？」

神「…………まあ、頑張りなさい」

翼「はい！」

Episode 08 KZF 感想される（前書き）

セシリア・オルゴットのキャラ崩壊の恐れあり
セッサー・ファンの方はご容赦を……

いつも皆様にお世話になつて いる翼です。
活動報告の方にも書かせていただきましたが

この度は、感想の返信に關して少し、お知らせなのですが、申し訳ありませんが今後（約一年くらいの間）返信が必要だ、と判断した感想（この判別は私の独断と偏見で行わせていただきます）以外は申し訳ありませんが返信を控えさせていただきます。

主な理由ですが感想を書いてくださるのは、とても、とても嬉しく、執筆する励みになるのですが、現在、私はリアルで多忙な日々を過ごしております。

執筆にとれる時間が少ないのが現状です。

ですので、苦肉の策としてリアルで多忙が続く今後、約一年くらいは、このスタイルでいかせていただきます。

いつも、感想を書き込んでくださっている皆様には大変失礼なことだと承知の上でさせていただきます。

申し訳ありません。

ご理解の程、よろしくお願ひします。

最後になりましたが、今後もよろしくお願いします。

Episode 08 KZF 憧れれる

「そ、送信……と」

ふわああああああ！？

じつじよう、じつじよう、送信しかやつたよ。

私は今、ベッドの上で寝転がりながら携帯の画面を見ている。

今、私がメールを送った相手は……この前、知り合った、リアム・イーリーさん。

昨日まで、アメリカに戻っていたらしいんだけど、今日、帰つて来たらしいの。

だから……明日のお休み、良かつたら一緒に何処かに出かけませんか？ という内容のメールを送つたんだ。

うう、やばつり、こっちのテロの方が良かつたかな？ 子供っぽいって思われないかな？

悩んでいると唐突に携帯電話が鳴り響く。

ビクンって心臓が高鳴るのが分かる……こんな気持ち、今まで一夏さんにしか、したことがなかつたのに……やっぱり、私……うんうん、それを確かめるために、明日、誘つたんだ。

おやる、おそるメールを開く。

セレニティ……

OKだよ。セレニティに行く？ 本当はいついう時、男の方が場所とかをセッティングしないといけないんだけど、まだこっちに来て日が浅いから分からないんだ。「めん、決めてもらつても構わないかな？」

「これって、これって、OKって書いてあるし……大丈夫だっこだよね？」

「やつたああああああああああああああ！」

私はベッドの上で飛び跳ねる。

「セ、セレニティなんだ、蘭！」

馬鹿兄^{ばかにい}がノックもせずに私の部屋に入つて来る。

せ、せつかく、リアムさんとドント、デートの約束ができたのに！こんな奴の顔なんて見たくないつてのー！

「ノックくらいしり！ 馬鹿兄^{ばかにい}！」

私はそう言いつつ、馬鹿兄のみぞおちに左ストレー^トを叩き込む。

「うぐつーー?」

よし、今日も絶好調。

さ、明日のリ、リアムさんとのテ、ホールドのための服を選ばなくつちや。

やつぱり、大人な感じのリアムさんには可愛い系の服は似合わないよね?

で、でも…………可愛いつて言つてもらいたいな…………

「んぐつーー?」

とりあえず、床に寝こんで遊んでいる馬鹿ばこの上に乗つて考えることにしてや。

やつぱり、黒で大人のイメージを…………でも、リアムさんつて金髪だし…………どんな服を着るんだろう…………この前は、ジャケットを着てたような…………

ああ、じいは弄られるの分かりきつているけど…………生徒会の面子に相談しようかな?

うん、そうしよう。一人で決めてリアムさんにダサい子つて思われたくないもん。

「ふう」

私は今、先ほどの戦闘のデータを本国に送った後、シャワーを浴びています。

リアム・イーリー

わたくし
私は完勝した男……あれは私自信の敗北の他に機体事態の差もあつたような気がします。それに本国でも、まだロールアウトできていないシールドビットシステムを使いこなしていましたしだって本国が彼を誘惑してもイギリスに引き込めと言つた意味が分かりましたわ。彼は今いる一年生の中では、いえ、IS学園で最も強いでしょう。もちろん、織村先生を省いての順にですが。

ああ…………あの時の、彼の顔…………お父様のような弱々しくない顔、凜々しい男の顔。

私が探し求めていた殿方、……

強くてましい方。

分かりますわ……これは初恋ですか。

なんだ理由で彼を好きになってしまったこと位、私も分かっていますわ。

でも、好きになってしまったのです。

ですから、仕方ありませんわ。

恋は自分の意思では、どうにもなりませんわ。

ああ、少し前の私に言つてやりたいですわ。

わたくし 私にぶつかつて来た無能な男こそ、私の探し求めていた人間であることを。

今、思えば私にぶつかつて来た怒氣さえも、凛々しく思えますわ。

ああ、これが恋ですね。

分かりますわ。

お母様、こんな気持ちになってしまえば、相手がお父様のような弱々しい男でさえも、結婚したくなりますわね。

ああ、彼と会いたいですわ……

ですが、時刻は十一時を少し過ぎていますわ……

こんな時間に会いに行けば、礼儀知らずな女だと思われてしまい
ますわ。

いやん

『そんな礼儀知らずな女には仕置きしないといけないな』

『うう、言いつつ、彼は私の始めてを奪つのですわね。獸のよつと乱
暴に。』

『あ、どうしまじゅう、お母様、セシリ亞はセシリ亞せ……』

『おー、どうした？ まさか、仕置わたくしをされているの、喜んでいる
のか？ この礼儀知らずな女が』

『いやんっ、待ってくださいまし、や、優しくしてくださいまし』

『最初に言つただろ？ これは仕置わたくしだ！ 優しくしても意味はない
いだらうが！ そんなことも分からぬのか！ この無能』

『ああ、申し訳ありませんわ。ですから、ですから、セシリ亞を強
引にあなたのモノにしてくださいまし』

『はは、良かう！ この獸のよつなリアム・イーリーのモノにし
てやひや』

『いやあああああ』

「…………ねえ、セシリ亞、妄想、ダダ漏れだつて、後、私もシャワ

「浴びたいから、早く上がつて来てよ……シャワー浴びるだけなのに……一時間半はやりすぎだつて……いくら年頃の女の子でも、そんなにかかるないつて……」

知りませんわ！

余談だが、このことが同室の子から、クラスの皆に伝わり、クラスの皆はセシリアのこととリアムの一件の後、避けるどころか可哀そうな子に接するように優しく、本当に優しく接したとか……ある意味、平和な織村学級だった。

さて、昨夜は何やら取り乱してしまいましたが気を取り直してリアム様の所に向かうとしましょう。時刻は休日の朝、十時ジャスト、この時間ならリアムさんも起きているでしょう。

そしてそれから。

『おい、こんな時間から、俺に何の用だ？』

『いえ、先日の模擬戦の件で』

『おい、こいつから、おまえは俺にそんな態度をとれるようになつた

んだ？ 昨夜の仕置しおを忘れたとでも言つのか？』

『いえ、ですが……こんな朝、早くから……』

『馬鹿が！ 時間など関係あるか！』

『あ れ 』

『…………セシリー…………これは私でもひくよ…………』

動物の着ぐるみのようなパジャマを来ていた少女は引きつらせた笑みを浮かべていたが、セシリアはそんなことは気にしない。さすがはイギリス代表候補。今すぐ、イギリス国民に土下座してくるべきだと、主張したい。

「さて、リアム様のお部屋は 」

事前にステーキング調査しておいたのでリアム様のお部屋の場所は完璧ですわ！

私が廊下を曲がり、リアム様のお部屋に行こうとした時、リアム様がお部屋から出てきましたわ。

それも、IIS学園の制服ではなく、私服。

ああ、リアム様は白色をメインにしたコーチィネートをされるのですね。オシャレですね。

でも、私はもう少し派手な服を着たいのです。

しかし、どこに行かれるのでしょうか？

「……」はクラスメイトとして調査しないといけませんわね。

ええ、これは決して私情ではなく、クラスメイトとして彼を心配しているだけですよ。

「セシリー…………明日、お菓子あげるね…………」

誰か、いたような気もしますが、リアム様の後を追いませんと。目標を見失つては調査できませんからね。

私はリアム様の後を追つ。

すると、あいりーとか、リアム様は駅の方に歩いて行きます。

「これは…………おやうへ、駅前にあるショッピングモールに行くのでしような。」

もし、お一人で周られるようだしたら…………このセシリア・オルゴットがお付き合こいたしまじょひ。

ええ、これは私情ではなく、本国よつリアム様と仲良くするように言われているからですよ。

「ママ、あのお姉ちゃん

」「ひ、猫をしちゃいけません」

な、何ですって！？

駅で待っていたのは、お、女でしたわ！？

私にあれほどのお仕置きをしておいて！？ 他の女と会つなんて
…… ゆ、許せませんわ。

それも見た所……歳下ですわね。妙に可愛い服を着て……リ
アム様を誘惑したい感じが前面に押し出されていますわ！ そんな
小娘の相手をしていないで、私にお仕置きしてくださいますっ！
わたくし 私の方が、そんな小娘よりも、あなたに似合いますのに……

「リ、リアムさん、お、おはよひじゃれこます」

なんですの、あの小娘、リアム様のことをお前で呼ぶなんて……

「おはよひ、蘭ちゃん、今日も可愛いね

「あ、ありがとうございます」

下を向いて顔を赤らめる小娘。

むつきいいいー まだ私でも、リアム様にあのような言葉かけ
ていただきていませんのに！ ああ……でも、罵倒していただく
のも……

「それじゃあ行ひつか

「は、はー」

一人で方を並べて歩き出しましたわ……何て、何て羨ましい……

私も後を追わなければ、と思った所で気づきましたわ。三人の小娘がリーアム様をストーキングしていますわ。何てことを、リーアム様は私が守りますわ！

「ちょっと、そこのあなた達！」

「は、はい」

見た所、日本人のようですね。

まさか……極東にはリーアム様のような格好の良い人はいませんから……アメリカから来たリーアム様を狙つて……私のブルーティアーズの餌食にしてくれますわ。

「あ、会長、行っちゃうよ

「あ、あの、私達、急いでいますので……」

「ん？ 会長？ リーアム様は会長ではありませんわよ。」

「え？」

「リ、リアムさん、お、おはよーいります」

「おはよう、蘭ちゃん、今田も可愛いね」

「ひやあ！？ リアムさんに褒めでもらうつらったよ。やっぱり、可愛い系の服で良かった。」

「あ、ありがとうございます」

「それじゃあ行こうか」

「は、はー」

「う、う、う、緊張するな…………でも、やっぱり、リアムさんって格好良い…………今日は白のパーカーに普通のジーパンなんだけど…………何て言うのかな？ 日本人にはない魅力がある。格好良い…………」

「それで、今日は、服を見るんといいんだよね？」

「え、あ、はい…………申し訳ありません。私の我儘で……」

「大丈夫だよ。今日の予定は何もなかったし」

「あ、そうですか…………」

良し！ 会話をでもしてこな。

「ん？ あの店なんて、可愛い服置いてない？」

リアムさんが、指差したのは私達（庶民）があんまり、使わない、
ブランドモノの店だ。

「あ、た、確かに可愛いんですけど……値段が……」

恥ずかしいけど、言わないと、もつと恥をかくから。

「あ、そっか。蘭ちゃんは中学生だつたもんね。」「あんね。お詫びに、何着かプレゼントするよ」

「は、
はひ！？
い、
いですよ！？
そんな
」

「良いから、良いから」

笑顔でそう言いながらリアムさんは私の手を引っ張つてお店の中に

「俺は一応、アメリカ代表候補だから給料をもらってるんだ。だか
ら、遠慮せずに」

「でも……」

「これは、可愛い女の子の気を引くために男が勝手にやる」とだか
「う

か、
可愛い！？

۱۵۱

それに気を引くためって…………お世辞で語ってくれているのも分かるけど……嬉しいな。

「これなんて、どうかな」

リアムさんが手にとったのは、この季節にピッタリの水色のワンピースだった。

「あ、可愛い」

私は咄嗟にそう呟いてしまった。

「すみません、この服、試着したいんですけど」

それを聞いたリアムさんはすぐに店員さんを呼ぶ。

「試着室はあちらになります」

店員さんの案内で私を連れて、試着室まで行くリアムさん。

「可愛らしく彼女さんですね」

「か、彼女!?」

リアムさんが返事をする前に私が素つ頓狂な声を上げてしまった。

「うう、恥ずかしい。」

「そうですね。彼女は可愛らしいです。ですが、残念ながら、今は友人なんです」

「あら、それは失礼しました。試着室はいらっしゃる？」

「じゃあ、蘭ちゃん。試着してきて」

「は、はー……」

店員さんが試着室に入る前に『頑張って、脈はあると思つわよ』なんて言つから心臓がばくばく言つて仕方ない。

私は手早く、ワンピースに着替える…………値札を見たら…………一万一千円だった…………確かに可愛くて欲しいけど…………こんなな買つてもられないよ…………気にいらないって言つて違つのことでもらおう。

ちゅうひど、セールで一千位の服がワゴンにあつたよつた氣がするから…………それくらいなら…………後で返せばいいし。

私はカーテンを開けてリアムさんにワンピースを見せる。なぜか、店員さんも、まだ傍にいて一緒に見る。

「可愛いじこですね、彼女さん」

「ええ、蘭ちゃんは、元々可愛いですか、何でも似合つと思つてはいたのですが、ここまで似合つなんて…………」

「じゃあ、次はこちらなんていががでしょうか?」

「あ、それも良いですね。いつまでもうですか?」

「まあ、さすが、リアムさん。センスがいいですね」

……それから、私はリアムさんと店員さんの着せ替え人形の「ごとく、服を着せられた。

「じゃあ、わざわざ話してた服ください。あ、まけてくださいね、佐^さ恵子さん」

……この間にか、リアムさんは、店員さんのことを面前で呼んでいた……何で？

「あら、彼女さんの前で値切りですか？ 格好悪いですよ、リアムさん」

「少し、予算オーバーにして、お恥ずかしい」

肩をすくめるリアムさん……たぶん、予想通りの値段だけど、交渉するために演技しているみたいだ……私でも分かる。でも、リアムさんがそれをやると、なぜか、値段を安くしてあげよう、みたいな気持なる。

「冗談ですよ。服もこんな可愛らしい子に着てもうつた方が嬉しいでしょ？」お安くしておきますよ

「ありがとうございます」

やう言つて、佐^さ恵子さん？ と一緒にビックに行つて、お会計を済ませて来るリアムさん。

「あ、あの、服のお金は返しますからー」

貯金なくなっちゃうかもだなび…………

「え？ 何を言つてこるの？ 蘭ひりちゃん」

「え？」

「これは全部、プレゼント。男がせつかく可愛い女の子の前で格好つけたんだから、最後まで格好つけさせてよ」

満面の笑みで私に笑いかけてくれるリアムさん。

「で、でも…………」

「そんなことは気にしないで、ほひ、『飯食べに行こ』

ああ、ダメだ…………ただで、さえも、格好良いリアムさんにこんな風にお姫様みたいに扱つてもうつたら…………前から好きだったとか以前に…………好きになつちやつよ…………

ちなみに、お皿もリアムさんがあげつてくれた…………いいのかな

Episode 08 KZF 虚構される（後書き）

女神「……私、このちのセシリ亞の方が好きよ！ キャラ崩壊とか気にしないで良いと思つわ！」

翼「大丈夫ですかね？」

神「私が許すわ！ 誰が文句言つてきても、私が許すわ。ただし、弓弦イズル先生に言われた時だけは自嘲しなさい！」

翼「そうですね！ 勇気が出てきました！」

神「次も頑張りなさい！」

翼「はい！」

Episode 09 KNFのデート・ファースト

「あ、あの……セシリ亞さん……そろそろ、やめません?」

「何を言っていますの!?. 最後まで監視しませんと!..」

私はリアム様と一緒にいる女の子と同じ学校で同じ生徒会に所属する生徒達だそうですね。

「で、でも……」

「やるなら、徹底的にですわ! 帰るなら、貴方達だけでやつてくださいまし」

私は彼女達を置いてリアム様を追いかけますわ。

リアム様と小娘が向かった先はイタリアンレストランですわ。

むう、あの小娘、リアム様に椅子をひいてもらっていますわ……羨ましいですわ。

なんて言っているか分かりませんわね……でも、盗聴器などは持つていませんし……店内ですと見つかる可能性が高いですしね。仕方ありませんわ……ブルーティアーズを部分展開しましょう。

頼みますわ、ブルーティアーズ、私に力を貸してくださいまし!

HSは元々、宇宙での活動を前提としたパワードスーツですわ。店内の会話を盗み聞く位、簡単ですわ。

「リ、リアムさん……すいません……本当に服を買つてもらつていいんですか？」

「ああ、気にしないで」

むきい！

まさか、私を差し置いてリアム様からプレゼントをいただいたんですね、あの小娘！ 私だつてお仕置き以外もリアム様から何かいただきたいですわ！

「」注文はお決まりですか？

ウエイトレスがリアム様達に聞く。

「おすすめは？」

「本日は海老を使ったスパゲッティがおすすめになつております」

「じゃあ、それを二つ、後、デザートは？」

「苺のタルトが人氣です」

「それも二つ」

「かしこまりました」

注文だけ聞いて帰つて行くウエイトレス…………何でウエイトレスですの？ リアム様に話をしてもうつて、あらうことか何もなかつたかのように戻るなんて…………感動を噛みしめてから帰りなさい。

「あ、蘭ちゃん、今の注文で良かつたかな？ 大丈夫？ アレルギーとかは？」

「だ、大丈夫です。私、元気だけがとりえです！」

本当に元気だけがとりえそうですね。

「そんなことないよ

「や、そうですか？」

「ああ、蘭ちゃんには良い所がいっぱいあるよ。優しい所とか、気配りができる所とか

「あ、あらがとうござります」

顔を真っ赤にしていますわ、あの小娘、やっぱり、あの小娘、リアム様に惚れていますわね。リアム様は渡しませんわよ。

リアム様にお仕置きしていただくのは私ですわ！
わたへし

「ふう、美味しかったね」

「は、はい」

私とリアムさんは昼食を食べ終わると、色々な店を回りたいと思つてあります。

本筋は、ゆうべ周つている間に私はリアムさんに対する気持ちを考えようと思っていたのでが、正直に言つてリアムさんは一緒にいれば、一緒にいる程、好きになってしまつタイプの人だと分かりました。

まず、本当に絵に描いたような王子様のよつた振る舞いで、気づかいができる、話もし上手いですし……何より、私がして貰つて欲しいことを全てまるで分かつているかのように貰つてくれる所が

「ごめんなさい、一夏さん、私は本当に一夏さんよりもアムさんのこと好きになっちゃったみたいですね。」

「蘭ちゃん？」

「は、はい。何ですか！？」

「いや、せりあから呼んでも返事がなかつたか？」

「あのアクセサリーの店に入らうか」

「はーーー。」

あの店は知つてゐる。

私達の学校の生徒も良くな利用するお店だ。手頃な値段で可愛いアクセサリーを置いてあるから。

もつ、迷いません。

このトークを楽しむことにします。

「あ、このネックレス、リアムさん、可愛くないですか？」

「ん？ あ、本当だ」

私が見つけたのは十字架をモチーフにしたネックレス。ビニールドもありそうな、無難な奴だけど、こうこうのこそ格好の良いリアムさんがつければ、規格外の格好の良さになると想つ。

「ちょっと、つけとみてくださいよ」

「つけてもらつてもいいかな？ 僕、ネックレスをつけるの、苦手なんだ。いつも結構、時間がかかるやつで」

「いいですよ」

私は、屈んでおりて、リアムさんの首に。

「、これって、リアムさんの顔が……顔が……近い。

後、ちょっと、後、ちょっと顔を近づければキスできやうな距離

じゅじゅ、じゅじゅ、と心臓の音が耳から聞こえてくる。

私はやっとリアムさんの首に手を回してネックレスをつけてあげる。

その時に気づいた……リアムさんは既に何かつけている。

だって、既にチーンが巻かれていたから……でも、服に隠れてしまつているから……今まで分からなかつた。

「リアムさん、リアムさんつて、もう、何かつけているんですか？」

「あ、うん。つかてるんだ」

そう言つてリアムさんは服の中から口ケットをとつだして見せてくれた。

可愛い。時計の形をした口ケット。

そして、リアムさんはその口ケットの中身を見せてくれた。

そこには五人の人が一緒に写真に写っていた。

金色の髪の男の人と、その人に似た子供、そして、茶色の髪で目つきがキツイ女の人、銀色の髪をしたたれ目の女の人、男の人と子供よりも明るい金色の髪の女の人。

「これは……」

「俺の死んだ、父さんと母さん達」

「う、どこか、こことは違う、どこかを見て、そう言つコアムさん。

……私はなんてデリカシーのないことを聞いてしまったんだ……いつも、馬鹿兄にデリカシーがないって怒るけど……私も……

「父さんと母さん達は、物凄く早く死んでしまった。だけど、きっと幸せだったと思うんだ。だって、父さんと母さん達は死んでしまう、その日まで笑顔だったから。そんな父さんと母さん達を見て思つたんだ。一日、一日を笑つて生きれるように生きよつて」

……私はどこか、リアムさんのことを勘違いしていたのかもしれない。

リアムさんは……リアムさんは私よりも本当に、大人で。

だから、私は……好きになつちゃつたんだ。

ああ、たぶん無意識のうちに、もっと本能的な部分で彼に惹かれていたんだ。

一日、一日を必死に笑顔で生きている彼に。

「ありがとうございます」

「え？」

「私にそんな大切な話をしてくれて」

リアムさんは笑って

「ありがとうございます、そう言ってくれて」

私とリアムさんは一人で笑いだした。

周りの人には不思議がられても、構わない。

私も今を笑顔で生きて行くことに決めたのだから。

できたら、リアムさんと一緒に生きていきたいな。

だから、頑張ろう、こんなに素敵な人なんだ、IHS学園の女人の人も狙っているよ。

きつと

そうだ、ISの適正審査を受けよ。

確か、政府がやつてこむから無料だつたと思ひからお爺ちやんは
反対しないだろうじ。

それで、来年、IS学園を受けよ。

リアムさんと一緒にいたこから。

「ひ、う　　つ」

まさか、リアム様にそのような過去があつたなんて…………私も両親を失いましたが…………お父様のことを貶すばかりで、お父様とお母様が幸せだったかなど、考えませんでしたわ。

本当に彼は私の理想の人ですわ。

私も一日、一日、笑顔で生きられるよつじまじょう。

きつと、それを今は亡きお母様とお父様も望まれていますわ。

そして、その一日、一日をリアム様と一緒に行きたいですわ。

わたくし
私がリアム様を好きなのは、もちろんのことですが、リアム様に
わたくし
も私のことを好きになつていただきたいですわ。

そして、私は亡きお母様とお父様の分まで笑顔で生きましょ。

それが、今は亡きお母様とお父様が望まれてゐると思つから。

そうと決まれば、私はリアム様より、先にエジ学園に帰つてリアム様の部屋の前で待たせていただきましょ。

まずは、お互いの事を知ることから始めるべきですわね。

さて、そうと決まれば部屋に帰つて下着を変えさせると、もしかしたら、もしかしたらがあるかもしれませんしね。

女神「どんぶんぱふぱふ」

翼「口で言つの！？」

神「ついに、二人、完全に落としたわね。その調子よ、もっと落しなさい！」

翼「わ、私の言つこと全部無視！？」

神「それにしても蘭ちゃんって可愛いわよね。作者は年上好きだから、あんまりみたいだけど」

翼「な、なんで知ってるの！？」

神「神だから」

翼「……酷

神「そういう訳だから、次回もがんばりなさい！ 分かったわね！」

次は山田先生あたりかしら、あの人の攻略状況、微妙な所でしょ？」

翼「確かに……でも、それより、蘭ちゃんがリアムに告白するイベントを書くべきか書かざるべきかで悩んでいるから、そちらを先に考えるよ！」

神「とりあえず、今日はこのあたりで」

翼「失礼します」

Episode 10 KNF セシリ亞・オルゴット

「ふう」

IS学園の寮の自室にてパークーを脱いで洗濯物籠に入れておく。ナターシャ姉さんとの生活で家事が趣味になってしまっている俺としてはできれば自分で洗濯もしたいんだけど、IS学園では業者が一斉にやってくれる。

それで、その業者の経営が上手くいっているのだから、俺があれこれ言づのは筋違いだろ。その利益で生活している人達がいるのだから。

本来なら、ここにナターシャ姉さんに定期連絡を入れるように言われている日なのだが、たぶん、今はどこかへ行くための準備で忙しいだろうから、電話しない方が賢明だろ。

もし、電話しようものなら

『もう、リアム！ 私の下着どこに直したの…？ 全然、見つけられないんだけど…』

オシャレや気配り、ISの操縦にかけても一流としか言えないナターシャ姉さんだけど、家事が一切できない……田玉焼き、さえ、できないのが良い例えだろ。

本人曰く

『そういうのができなくても構わないって人と結婚するわ』

と、言つてゐるが……そんな優良物件と巡り会えるのだろうか？

まあ、たぶん、ナターシャ姉さんが結婚する「こと」になつたら、俺、泣くけど。

『ペーぺー』

不意に俺の部屋のインターフォンが押された。

HS学園の部屋の扉の鍵は部屋にいる時は常に開けておくのが決まりだ。

何でも、前に男を連れ込んだ、うんたらかんたら。

まあ、それは嘘だらうが。だって、そつだろ？ 天下のHS学園の警備がそんなヘナチョコなら、既にHS学園は無法地帯になつてゐるだらう。だから、もつと、別の理由があるのでナビ、そこまでは俺も分からぬ。

と、鍵が空いているにも関わらず、態々、インターフォンを押すのはHS学園の寮で暮らすにあたつて暗黙の了解になつてゐる。

俺は軽い気持ちで扉の方に向かつ。

俺の部屋に態々、来るのは一部のモノ好きな上級生か一夏くらいいだらう。

「どう様でしょうか？」

そう言いながら扉を開けると、淡い水色のワンピースを着たセシリア・オルコットがそこには立っていた。

……俺は居留守を使わなかつたことに後悔した。

何で、セシリア・オルコットが懶々、俺の部屋に来るか分からない。

そこから、しばしの沈黙が流れれる。

……何も言わないなら帰つて欲しいんだけど……俺もさすがに、例え、決闘でかたをつけたと言つても、両親のことを謝罪された訳でもないのに、セシリア・オルコットと仲良くする気はない。

そこまでお人好しじゃない。

もう、扉を閉めようと決意した時だつた。

「……申し訳ありませんでした」

セシリア・オルコットは深々と頭を下げた。

IS学園に戻った私は、まず、腕を組んで悩んでいましたわ。

なぜなら……

「リアム様はどんな服が好きなのでしょうか?」

さすがの私も調査では、そこまでは分かりませんでしたわ。

何せ、リアム様に関する個人情報はアメリカが開示している情報以外はほとんど、分かつていながら。今まで、アメリカでISを動かしていたにも関わらず、私の祖国、イギリスを初め、各国はそれを知ることができなかつたのですから、余程、厳重に情報を隠されていたのでしょうか。

しかし……好きな服の種類くらい、後悔してくださいまし!

そのせいで、今、私はこんなに悩んでいますよ!

誰かに……相談するにも……チエルシーは本国に一時、帰っていますし……クラスの方々に知られれば間違いなくリアム様のお部屋に一緒に行くと言いましたわ……

「いや、行かないよ……だって、セシリ亞と一緒に行つたら、セシリ亞と同類に見られるかもだもん……それは嫌だもん」

ルームメイトの方が何か言つたような気がしますが無視ですわ。

仕方ありませんわ。

「」のお気に入りの服で生きましょ。」

「すみませんが、私は所要で少々部屋を開けますが後をお願いしますね」

「……分かった。」
「」

さて、リアム様の部屋まで行きましょ。

『ペーポーン』

インターフォンを押してから気づきましたわ。……我まだ、リアム様と未だに和解していませんわ。……

どうしましょう。」

どう話していくのか、分かりませんわ。

「どうやら様でじょうつか？」

そう言つながら、リアム様は扉を開けてくれますわ。

私の顔を見てリアム様は固まつてしましました。……気がまずいですわ。

でも……「」のままでは……暗い女と思われてしまつますわ。

小細工をしても、姑息な女と思われる可能性もありますし……
「」は……

「…………申し訳ありませんでした」

誠心誠意、頭を下げましたわ。

私は石のように固まつてしまふ、いくらでもリアム様の言葉を待つつもりでしたわ。

「顔を上げて」

どれだけの時間が過ぎたでしょう。おそらく、現実の時間は数分も経っていないでしようが、私の中では、途方もなく長い時間に感じますわ。

もう優しく言つてくださいましたわ。

「しかし…………私は貴方の両親を侮辱してしまいましたわ…………あれは許されることではありません…………それにリアム『様』にも、大変、失礼なことを申し上げてしましましたわ…………どんな仕置きでも受けけるつもりです」

「謝つてくれたなら、それで良いよ」

「そ、それでは、^{わたくし}私の気が済みません…」

「ぜ、是非、お仕置きを…

「…………それなら、分かった。田を瞑つて」

「え？」

「まひ、早く…」

「は、はい」

「じゃじゃ、じゃじゃ、自分で言ひのも向ですが、じゃじゃですわ。

ああ、この焦らされるのも、なかなか

「い、痛つ…？」

おでこが痛いですわ……これって……

「や、デコポン」

満面の笑みで私に^{わたくし}そう言つ、リアム様……

はう、その眩しい笑顔は反則ですわ。

「お仕置き、終わり、部屋に入つて喋る?」

「は、はい」

『おー、おー、本当にさつきので終わりだと思ったのか？』の礼
や、きっと、部屋に入つてから、もつと、凄いお仕置きが待つて
いるんですね。

『おー、おー、本当は嬉しいんだろ？ 口ではやつ言つても、体は
儀知らずな女』

『そ、そんな…………まだ、私を辱めるのでかー？』

『ぐへへ、本当は嬉しいんだろ？ 口ではやつ言つても、体は
正直だぜ』

『い や』

「どうしたの？ 入つて来ないの？」

は、はつ、妄想の世界に入つてしまつていきましたわ。

リアム様の部屋は物が、きちんと整理整頓されていて清潔感があるものでしたわ。男の方の部屋はお父様の部屋のようにメイドが掃除しないと汚れていると思っていましたが、違うのですわね。リアム様が特別なのかもしれませんが。

「や、そこに座つて」

リアム様は椅子を指差す。

ま、まさか…………あの椅子に特別な仕掛けがあつて……

わたし
私はお仕置きされてしまつのですわね

いやですわ

私はお仕置きをねる」となど、望んでこませんわよ

「セシリ亞、紅茶に何か入れる?」

「あ、ミルクとお砂糖を少々、お願ひしますわ」

「了解」

台所に立つリアムさん…………ありですわ……

「はい、どうぞ」

男の人は紅茶も満足に入れらないと思つていましたが、リアム様はきちんと、入れられるのですわね……

私と対面する形で椅子に座るリアム様、緊張しますわ。

そして、リアム様は座つてすぐに

「オルゴジトさん、雰囲気変わった?」

そんなことを言つてくれます。

「え? そ、そうですか?」

「うん、変わったよ。なんて言つのかな? …… そう、柔らかくなつた」

「そうですか？ 自分では分からないものですね」

「わたくし 私は変わったのでしょうか？」

「前は何て言つのかな？ ぎすぎす？ した雰囲気を纏つて男の俺を馬鹿にしたような感じがしていたけど、今は、うん、そんな感じがないから」

やはり、もし、^{わたくし}私が変わったのなら、その原因は……リアム様ですわね。

リアム様に變えていただいた私。^{わたくし}

うふふ。何ででしうね。嬉しいですわ。

好きな男の人に変えられてしまつた自分。

そんな自分を好きになつてしまいそうですね。リアム様と繋がりを持てているようだ。

「リアム様」

「何？」

「少し聞いて欲しい話しがあるのです。本當なら、このよつな話し出合つて間もないリアム様に聞かせるべき話しへないのですが……聞いていただきたいのです」

「聞くよ」

リアム様は、一切、迷うことなく私の田を見据えて、そう言ってくれます。

リアム様の優しさが直接、私の心を触れられているようで、リアム様の言葉を聞くだけで、リアム様の部屋に来て良かったと思えますわ。

それから私は話しましたわ。

お母様とお父様の話を。

死んでしまったことまで包み隠さず。」

そんな私の言葉をリアム様は何も言わずに聞いていてくれましたわ。

何か仰ってくださいまし……

「オルゴットさん」

リアム様は唐突に立たれる。

それにひられて私も立つてしましますわ。

それから、リアム様は近づいて来て。

「良く、頑張ったね」

私を優しく抱きしめてくださいました。

私の中でリアム様の言葉が反復される。

良く、頑張ったね

一人、ぼっちになつた私を励ますように

良く、頑張ったね

家族のように親身になつてくれている

私の今までの苦労をねぎらつてくれる

良く、頑張ったね

私の今までの苦労をねぎらつてくれる

良く、頑張ったね
リアム様の優しさが伝わってくる

「リアム様」

「何?」

「私は、まだ、リアム様と知り合って間もないですし、リアム様は優しいお方ですが、未だに私に良い印象をお持ちでないのは分かっていますわ」

「…………」

それに何も返事をしないリアム様。まるで、私の答えを待つているようだ。

「それを承知でお願いいたしますわ。まだ、恋人になつてくださいとは言いません。私自身も、まだリアム様の優しさに応えられる程、成長しておりません。ですが、どうか」

お傍においてくださいまし

「喜んで」

リアム様の笑顔は何度見ても、心地よかつたですわ。

女神「つ、ついに一人……完全なハーレム要員ね」

翼「ここまで、長かつた……十話もかかつた……」

神「まあ、リアム達の紹介的なお話があつたから仕方ないわよ」

翼「……………そうかな……………」

神「まあ、それはともかく、順当にこつたら次は蘭ちゃん?」

翼「ふふ、それは内緒だ!」

神「翼が強気だ!?」

翼「とりあえず、ここまで、お付き合いくださつてありがとうございました。これにstage 01完結です。次回からはstage 02になります。では!」

神「…………いつもと立場が逆だわ…………次からはまた主導権をとり返すわ!」

Episode 01 KZF、めざめられた

それまで、多少、騒がしかつたはずの教室の中が急に静かになる。
そして彼女の叫び声が木霊する。

「決闘ですわ！」

荒れ狂うセシリアの声、…………と……

「上等だ！」

…………それに激昂する一夏…………だ。

ちょうど、休み時間が終わり教室に入つて来た織斑先生が壇上で頭を抱えている。

山田先生は涙田でおおむねじてゐる。

そして、クラスメイト達は好奇の目で一人を見ている。

俺はどちらの味方をしていいか分からず、頭を抱えている。

なぜ、じつなつた？

「あ、あのリーム様…………」

現在の時刻は七時、そんな時間からセシリアは俺の部屋に来ていた。

あの後、つまり、セシリアが俺の部屋を訪れた後、俺達は恋人未満、友達以上の関係になった。別に俺は鈍感ではないので正直に言えば、紅茶を飲んでいる最中に気づいていた。

もし、仮にセシリアが『付き合ってください』と言つていれば、俺は断るつもりだった。自分で言うのも何だけど、いくら俺がお人好しでも散々、今まで罵倒されていた相手と付き合えない。確かにセシリアは性格を除けば、かなりの可愛い。だけど、両親を見て育つた俺にとっては『愛』のない、付き合いなどできるはずがなかつたから。

でも、セシリアは俺の傍にいたい、と言つた。

それを拒む理由もない、だから、俺とセシリアは恋人未満、友達以上の関係になつた。

その後、少し世間話した後、セシリアは自分の部屋に帰つて行つた。

それから俺はセシリアが来るまでにしていた『亡国企業』の動きが書かれた報告書を読んでいた。アメリカは既にISを一機、『亡国企業』に奪われているので『亡国企業』の動きに敏感だ。でも、

まあ、一時でもじこーへや軍を欺いてエスを奪つた組織だけの「ひと」はある、報告書に、ほとんど、実がない。

その後、俺はナターシャ姉さんにメールをいれてから寝た。
そして、今にいたるんだけど……

「何? セシリア?」

「あ、あのですね」

「うん」

「朝食に一緒に行きませんか?」

「いいよ」

俺の言葉を聞いたセシリアは顔をこぼすと輝かせて手を胸の前で組んで嬉しそうに俺の腕に抱きつくる。

「では、行きましょー。」

「ちよっと待つひ。少し、用意してくるから」

こへり向でも、こんな時間に誘いに来てくれるとは思っていないかったので、さすがにパジャマではないけれど、何も用意していない。

エス学園の授業開始時刻は八時四十分、普通の学校と変わらない

時間だらつ。ただし、他校と一番違うのはヨウ学園の敷地内に寮がある。寮から校舎まで徒歩で十分程度で、ついてしまう。

そのため、七時半に起きて三十分で用意して、一十分で朝食を食べて登校しても、十分前に着くことができる。

だから、女の子は朝、身支度があるので無理だけど、俺と一夏といつた男は七時現在に起きていることはあっても、用意が完璧なはずがない。

まあ、朝からワックスなどで髪を一時間位かけてセットするような奴なら、ある程度、用意できているだろうが、生憎、俺は長い髪をとかしていくつて終わりなので、用意できていない。

俺は手早く髪をとかして、くくると、すぐに鏡でおかしい所がないか確認してからセシリアの所に戻る。

「お待たせ」

「いえ、では、今度こそ参りましょ、リアム様」

鼻歌を歌いだしそうな程、『機嫌のセシリアと一緒に食堂に向かう。

……毒を吐かなくなつた、セシリア…………普通に可愛いく……

「とにかく、セシリア」

「はい、何でしようか、リアム様」

「何でリアム『様』なんだ？」

「そんなこと決まっていますわ」

セシリアは今日、一番の笑顔で

「^{わたくし}私の王子様だからですわ」

そう言つてくれる。

やばい、顔が赤くなるのが分かる。

俺は不自然だと分かりつつもセシリアとは反対の方向を向く。

「ふふ、^{わたくし}私を少しは意識してくださつているようで、嬉しいですわ。この調子で、リアム様に好きと言つていただける日まで頑張りますわ」

……父さん、あなたが三人の母さんから、『愛していますよ、あなた』と言われた時に顔をだらしなくさせていた理由が分かります……確かに嬉しいです。

その後、何事もなく、食堂に着いた俺とセシリアはお互い、好きな朝食を購入して合流した。

まだ、数回しか利用していない寮の食堂だけど、どのメニューも安い割に物凄く、美味しい。全メニューを制覇した訳じゃないけど、見ていてる限り美味しそうにしか見えない。さすがは日本政府が巨額な資金を費やしているだけはある、と言える。

ちなみに、俺の今朝のメニューは鮭定食だ。

鮭の塩焼きと味噌汁、卵焼き、お漬物、炊きたての『飯で百五十円のメニュー。もちろん、『ご飯のおかわりは自由。転生前の知識しかないのに、分からぬが、どれだけ、モーニングセットが安く設定しているとは、いえ、このIS学園の食堂の値段に勝てる定食店は存在しないだろう。日本の物価がおかしくなつていなければ、

「リアム様、あの四人用の席が空いていますわ」

「あそこにしてよろか」

「はい」

セシリアが持つてゐる、朝食はミルクとサラダ、二つのクロワッサンだけだ。女人人が小食なのは知つてゐるが……それで、昼間で持つのか本当に疑問だ。ナターシャ姉さんは

『リアム、私は食べたいだけ食べるけど、きちんと運動もしているから太らないのよ!』

と語っていた。

ああ、そういうえば、昨日、俺はセシリア・オルコットのことをセシリアと呼ぶことにした。

「リアム様は日本食なのですわね

「あ、うん。せっかく日本に来たんだから日本独自の食べ物を食べたいじゃないか」

「はい、そうですね」

それから一人共、何も喋らないで黙々と朝食をとする。

おそらくセシリアの母親はテーブルマナーのうるさい人だったのだろう。俺の母さんの一人であるアリス母さんも、物凄く、そういうのに厳しかったんだけどな……ナターシャ姉さん曰く

『『』飯は楽しく食べないと損!』

といふことで、喋りながら食べていた。今、考えると保護者として、どうなのだろう? ナターシャ姉さん……

「おはよう、リアム……」

沈黙が続く、俺達の朝食の席に一夏がやって來た。

その、何だ……まだ、知り合つてから数日……正確には、三日だけ……痩せたな。篠さん……何をやっているんだ?

「私は変なことはしていない」一夏が軟弱なんだ!」

後ろから篠さんが、まるで、鉄砲玉のよつて飛んで来た。

何で、俺が考えたことが分かるのだろう? 「ご飯を噛みながら考
えているから一人ごとを言つていい可能性はないのに……さすが
は篠ノ之束の妹……読心術くらじ会得しているのか……

「むう……リアム……貴様、何か私を馬鹿にするようなことを
考えていないか?」

「いえ、そんなことはありませんよ。篠さん」

「…………やうか…………」

全然、納得していません、とこつ顔をしている篠さんだけじ、こ
こは無視するのが一番だらう。

「つて、何で金髪がここにいるんだよ?」

一夏がセシリ亞を見て驚いている。

あ、篠さんもか。

「あら、私がリアム『様』の傍におつましたら、変でしょつか?
織斑さん?」

「い、いや……変ではないんだけど……」

一夏が俺を見る。何か助けを求めるみたいに。

まあ、仕方ないか。後で話すとアイコンタクトを送ると、納得するように、セシリアの隣に座る。

「まあ、織斑さん。私とリアム『様』との楽しい食事を邪魔なさいますの？」

「はあ？　おまえら、何も話してなかつたじゃないか？　何が楽しいんだ？」

「まあ！？　少しばかりアム『様』のように落ち着いてくださいまし、食事では最低限の言葉しか話さないのは世界共通のマナーでしてよ？」

「うう、世界は世界、日本は日本！」

……一夏…………それは、まるで説得力がないぞ。後、世界の日本人に謝れ。

「日本人ではなく、あなたが野蛮なだけのようですわね。織斑さん」

「確かに、今のは他の日本人に失礼だぞ、一夏」

「ほ、笄まで……リアム……」

「はあ、今回は一夏が悪いが、確かに親しい人と喋りながら食事をするのも楽しいのも事実だよ。俺も姉さんと良く喋りながら食べてたから」

「…………親しい人…………そうですわね！　リアム様！　喋りながら、

食べるには楽しいですねー！」

「おこー。」

一 夏がセシリ亞に何か言おうとした時だつた。

「……、ガキ共！ こつまで、ちゃんと食事をとっている、つも
りだ！ 早く準備をしろ！ 始業時間に遅れた者は反省文とグラ
ウンド五周をプレゼントするぞー！」

白いジャージを着た織斑先生が食堂にやつて來た。

織斑先生がいきなり、食堂に來たことに驚いて一 夏は言葉を言つ
のをやめて、織斑先生の方を見る。

「何で、千冬姉ちふねねえが！？」

一 夏の言葉を聞いた織斑先生は「ひかり」と、すべにやつて來て

「織斑先生だ、馬鹿ものー！」

……織斑先生の拳は痛そつだ、とだけ言つておひづ。

「……分かつたよ、織斑先生……」

「分かりました、だ。馬鹿もの」

……一 夏……一 発田は、へりひづなよ……

「おまえ達も遅刻するなよ……まあ、食事が終わってないのは織

斑だけ、だから大丈夫か」

「え？」

そう俺とセシリアはほぼ、食べ終わっていたので織斑先生が来た時点で、急いで残っていた朝食をたいらげた。そして、篠さんも、凄い早さで朝食を食べた……

そう、必然的にこのテーブルで朝食をとっていないのは、一夏だけだ。

「さて、遅刻しないよう、行くとするか」

「はい」

セシリアは笑顔で俺の後について来てくれる。

そして、篠さんは

「早くしろよ、一夏」

一夏を見捨てることにしたみたいだ。

「リアム

」「

一時間目の授業が終わった休み時間。セシリアと談笑していた俺

の所に一夏がやつて來た。

「どうしたんだ? 一夏」

「おまえ、授業の内容分かる?」

「ああ、まだ、基礎のところだし」

まあ、科学者だったムーラ母さんに色々と工学系の知識はかなりあるから、應用になつたとしても大丈夫だと思うけど。それ以前にナターシャ姉さんと一緒にいた時に、つまり、代表候補の予備軍になつた時にナターシャ姉さんに工Sの基礎は叩き込まれた。

「……授業についていけないんだ」

「はあ?」

驚いているのは俺だけではなく、セシリ亞も、だ。

セシリ亞も代表候補だから、この時点で分からぬということはないのだろう。いや、この工S学園に入る人間はそれなりに勤勉な人間か才能がある人間しか入れないので、必然的に、この時点で分からない人はいないだろう。……特例を除いて。

「織斑さん、あなた、入学前にもらつた、教本をお読みになられませんでしたのか?」

「教本?」

「ええ。この位の厚さの本でしてよ」

セシリ亞が手で大きさを表現する。

「ああ、そんな本あつたな…………確かに新聞の回収にだした記憶がある。」

「…………古い電話帳と間違えて捨てた本だ……」

「まあ！？ あなた、馬鹿ですか？ 天下のヒュ学園から支給された教本を捨てるだなんて」

「…………」の状況で俺も捨てた何て言えない。

「仕方ないだろ！ 捨てちまつたんだから！ それに、朝からリ亞ムの傍にいて、小言言いやがって、俺はリ亞ムに相談しているんであって、おまえに相談しているんじゃないんだよ！ 金髪！ 」

「何ですって！？ 朝は、リ亞ム様の前でしたから、我慢しましたが、二回も私のことを金髪ですって！？」

「だつて、金髪だろうが！」

「むきい！ 何て失礼な男！ 何でしよう！」

「そつちひそ、何でしつこいんだ！」

「決闘ですわ！」

「上等だ！」

その話を聞いていた織斑先生は寝不足そうな顔をして

「……おまえ達の間では、決闘が流行っているのか？」

と、俺に聞いてきた後にアリーナの使用許可書を書いてくれたとか……何か、ごめんなさい。

そして、なぜか、これがクラス代表決定戦ともなったのだが、セシリア、アメリカ代表である俺がいる状況でイギリス代表のセシリアがクラス代表になるのは問題だらう？

クラスの盛り上がりを見て、言い出せない俺だった。

女神「この頃、感想にリアムがKNFを使つていなければ感想で言
われているでしょ？ 何で連発しないの？ この物語のつづはKN
Fじゃないの？」

翼「…………実は…………『今』は少し、抑えています。シャル編あた
りから、異常な程、KNFのお世話になるので……」

神「ふうん、私は連発させてもいいと思うけど……」

翼「俺の意向なの（涙）シャル編あたりから、ありえない程使つか
ら……」

神「泣かなくともいいじゃない…………まあ、ネタバレになるから言
わないけど一応、理由があるのよね」

翼「うん…………（大泣き）」

神「（はあ、このバカの相手するの疲れるわ…………）
では、これからもHIS - consciousness - をよろしくお願
いします」

Episode 02 KNF、教える

「はあ」

本来なら、学生の楽しみであるはずなのだが、今日、ばかりはそうではない。

なぜなら。

「織斑さん、あなた向こうに行つたらどうかしり?」

「嫌だね。俺はリアムと飯が食いたいんだ」

「私もリアム様と食事がしたいのですわ」

「な、俺が先にリアムと一緒にいたんだろ!...?」

「ですが、私の方が先にリアム様に声をかけましたわ!」

『むうー』

……なぜに、仲良くできないんだろう?……それに何気に、一
人共、息があつているけど。

ちなみに、この場には篠さんもいるのだけど、篠さんは黙々と和

食定食を食べ続けている。おそらく、一人の仲なんぞひとつもないのだろう。

「 もういえば、一夏、どうするんだ？」

「 何が？」

「 勉強だよ。全然、ついていけないんだろ？ でも、一週間に後にセシリ亞と決闘するならエリを動かす練習もしないといけないだろ？」「

「 気合で.....」

下を向いて落ち込んだ様子で、そういつひ一夏に対しても非情にもセシリ亞が

「 なりませんわね」

切り捨てる。みると、篠さんも、うるうると頷いている。

まあ、気合でどうにかなるなら、誰も学校に勉強しに来ないか。

「 何だと？」

セシリ亞に対して怒る一夏..... ほの一人、本当に犬猿の仲だな

「 ほら、怒らない。怒らない。セシリ亞の言っていることも事実だから」

「…………はい」

「ふんですわ」

「はい、そこで、セシリ亞も勝ったような顔をしない。そんなんだから、喧嘩になるんだよ?」

「…………分かりましたわ」

「まあ、決闘の話しあおいておくとして、俺達は今、一年生だからな。たぶん、今から申請しても学園が保有する量産型のエレベーターは貸してもらえないだろ?」

「えー? どうなのか?」

驚く一夏。

「ああ。普通、卒業間近の三年生に優先的に貸し出されるからな。それも成績順に」

「何だよ。それ、平等じゃないのかよ?」

心の底から本当に疑問に思ったのだろ?。首まで傾げる一夏。

そんな一夏に対してセシリ亞は

「当たり前ですわ。エレベーターの数は決まっているのですわよ、三年生になつた段階で進路は一つに分かれると言つても過言でござりません。一つは代表候補、あるいは代表、及び、どこの国家または企業のテストパイロットになること。もう一つは普通に進学あるいは

就職する。後者の場合は研究、開発関係にいかない限り、IRSと関わる機会は絶たれることになりますが」

「はあ？ それじゃあ、何で、IRS学園には、こんなに人がいるんだよ？」

「簡単ですか」

セシリアの言葉を引き継ぐ形で俺は言葉を紡ぐ。

「そのわずか一握りになりたいからだよ。代表選手になれば、正直、レベルが違うからだよ」

「何の？」

「待遇だ」

「はあ？」

俺は昔、調べた日本の情報を一夏に話す。

「日本の代表選手になつた場合、まず、特典として税金が全て免除される。消費税については別だけど。さらに、国からの給金は政治家並み。公共交通機関、航空機、宿泊施設を使った料金も全て無料ただあるいは半額などの特典が得られるんだ。これでも、一部だけ、細かいの特典を言つて言つたらきりがない」

「何だよ…………それ…………いくら、今が女尊男非な世界だからって

「……」

「リアム様が仰った理由で、だいたいありますわ。代表選手になれるのは数世代で数人。ですが、それでも代表選手になれる可能性がある限り皆、わたくし私達は、夢を目指すのですわ。周りも様々な特典があるために後押ししてくれますし。ある人は名誉のため、ある人はお金のため、理由は様々ですが」

「一夏、まだ、これはISがもたらしたIS操縦者における、利点のみだ。汚点は正直、ここで言えない程、酷い。それもIS操縦者なら覚えておかないといけない。特に俺と一夏はIS以外の道が絶たれていると言つても過言ではないから」

俺の言葉を聞いてセシリ亞も暗い顔をする。代表候補生だから、ある程度、知っているのだろう。

俺と一夏の立場について。

「まあ、話しされたが一夏の勉強の話しだけど、勉強と決闘両方をとるなら、学校が終わってから数時間は体を鍛えて、それから、十一時くらいまで座学を俺が教えるよ」

「お、おうーでも、何で体を鍛えるんだよ？ ISに乘るんだつたら……」

「初心者が陥りやすいミスなんだけど、それは間違っているんだ。そもそも、ISはパワードースツ、つまり、強化する訳だから、元が良いに越したことがないんだ。代表選手クラスになると、皆、武術や何か特殊な方法で体を鍛えているよ」

「そ、そうなのか……」

それ、故に……また暗い話しが生まれてしまつただけだな。

今は話す必要はないか。

「それで、体を鍛える方法なんだけど…………」

「それは私が受けもとひ」

それまで静観していた篠さんが会話に入ってきた。見れば、いつの間にか一人だけ食事を終えている。

「一夏、おまえ、私と別れてから剣から離れていただろひっ、体の作りが変わってしまっているぞ」

「わ、分かる…………か？」

「ああ。私が一週間で、体を戻すとまではいかないが、心構えだけは叩き直してやひつ」

自信満々な篠さん。

それなら…………俺は

「それじゃあ、一夏のセコンドが篠さんなり、セシリアのセコンドは俺だな」

「はあ！？ 何でそうなるんだー！？」

テーブルに手をついて、立ち上がる一夏。

「そつちの方が面白いだろ？ 篓わん、それでいいか？」

「ああ、勝てないにしても善戦できるまでこましやるわ」

自信満々の篓わん。一夏のことを信頼しているのだらう。

「リ、リ、リーム様！」

今までになじみで、高い声を出すセシリリア。

「ん？ じつしたの？ セシリリア

「ほ、ほ、ほ、本当に……よ、よひじこのですかー？」

何これ、可愛い。

「ああ。だから、一夏が篓わんこ、剣の指導を受けてこる間、セシリリアは俺と一緒に訓練をしてあげる」

「はーー！ ありがとひーりやーこますー！」

「やうと決まれば、今から本国に連絡をとりて許可をもらひつよ

「私も今すぐ、連絡してきますわー！」

やうと決まれば、今から本国に連絡をとりて許可をもらひつよ
かに飛んでいく勢いで走つて行つた。

もうひとり、俺もE.V社に許可をもらひたために、席を立つ。

「じゃあ、一夏、夕食の後に、一夏の部屋に行くから

「ああ、頼むよ……それで……」「……」

「ん？」

「セシリアの情報を……」

「決闘は公平にやらないといけないな」

「うう」

引きつった笑みを浮かべる一夏。

「だから、少しだけだぞ」

「いいのかー?」

「相手は代表候補、一夏は素人。当然だろ?」

「ああ!」

「夜の勉強の後にでも教えてやるよ

「頼んだぞ!」

「はあ、はあ、はあ」

「どうした？ もう終わりか？」

「ま、まだですわ！」

黄金のシールド・ビットを四機携えた、生身のリアムに対して、セシリ亞は四機のブルーティアーズと全ての装備を装着した状態で対峙していた。

しかし、装備とは裏腹に形勢は明らかにリアムが優勢だった。

セシリ亞はスター・ライトmkIIIEつまり、ブルーティアーズの主力兵器である特殊レイザーライフルの銃身をリアムに向けて、そして、引き金を引く。スター・ライトmkIIIから放たれたレーザーは一直線にリアムへ向かうがあつさつとシールド・ビットによって防がれる。

「まだですわ！」

セシリ亞の掛け声と共に、リアムの背後に配置していたブルーティアーズからレーザーが放たれる。

しかし、それも、リアムの操作するシールド・ビットに弾かれる。

戦闘行為を始めてからリアムは同じ位置から、まったく動いていない。その時間、三十五分。

その上、リアムは一度もシールドバリアーを発動させていない。つまり、全てシールド・ビットでセシリアの攻撃を全て防ぎきっている。

「ここですわ！」

セシリアのブルーティアーズの数とシールド・ビットの数は互角、スター・ライトマークエイエイをいれると、セシリアの武装の方が多い。といふことは……

五方向からの一斉射撃がリアムを襲う。

しかし

「ガンダ」

シールド・ビットから砲門を出し、セシリアのブルーティアーズと同じレーザーを放つ。そして、セシリアの放ったレーザーに当てて軌道を変え、やうに、一機のシールド・ビットを自分の前に移動させて、防ぐ。

「そんな…………レーザーにレーザーを当てるなんて…………」

「代表生なら、できるはずだよ」

「くっ、ブルーティアーズ！」

セシリ亞はブルーティアーズに様々な動きをさせ、リアムを攪乱し、せらに自分もランダムに移動してリアムの気を逸らしそうとする。しかし、数で勝っているのに当たれないのに、少し攪乱した程度で当てるはずもなく、時間はどんどん、経っていく。

そして

「アリーナの使用終了時間だ。」
「まだにじょう

「はあ、はあ、はあ、分かりましたわ。ありがとうございました……」

アリーナを借りられた時間は四十分。一年生でありながら、これは破格のことである。

後がない三年生を差し置いて借りられたのはリアムがアメリカの最終兵器と影で呼ばれていることと、第三世代のデータを少しでもとりたいイギリスの圧力がかかったためだろう。

「リアム様はどうして……そこまでピットを操れるのですか？」

ピットに戻りながら、セシリ亞はリアムに聞く。当たり前の疑問を。

そもそも、ピットシステムがイギリスで開発されたのは最近なのだ。

この技術を持っていると公表していなかつたアメリカがそれより

も早く開発していたとは考えにくい。

だが、ここまで高度な技術をリアムが持っているとなると認めざるを得ない。

イギリスよりも早い段階でアメリカはビットシステムを開発していったか、あるいはリアムが天才であるかを。

「だから、ある程度、上手かったのは事実だけど。練習したのは確かだよ」

「失礼ですが、何時間程？」

「百時間くらい」

「ひや、百時間！？」

それは代表候補からすれば、破格の時間だった。

なぜなら、セシリ亞がISを動かした総時間は一百時間弱。ブルーティアーズの操作の訓練はせいぜい、二十数時間だ。

しかし、それは別におかしいことではない。いや、むしろ、多い方だ。

IS学園に入る前の彼女はあくまで代表候補の候補だ。専用機を持つている訳はないし。ISの数は限られているため、例え、適正ランクAであっても、優先的に使わせてもらえるはずはない。

なぜなら、代表生候補の候補よりも代表候補にISを与えた方が

色々と都合が良いからだ。

唯一の特殊ケースがあるとすれば、リアムや一夏、さらに適正ランクSの人間だけだろう。

適正ランクS。それは世界で未だに数人しか確認されていない。

しかし、適正ランクSの人間がISの専用機に乗った場合、今までのケースから推測するに、必ず、ISは二次移行している。ISの核^{コア}がブラックボックスであるがために、理由は不明だが。

ちなみに適正ランクSの人間の代表例が織斑千冬であることは言うまでもない。

「まあ、それだけ動かしていくセシリ亞から攻撃を受けたら、俺にはよっぽど、才能がないってことだよ。これから、毎日、ビットの動かし方を体に叩きこんであげるから、覚悟しててね」

「か、か、体に叩き込む……いやですわ リアム様つたら」

「ん？」

突然、顔を真っ赤にして、リアムとは別の方を向いたセシリ亞に対してもう一度頭を傾げたのは言ひまでもない出来事だった。

セシリ亞が、自分がお仕置きされるという妄想から帰つて来たのは実に……二十分のことなのだが、リアムは律儀にそれを待つていたのだった。

Episode 03 KNF、不幸に思つ

簡潔に今の状況を言おう。

セシリ亞が一夏を躊躇している。

もううん、変な意味ではなく、工房での戦闘での話しだが……

向こうのピットには、織斑先生、三田先生、篠さんがいるのだけ
ど、ねそらく皆、渾然としているだろつ。

そもそも、事の発端は先ほどまで遡る。

ISでの決闘をするに關して、俺は一週間、セシリ亞にブルーテ
ィアーズの操作というよりもピットの動かし方をひたすら体に教え
込んだ。セシリ亞に元々、才能があつたためか、みると内に、ビ
ットの動かし方は俺と決闘した時とは比べ物にならないレベルにま
でなつた。

もしかしたら、一時間くらい、初田のように俺は防ぎっぱなし
ら、一撃くらいはいれられるかもしれないレベルだ。

一夏にピットの弱点や攻略方を教えたんだが…………明らかにセシ
リアのレベルはそんなものでは、解決できないレベルになつてしま
つたので、できる限り、分からなにように手加減してあげて、とセ
シリ亞に頼んでいたのだけ……

俺が若干、教師陣に怒つてしまい、セシリ亞に手加減する必要は
ない、と言つてしまつたのだ。

……セシリアも俺が言うから手加減したくないが、仕方ないと
いた感じでの了承だったので滅茶苦茶、喜んでいた。

一夏には悪いことをしてしまった。

なぜ、俺が若干怒ってしまったかといつと、理由は簡単、一年一組の担当である織斑先生、山田先生の両名が向こうのピットに行ってしまったからだ。

例え、一夏の専用機である『白ばら』が今日、届いたとしても、他の先生を呼んでも、片方はこちらに来るべきだろ？

セシリアだって一年一組の生徒なのだから。

どれだけ、一夏は特別扱いなんだ？

俺がそのことに文句を言いつて行くと織斑先生、山田先生、両名とも、少し、うるたえていた。

……そこまで考えていなかつたのか？

まあ、そういう訳で、セシリアが轟ろにされてしまったことに怒つて許可を出してしまつたことに俺は少し後悔していた。

……一夏に非はなかつたんだから。

『くつそ、せつかくリアムに教えてもらつた避け方も、相手がこんなに早いんじゃできねえよ』

『あら、それはあなた自身が弱いからではなくて？ リアム様があなたに間違つたことをお教えになつたように言わないでくださいま

すか？ 不愉快ですの』

HSの通信機能によって喋っている一夏とセシリ亞の声が一いつ
のピットにも聞こえてくる……

……現在、試合開始から五分経過。

セシリ亞のエネルギー残量 九割

一夏のエネルギー残量 一割

状況を確認した、その時だつた。一夏の『白式』が光を放つ。

一次移行…………まさか、一夏の奴…………最適化もしていない状態
で戦つていたのか？

いや、この場合、それをさせた織斑先生、山田先生に問題がある
のか……

それにあれば…………織斑先生が現役時代に使っていた武装…………
確か、名前は雪片^{ゆきひら}…………そうか、あれは篠ノ之博士の作成した専
用機か…………それなら、本来、セシリ亞のブルーティアーズでは勝
てない…………はずなんだけど、後は操縦者の問題か……

たぶん、篠ノ之博士は一夏が自分の身を守るための『剣』を与えたつもりなんだろうが……一夏の操縦技術では、むしろ、悪手か誰かが、I.Sの訓練をつけてやらないと最悪『白式』を奪われた上に殺されるぞ……いや、拉致されて実験動物か……

仕方ない。俺が……いや、きっと篠さんが教えてくれるだろうから、そのサポートだな。

そして、一夏が雪片ゆきひらを使おうとするべく、一夏のI.Sのエネルギーが切れた。

……織斑先生、いや、姉のI.Sの能力を知らなかつたんだな……一夏。

「リアム様！ 勝ちましたわ！」

満面の笑みでリアムの待つピットに戻るセシリ亞。

もし、仮にこちら側のピットにいたのが他の誰かなら、セシリ亞は『当然ですわ！ 私はイギリスの代表候補生ですから』と自信満

々に言うのだろうが、待ってくれている相手がリアムであるため、
そのような意地ははらない。

「よく頑張ったね」

そんなセシリアをリアムも笑顔で迎える。

内心では

(一夏……大丈夫かな？ いじけてないかな？)

と心配しているのだけど、そこは女の扱いを母親（とても厳しい）
より叩き込まれていてるリアム、顔には一切出していない。

セシリアはすぐに、ブルーティアーズの展開を解除するとリアム
に抱きつぐ。

「うふふ、勝ったのですから、これくらいは許してくださいまし」

「ああ、いいよ」

少し顔を赤くしつつもリアムも一応、セシリアを受け止める。

おそらく、これは日本人にはできないだろう、過激なスキンシッ
プを行うことのあるアメリカとイギリスだからできたのだろう。も
ちろん、そういうことが苦手な人間もいるが、リアムとセシリアは
割と寛容だった。

「そ、それですね……」

「何?」

セシリアは顔を真っ赤にさせトリアムの胸に自分の顔を埋めながらトリアムに話しかける。

「か、勝った、『』、『』、『』褒美に……デ、デートしてくださいま
しつ」

盛大に顔を真っ赤にさせる。もはや、今のセシリアの顔は完熟したトマトと勝負できるレベルだ。

「ん? そんなことでいいの? 別に良いよ」

セシリアは、これを言つたために昨晚、ルームメイトに向かつて予行演習していたのだが、まさか自分でも、ここまで上手くいくとは思つていなかつたため、一瞬、啞然としてしまう。

ちなみに、その時の内容を音声のみ録音していたとしたら……以下のようになる。

『セシリ亞……………! れ、何?』

『私を助けると思ってお願いしますつー今度、本国で行ひ劇の台本なのですかー!』

『……………分かつた……………それで私は、どうすればいいの?』

『ありがとうございます。この男役の方をお願いしますわ!』

『…………分かつた…………』

『では、行きますわよー。』

『…………うん…………』

『リアム様っ！ 私はリアム様に言われた通り、織斑さんにて、手加減して勝ちましたわ』

『はっ、俺の言いつけを守れたようだな、この雌は』

『いやん！ リアム様…………なぜ、私を叩くのですか！？』

『はあ！？ 貴様、俺に飼われている雌であるにも関わらず、手加減していくても、一分以内に勝つのは当たり前だり？ それができなかつたら、仕置き、だ。今日はいつもの倍だ』

『そ、そんな…………で、でしたら…………お仕置きは受けますから…………で、ですから…………勝つた、』褒美に今度デートしてくださいましつ』

『ふんっ、飼われている雌の分際で何てことを言いやがるん。身の程を知れ！』

『で、でも…………』

『しかし…………そうだな…………たまには外で仕置きをするのも一興か。喜べ、雌。今度は外で仕置きをしてやる。そのついでに、デートもしてやるよ』

『ほ、本当ですか！？ リアム様！』

『ああ』

『完璧ですわ！ これで明日はいけますわ！』

『…………せめて、台本の名前は変えておこうよ。セシリア…………
後…………これ、絶対イギリスで公演できないでしょ…………それに、
そもそも、リアム君つてこんなキャラじゃないよね…………』

もちろん、セシリアはルームメイトに自分がリアムに恋をしていることは隠しとおせていると思つている。

色々な意味で本当にお嬢様なセシリアだった。

今すぐ、関係各所に謝りに行くべきだらう、イギリス代表候補生、
セシリア・オルコット。

「日程の方は今度の土曜日でいいよね？」

「ええ、お願ひしますわ」

「それで、行く所は決まつてる？」

「いえ、特に何も決めていませんが

「分かつた。それなら、俺が決めるから、セシリアは楽しみにして
て」

「はいっ」

自分で自分のハードルをあげるリアムにセシリアは満面の笑みで返事をする。

ちなみに、今はまだ、授業中だというのに、抱き合つて次の休みの時のデートの話をする一人を監視カメラで見ていた警備の人はあきれるどころか、鼻息を荒くして見ていたとか。

その話を聞いて、また、頭が痛くなる織斑先生だった。

もちろん、今回の件はセシリアのピットに担当の教員が誰も行かなかつたことの詫びとして見逃された。

あの仕事に関して真面目な織斑先生を知っている者なら驚くだろうが、真面目な分、ミスに対する埋め合わせは、きちんとすると、人だったのだ、織斑先生は。

後にウサギ耳をつけた、ある科学者は

『ちーちゃんは昔から自分を叱ってくれる人には甘いから、きっとMだね』

もちろん、その後、千冬のアイアンクロガをく裂したのは言つまでもない。

Episode 03 KZF、不幸に思つ（後書き）

翼「つまらん、原作ちゃんと読め、アンケートするのもいいなの？とか言われてしまつている翼です……」

女神「……あんた、元気なの？」

翼「うん！ だつて人氣ない作品には、つまらない、とかいう感想も書き込んでもらえないんだよ。人氣が出てきた証拠だよ それに、人の意見は千差万別、このお話を気に入ってくれている人の意見しか真に受けない！ 占いで悪いことを言われても無視、良いことを言われた場合のみ信じる！ そんな性格です作者は！ もちろん、伏線をきちんとはつた方が良いとか、ここでの表現があいまいだつたから、もつと具体的にとかのアドバイス的な悪いこと？ は、もちろん、きちんと受け止めますが、つまらんとかそういう言葉に對してのみ」

神「…………ある意味、ポジティブね…………」

翼「アンケートは現在、数を数えています。參加してくださつた皆様、ありがとうございました。アンケートが終了いたしましたので、コーナー以外の方の書き込みはできない仕様に戻しました。ご了承ください」

神「アンケートに參加してくださつた、たくさんの方々、本当にありがとうございました。たくさんの方々に參加していただけて本当に嬉しかつたです」

翼「原作ちゃんと読み直した方が良いとか言われていますが、小説情報のキーワードにも書いてあります、作者の独自解釈を、勝手にこれからも貫いていきます。ご了承ください」

神「これからもIIS - unconscious - をよろしくお願ひします」

翼「では、失礼します」

「一年一組の代表は織斑一夏君になりました」

「はあつー?」

一夏の素っ頓狂な声をあげて驚く。

まあ、それはそうだろう。代表を決める決闘でボロ負けしたにも関わらず、自分が代表になつているのだから。

「な、何で、俺が代表になつているんですかー? 山田先生ー!」

最後の理性が残つていのか、敬語で教壇の上にいる山田先生に問いかける一夏。

「それは、^{わたくし}私が事態したからですわ! 織斑さん!」

後方の席から、セシリ亞の声が挑発的な声が教室内に響く。
何で……そんなに喧嘩越しなんだよ……

相変わらず、俺以外の男に対しては偉そうな態度をとるセシリ亞。この学園内では一夏が該当する訳だけど。まあ、きっと後で喧嘩するだろ?。

「何で負けた俺が代表なんだよー!」

「それは高度な政治的判断ですわ!」

偉そうにそう言つセシリ亞。

まあ、セシリ亞にそう言つたのは俺なんだけど。俺とセシリ亞との決闘のデータは俺達の国にそれぞれ送られており両国共、知つていることになる。勝敗に関しても。

これで、クラス代表を決める際に戦つて勝つた方がなるということになると、アメリカも黙つていられなくなる。なぜ、セシリ亞より強い俺が代表ではなく、セシリ亞が代表なのか？　と。

もちろん、俺はそんなことで一々、文句を言つつもりはないが色々と政治の世界では問題があるため、あの後、俺がセシリ亞にそのあたりの話をすると、すぐに理解してくれた。そもそも、ISの発展は国防に直接関係していく訳だから、どの国も稼働データは喉から手が出るほど欲しいのは当然だ。

それに本来なら、代表候補を同じクラスにするなど、ありえない。普通に考えて代表候補は国の顔と言つても良い。そんな代表候補を同じクラスにして片方をクラスの代表にしてしまえば、最悪、その国の外交が悪化する可能性もある。わざわざ火種を作る必要はない。

そして、代表候補生は代表候補としてIS学園に来た時点でクラスの代表にならないといけない。クラスの代表になればISでの戦闘が増える。必然的にデータがとれる回数が増えるのだから。

クラスの代表になれないような器なら代表候補を下ろされるだろう。国で保有しているISの数には限りがあるので、クラスの代表にもなれないような者に専用機を持たせる意味がない。ここに来た理由をはき違えている者か馬鹿以外は代表候補まで上り詰める者は分かるはず。だから、本来なら代表候補がクラス代表に立候補

しないなんてあるはずがない。今回の俺とセシリアは特異ケースといつことになるんだ。

おそれらぐ、俺とセシリアと一緒に一夏と一緒にクラスにした時点で、アメリカ、イギリス、日本の高官の間で一夏を代表にするというように決められていたはずだ。そうじやなかつた場合、更謹審と同じようくセシリアを違うクラスに配置するはずだ。EVS学園のクラスは他にあるから。

EVS学園の勝手な仕業という可能性は限りなく零に近い、アメリカとイギリスの関係を態々、悪化させる理由がEVS学園にはないのだから。先進国の中でも特に軍事力を保有している両国を刺激すれば最悪、ISを使った戦争が起こる可能性さえある。それは競技目的でISの使用を推進するEVS学園にとってはむしろデメリットばかり目立つ。

俺とセシリアと一緒にクラスにするメリットがほとんどない中、イギリスがセシリアを俺達と同じクラスにしたした理由は……セシリアを一緒に近づかせるためだろう。

そういう訳で既に前々からクラス代表は一夏で決まっていたんだ。エターナル・ヴァルキヨーラもちろん、EVS社にも確認を事前にとっている。

「政治って……」

一夏は、もっと違つ理由で代表になつていていたのどうう、政治といつ言葉を聞いて少々、たじろいでいる。

まあ、そう言わされたら、何も言えないな。例え、一夏でも。

「そういう事だ。諦めろ、織斑」

織斑先生のその言葉で肩をおとす一夏。

まあ、一夏にとつても実戦経験を積めると思えば悪い話じやないんだけどな。

それにしても、織斑先生…………どこか嬉しそうだ。…………前々から思つてたけど、この人、若干、ブラコンだな…………俺もシスコンぽいから言えないと…………

「さて、皆も知つての通り、一週間後にはクラス代表戦がある訳だが、代表にならなかつた者も、気をぬくなよ。クラス代表戦の後は個人によるバトルトーナメントなのだからな」

『はい』

クラスの女子の声が重なる。

バトルトーナメントには外部からのスカウトも来る。そこで目立てば一年のこの時期からでもスカウトされることも、ある訳だから皆、気合をいれるのだろう。

そういう俺も第一世代の訓練機に負けるようでは代表選手として周りに示しがつかないから負ける訳にはいかないのだけど。

横を見ると、一夏が俺に何か助けを求めるように見つめて来るが

「一夏、諦めろ、織斑先生とセシリ亞の言つ通りだ。政治的な問題

になるから、一夏がなるしかない

「……分かった」

余程、クラス代表になるのが嫌なのか…………でも、他の代表候補がないクラスは全員、手をあげるほど、人気の役職なんだけどな

だつて、そうだろ？

三年しか猶予がないというのに、訓練機と自分に注目してもらえる機会は限られているんだ。少しでも、そのチャンスを掴もうとするのは当たり前だ。

まあ、一年一組は例外中の例外、だけど。

クラス代表が決まつたことで、一限目のIISの授業に入るのだった。

一夏が、また頭をかかえた…………俺が教えてあげている夜の勉強では、未だにIIS学園に入る前に覚えておくべき基礎の部分が終わっていないからな、一夏…………色々とこれから頑張れ…………

「 もう、 じ。 出るか 」

今日は、 学園が休みの土曜日。 本来なら、 色々とやることがあるのだけど、 今日はそれについてとを全てキャンセルした。

「 ターナー・ヴァルキヨニア
EVA社から、 読んでおくよつて、 と書かれている書類が溜まつて
いるんだけど…… 」

今日だけは忘れることがある。

今日は、 一夏とセシリアが決闘した日にセシリアと約束したデートの日だから。 仕事のことが頭にある男と何て誰もデートしても面白くないだろ？ だから、 一時的にでも、 忘れる。 最悪…… 怒られる」とこぼす。

さて、 僕は私服に着替えると駅へと向かう。 同じEVA学園の寮に住んでいるのだから駅まで一緒にに行けばいいと思うのだけど、 女の子には女の子にしか分からない何かがあるらしい、 駅で待ち合わせすることになった。

「 あ、 リームーだ。 やつは 」

俺が部屋を出た所で動物の着ぐるみのようなパジャマを着た布仏本音さんに出会った。 彼女は通称、 のほほさんと呼ばれている。 この子は本当にほほとしているからな……

「 おはよう 」

「おまえ、あいつか出かけるの？」

「ああ、ちよっと駅の方まで」

「やうなんだ」

こんな風におちよけているナゾ、彼女は生徒会書記…………あの更
識楯無の部下だ。何でも、更識家に代々仕える使用人の一族らしい
けど、本当かは定かではない。何せ、影武者やら、偽情報などが錯
綜している世界なんだ。目に見える情報を全て信じていたら、いつ
か、どこかで痛い目にあつ。

まあ、アリス母さんの奴やつだけど。

「私も一緒に行つていい？」リームー

「『めん、今日は一人でテートをする約束なんだ』

「む、それなら仕方ない。そうやう、お嬢さ、じやなか
つた、会長が今度、一緒にお食いべ食べ歩いて言つてたよ

「

「分かつた。それはぜひつて言つておいて

「分かつたよ。お嬢様も喜ぶよ

「

最終的にお嬢様つて呼ぶんだな、のほほさん。まあ、俺は構わないけど。

それに俺も一度、更識権無とは話をしたいと思っていたんだ。まあ、向こうがIIS学園に来た日に接触しなければ、会うつもりはなかつたけれど面識ができてしまったからには、もう接触しないよりも接觸した方が良いに決まっている。少なくとも俺は、そう思つ。

なぜなら、あちらには会長という立場にて、のほほさんといつ情報源があるのに俺にはなにもないのだから。それなら、こちらも、あちらと接点を持つて、こちらの情報を少しでも集めるべきだから……のほほさんがどこまで俺のことを更識権無に報告できているのかは疑問だけだ。

「それじゃあ、俺は行くよ。またね。のほほさん」

「またね　　、リームー」

「ふふ、今日はリーム様とデートですわ

昨日の間にチャエルシーに春の新作のワンピースを送つてもらいましたわ。これにお気に入りの星の形をしたネットクレスをつけて今日は完璧ですわ。

ブルー ティアーズと同じ蒼いワンピース。リアム様はこれを着た
私を褒めてくださるでしょうか……

あの歳下の小娘には……可愛い、と言つていましたが……私のこととも可愛いと言つてくださるでしょうか？

あん

想像しただけでも、胸の奥が暖かくなりますわ。リアム様……ふと、時計を見てみます。リアム様との約束した時間は十時。

現在の時刻は九時。

予定よりも一時間も早いですわ。

ですが、私は既に駅前にいますわ。

だつて、楽しみなんですもの

「Jの気持ちは恋をしている女の子にしか分かりませんわ。

鏡をとりだして、髪のチェックをしませんと、もし、どこか、変な所があればリアム様に会えませんわ。

それにも、なかなか、良い街ですね。リアム様が以前、『日本も良い国だよ』と仰られていた意味が分かりますわ。イギリスにはない魅力がありますわ。

「あれ？ セシリ亞。 もう来てたの？」

「あ、リアム様！？」

「私は急いで右手に持っていた鏡を隠します。リアム様に見られるのは恥ずかしいですわ。

「こういう時は男が待つべきだと思つて早く来たつもりだったんだけど、ごめんね。セシリ亞、待つた？」

「いえ、私も今、来たところですわ。それに、まだ約束の時間の一時間前ですわ。遅刻にはなりませんわ」

「ありがとう、行こうか？」

「はい」「

私はリアム様の腕に抱きつきます。

「セ、セシリ亞！？」

「リアム様でも、驚くことがあるのですね」

「そ、そりやね……」

顔が赤くなるリアム様。やはりチャエルシーの言った通りですわ。どんなに女の子に馴れている男性でも咄嗟の行動には弱いものですね。

それにもしても、チャエルシーはどこで恋愛に対する知識を手に入れ

てくるのでしょうか？

チエルシーが経験……ありませんわね。いつも、^{わたし}私の傍にいてくれていましたし……学校で……分かりませんわね……今度、聞くことにしてましょう。

「それで、一応、ここでショッピングしようと思つんだけど、構わない？」

「はい」

実は以前、ここで小娘とリアム様がデートしているのを見て、^{わたし}私このショッピングモールでデートしてみたかったなんて恥ずかしくて言えませんわ。

「それじゃあ、適當」

「あ、リアム様、あのお店に入つてみたいですね」

「え？」

私が指差したお店は男性用の服の専門店ですわ。

「俺の買い物はいいよ」

やはり、リアム様に物欲はありませんわね。ここ最近、リアム様と一緒にいて分かりましたわ。

それに、^{わたし}私が選んだ服をリアム様に着ていただく……嬉しいですわ。あの小娘に勝つているみたいで。

「いえ、私はリアム様の服を選んでみたいのです……ダメでしょうか？」

「……」
こういう時は上目遣いでしたわね。後、胸を押しつけるようになります。

は、恥ずかしいですわ……でも、これをすれば、大抵の男の人
は言つ事を聞いてくれるとチャエルシーは言つていましたし……

「……分かったよ」

「ありがとうございます」

腕を組んだまま、お店に入つて行く私とリアム様。

さつきから、胸を押しつけたままで。

今更ですが……リアム様は大きくても大丈夫でしょうか？ 世
の中には大きい胸の人は嫌い、という方がいるとチャエルシーが昨日
言つていましたわ。そういう方だった場合、私はリアム様を諦めな
ければならない、とチャエルシーは言つていましたわ……でも諦め
きれませんわ。

だつて、初恋ですもの。

「リアム様、リアム様は今日も白色を基調とした服装ですが、白がお好きなのですか？」

「いや、特に好きじゃないけど、今日はたまたま白だつただけだよ。でも、セシリ亞と私服で会うのは初めてじゃなかつた?」

「そ、そうですわ。言葉のあやですわ。気にしないでくださいまし！」

「う、うん」

危なかつたですわ。リアム様にリアム様を^{ステーキング}調査していることがばれる所でしたわ。

「では、じつらの黒色のジャケットなど、いかがでしょうか?」

私は一番始めて田に入つたジャケットを手にとつてリアム様に見せます。

なかなか、良い生地を使つていますわね。

「あ、いいね」

「はい　では、これは候補としてキープしておきましょ。では、次は　」

リアム様には今日、色々な種類の服を着ていただきましょ。

できれば、写真も撮らせていただきたいですわ。

觀賞用に。

Episode 05 KNF、シンクレと遭遇する

「 じーじが HIS 学園ね 」

今、あたしは世界で唯一、 HIS の操縦技術を学べる高校に来ていた。

日本に来るのも、一年ぶりだ。たった一年、それなのに以前来た時とは遙かに変わってしまって、 いろいろな気がする。

今、思えばお父さんとお母さんの仲が悪くなつて離婚した後に、お母さんに進められて HIS の適正試験を受けた時から、あたしの世界は変わった。

HIS の適性ランク A。これは代表候補並みの数値らしい。初めはお金のためと割りきつっていた。軍人になつた気持ちだった。だから、政府の人に HIS 学園に入学するよつて言われた時も断つた。

別に HIS 学園に入学して日本に行つても訓練ばかりであいつに会えないと思つたから。

それなら、まだ、軍の施設にいた方がお母さんやお父さんと顔を合わせる機会がないから楽だと思つた。

だけど、一ヶ月程前に世界に広まつたニュースを見て私は考えを

変えた。

世界に男でＩＳを動かせる人間が現れたという報道。

二人いるらしいけど、一人はどうでも良い。

もう一人が問題だつた。

彼の名前は織斑一夏。

あたしが小学生の時、中国人ということで虚められていた時に助けてくれた少年。

たぶん、あたしはあいつに恋をしていたんだと思う。

あたしの人生を変えたのはＩＳ

あたしを、また好きな人に会わせてくれたのは父でも母でも

もなくHS

やるせない。

あたしは思ひ、HSは色々な人の人生を変えている。いや、断言できる。

良い意味でも悪い意味でも。

そう言ひ、あたしも変えられてしまった一人。

そんなことを思いつつも私はHS学園の事務所を探す。

「もう、全然、見つからないじゃないの！」

話に聞いていたけど、何で馬鹿デカイ学園なの。

HSで空から探そうか……

「そうだ。そうじよひー。」

「何をするんですか？」

あたしは驚いて後ろを向く。

「つー？」

セヒロは長い金色の髪を結んでいる『男』が立っていた。

ああ、資料で見たことがある、アメリカにいたI.S.を使える男だ。
「こいつについて、調べるよ。」国から言われているけど、そういうのって、あたしの柄じゃないのよね。

それよりも、一応、色々な訓練を受けた、あたしが一切、気づかないなんて……

「どうかしましたか？」

「あ、」めん。事務所を探しているんだけど

まあ、使えるモノは使つわ。

「案内しようか？」

「いいの？」

「問題ないよ。俺はリアム・イーリー。よろしく

…………知つてこるわよ、とは言えないわよね。

「あたしは凰鈴音フアゼンイン よみ

「凰さんは転入生？ 珍しいね。こんな時期に

「ええ、ちょっと國の事情で入学するのが遅れたのよ

本当は、あたしが拒否していたんだけど、そんなことは言わないと分からぬことだから、言わなくても構わないでしょう？

「そりなんだ」

それから、そいつは、あたしの半歩前をスタスタ歩いて行く。少し前を歩いてくれているおかげで、どちらに行くべきか彼を見ていれば分かる…………」「いつ、女の扱いに馴れてるわ…………一夏もこいつくらいい、女の子の扱いが上手ければ…………

だ、だめ！

一夏がもし女の扱いが上手くなつた場合、ライバルがぞつとするほど増える…………

そんなことになつた場合、いくらい幼馴染とは、いえ…………

つて何で、あたしが弱気になつてているのよ――

「ん？ 風さん、どうかした？」

あたしの僅かな変化を見逃さず、話しかけて来る、リアム・イーリー……やるわね。

「な、何でもないわよ。それより、まだ着かないの？」

「HDS学園は広いからね」

そこで、ふと、あたしは思った。同じ男なら一夏のこととを知つて

いるんじゃないかな？ とこじとを。

疑問に思ったことは素直に聞いてみるのが、あたしの流儀だ。

「あなたと同じ男でエリが使える

「一夏のこと？」

「知ってるのー？」

思わず、余ったばかりのリアム・イーリーで飛びつく勢いで迫つてしまつた。

「つー？」

「あ、『めん』……」

さすがに、あたしの突然の行動に驚いたのか、リアム・イーリーは身構えてしまつ。

その反応はあたしを指導してくれた教官と同等だと悟つ。ここに、悔れないわね。

「いや、俺こそ、驚いて、『めんね』

「…………それで、一夏のことなんだけど」

そこで、リアム・イーリーは少し気まずそつな顔をする。

「『めん、着こちやつたんだけど…………』

「え？」

いつの間にか、あたしは事務所の前に来ていた……ダメね、考え事をすると……周りが見えなくなっちゃつ……

「いいわ。事務所の方で詳しい話を聞くから」

「それなら、失礼するよ」

そう言って、リアム・イーリーは、ビニカへ消える。

さて、あたしは、あんな奴のことよりも一夏のことしか聞かないとい。

時間は、未だに朝日が眩しい時間、そんな中から金色の髪をボーネイルにして結んでいる少年はモニター通信で、年上の女性と深刻そうな顔をしながら、話をしていた。

『…………若様、申し訳ありません。午前の授業を休ませてしまいまして……』

その女性の名前はレーナ・アンクシャス。彼女は基本的にリアムの私生活を第一と考えるため授業を休ませてまで話をしよう機会は滅多にない。

今日はそれ程の案件ということもだ。

「謝らないでください。リーナさんは俺のことをいつも第一に考えててくれています。今回も俺のためにこうして忙しい中、リーナさん、自ら話してくれているのでしょうか？ リーナさんには感謝してもしきれません」

その言葉を聞いたリーナはモニターの向こうで手をひねりながら笑る。

『そ、そんな若様、私などにそんなもつたいたいな』…………

それから、リーナは『私など、まだまだ』『若様のためならば火の中、水の中、どこまでもお供します』などとひとしきり言った後

再び、真面目な顔に戻りリーナは一度、コーヒーに口をつけた後を始める。

『…………実はイギリスで開発中だった第三世代ヒュサインテント・ザーフィルスが亡国機業に略奪されました』

「なっ！？」

驚くリアム。

確かに、アメリカもISを一機、亡国機業に奪われている。だが、アメリカが奪われたのはあくまで第一世代IS、既に世間に公表され実用化されている。

第一世代が奪われたのと、第三世代が奪われたことでは話しさは変わってくる。なぜなら、第三世代ISは現在、ISを開発している、どの国にとっても国家機密中の国家機密。トップシークレットだ。

開発している場所でさえ、一部の科学者と代表候補にしか知らされていない。政府の高官でさえも知らない場合もある。

各国は、それほどまでしてでも、第三世代の技術を隠している。

確かにイギリスはヨーロッパの中では最も早くIS学園に第三世代を送りこんだ。しかし、それでもブルーティアーズを開発した場所、及び実験施設は公開されていない。

『未だに、EV社^{エターナル・ヴァルキリア}でもイギリスの第三世代ISサイレント・ゼフィルスの情報は詳しく分かつておりませんでした。唯一、分かっていたのはシールドビット搭載機^{エターナル・ヴァルキリア}ということだけです』

「亡国機業は……EV社^{エターナル・ヴァルキリア}の諜報部よりも優れた諜報組織を持つている……」

『おやうへは……』

「…………そういえば、何でサイレント・ゼフィルスが亡国機業に奪われたって分かったんですか？」

『…………事前に送り込んでいた諜報員が蒼い機体が空を飛んで行く

のを見て、不審に思い、その飛び立つた場所に行つてみるとISの研究所があり、研究員達が研究所の外に出て嘆いていたらしいんです。『この情報が得られたのは正直に言ってラッキーだったとしか言いようがありません』

「その情報がプラフの可能性は？」

『おそらく、ありません。いくら自国の空とはいえ、各国に無断で広範囲をISで飛んだとなると事が露見した時に様々な問題が生じます。それが既に完成された第一世代なら問題ありませんが、第三世代だった場合、それをネタにしてイギリスに技術提供を呼びかける国が出る可能性もありますから。特にフランスのデュノア社などは第三世代の開発に失敗しているので、ここぞとばかりに仕掛けるでしょう。明らかにメリットよりもデメリットの方が大きいはずです』

「…………分かりました。これで、分かつているだけで五機のISが亡国機業に奪われたんですね」

『はい。このまま、ISが奪われ続けた場合…………最悪、亡国機業が世界に対して戦争を起こす可能性さえあります』

「…………ただのテロ組織が世界に戦争をしかける…………普通なら笑つてしまふ漫画のような話しだすが…………」

『ISが一桁、奪われた場合、ありますからね…………』

モニターの前であるで、悪夢を見ているかのような絶望的な顔をするリアム。それは遠く離れたアメリカの地にいるリーナも同じだつた。

ISが一括奪われる。世界にはISは四六七機あるのだから問題ない、と思えるかもしれないが、それは間違っている。

一機でもISを所有していない国を相手に戦える可能性を持つていい、それがISだ。

もし仮に一斉にISを所有していない各国でISによるテロが起じた場合、被害は予測できない。

そして、被害を受けた国はISを所有していくる国に間違いなくISを要求するだろう。そうなれば、数に限りがあるISの奪い合いになる。

そうなればISを所有している国は迂闊にISを動かせなくなり亡国機業の対策を軽んじてしまう。

なぜなら、亡国機業とISを所有していない国、その両方からISを守らなければいけなくなるのだから。

そして、何より、ISは四六七機あると言つても、その全てが実戦用にされている訳ではない。

第二世代の実験機とISの訓練機がその良い例だ。

確かにセシリアのブルーティアーズはBT兵器の装備は積んでいるが実弾兵器は一切積んでいない。正確にはミサイルを積んでいるには積んでいるが、実戦で実弾兵器しか効果を期待できないISと

の戦闘を余儀なくされた時、どれほど、力を発揮できるかは言わなくとも分かる。ブルー・ティアーズはいわゆる欠陥機と言つて良い。

そんな欠陥機と完全に戦争用の装備を持つたISが戦えば、操縦者に圧倒的な力の差がない限り、勝負は明らかだ。

それに一桁もISがあれば、訓練用のISの宝庫であるIS学園を襲える。

そうなれば、IS学園にある多くの訓練機が奪われることになる。

いくら、IS学園に代表候補生達がいたとしても彼らはあくまで代表候補なのだから。代表並みの実力を持った人間が代表候補と同じ数、IS学園に在住していれば話は別かもしぬないが。

IS学園には織斑千冬がいるから、と安易に考える者もいるかもしれないが、彼女とて人間、織斑一夏を人質に取られた場合、本来の力は發揮できずに終わるだろう。

いや、厳密に言えば生徒を人質にとられた場合、彼女は何人の生徒を犠牲にことができるのだろうか？ 彼女も教育者、生徒の命を軽んじることなどできないのだから。

そんな彼女の攻略はいくらでも、できる。彼女がもし、どれだけの人間を犠牲にしてでも訓練機を守る、と教育者にあるまじき行為に走つたなら話は別だが。

「……分かりました。それとなくIS学園の警備を強化するよう

に織斑先生に話してみます「

『お願いします。私達の方からEIS学園に申告できるのですが……
…そつなつた場合、理由を言わなければなりませんので……』

そうなれば、イギリスに『アメリカがなぜ、サイレント・ゼフィルスが奪われたと知っている？ もしやアメリカが亡国企業を手引きしたのでは？』と、いらない波紋を呼びかねない。

それを避けるため、リーナはリアムに頼んだのだ。

企業が言った場合と一、個人が言った場合とでは警戒レベルの上げ方も違うが、そのことによる波紋もそれに比例して少ないのでから。

今は警戒レベルを最大限まで上げるよりも、警戒レベルを上げて亡国機業を牽制することが重要なのだから。

『次の案件は

その後もリーナヒリアムのモニター越しの会談は、四限目終了のチャイムが鳴る十分程前まで続くのだった。

Episode 05 KNF、シンクレと遭遇す（後書き）

翼「前回もそうでしたが、今回も独自解釈が、かなり入っています」
神「……確かに、亡国機業に現在、何機ISが奪われてるか、なんて、原作では明かされてないもんね。原作では分かっているだけで三機だし」

翼「おそらく、これからも、こんな風にして独自解釈が結構入ってきます。KNFは次回くらいに発動しますのでお楽しみに」

神「では、失礼します」

Episode 06 KNF、恐怖する

昼休みを知らせる鐘が鳴つてから、俺は一年一組の教室の中に入る。

残りわずか五分だったので、入ると逆に邪魔してしまった。だからだ。

に入る時に織斑先生に睨まれてしまつたが、見なかつたことにしたい……

「リアム、何で午前中の授業に出てなかつたんだよ」

俺が教室に入つて来るのを見ると一夏は一田散に俺の所にやつて來た。その瞳には疲労の色が見える…………やはり、男子が一人だけとこう空間にいると、何かと疲れるのだな。

実際、俺もアメリカにいた時は……

「悪い、一夏、ちょっと代表候補の仕事で」

「織斑さん！ リアム様に言いがかりをつけるのはおよしなつてくれませんこと？」

いつの間にか、俺の斜め後ろまで来ていたセシリアは腰に手を当てて、一夏を忌々しそうに見ながら、そつそつ…………セシリア…………

後ろをとられたの、まったく気づかなかつた…………代表候補生として何が、また新たに…………習い始めた影響なのかな？ そんな話

は聞いてないけど……

「誰も言いがかりなんてつけないだろ！」

「まあ、なぜ、そんな乱暴な言葉をつかいますのー。」

「そつちこむ、いつになつたら、その変なクロワッサンを外すんだよ」

「な、な、な、あなたには私のこのファッションが理解できませんの！？ これだから野蛮人なのですわー！」

『むう』

二人の視線がヒバナを散らす。もはや、この二人のやりとりは一年一組では当たり前のようになつてしまい。止めようとする者はいない。

この二人の仲を現す言葉があるとすれば犬猿の仲だひつ……

いつもなら、どちらかが痺れをきらして、なし崩しで一緒に食堂に行くのだが……今回は違つた。

「一夏あー！」

篠さんごどーからかとりだして來た木刀で一夏に斬りかかつて來たからだ。

……教室のどーにそんなモノを隠していたんですか？

「やべつー...?」

「IJの軟弱者ー。なぜ、リアムの後ろに隠れるー。」

……そう、一夏は篠さんの姿を見た途端に俺の後ろに隠れた……俺も余裕みたいに言っているけど、篠さんに木刀を向けられて内心、少しビビッてこるのは内緒だ……こんなことでオーデインを部分展開しては……ダメだ。校則違反だし。

もう一度、篠さんの瞳を見る。

よし、シールドバリアーだけは部分展開だ。

「IJハでもしないと、その木刀で斬りかかってくるだろーー?」

「やうだー!」

自身満々にそつまつ篠さん。横でセシリ亞が『リアム様を盾にするなんて!』と怒ってくれているが効果はないようだ……。その気持ちだけでも嬉しいよ。セシリ亞。後半、良く聞こえなかつたけど『リアム様に私を盾にしてもらいたいですわ!』と言つていたのは何かの間違いだろう。恐怖で幻覚を見せるなんて……さすがは東博士の妹さん……

「おままでさういふと思つた俺は最後の勇気を振り絞つて

「篠さん、どうしたの？　また一夏が馬鹿やうかしたの？」

できる限り平時と変わらない質問をした……しかし、心臓の心拍数は一切、下がらない。

「…………一夏が、また、他の…………」

俺の言葉を聞いた瞬間に顔を真っ赤にしながら、何かぶつぶつと呟く篠さん。

…………一夏が誰か他の女の子と仲良くなっていたのを見て篠さんが嫉妬したのか…………それなり…………こつものことだ…………何とかなるだらう…………

だから、俺は安易に

「とつあんず、食堂に行こうか」

そう言って、冒食をとることを優先させてしまつたのだった。

そこには誰が待つてゐるかも知らずに。

ちなみに、この口から俺は篠さんを怒らせなきつと心に警つてゐた。

「一夏！ 遅いじゃない」

食堂に入ると、一夏達に真つ先に近づいて来たのは髪をツインテールに結んだ小柄な少女、鳳鈴音（ファミラン）だった。その手に持ったお盆の上には湯気がたつていらないラーメンの器が置かれていた。

彼女のその言葉を聞いた瞬間、篠が一夏を睨みつける。

その篠の視線に一夏は気づいていないが、リアムは気づいたようだ。そして、若干、篠の視線に脅えつつもどうして篠が怒っていたのか理解するのだった。

先日、鳳鈴音（ファミラン）と会った時、鳳鈴音（ファミラン）は確かにリアムに一夏のことを聞いていた。そこから二人が知り合いだと推測しても、おかしくない。

てっきり、初めは中国に一夏の情報を探るように鳳鈴音（ファミラン）が言われていた、と思っていたリアムだったが、どうやら、彼の考えは間違いであつた。

元々、一夏と鳳鈴音（ファミラン）は面識があつたようだ。

一夏に寄つて来て『何で遅いのよ!』『別に約束した訳じゃないんだからいいだろ?』と言い争いをしている一人を見て、とりあえず、リアムは一夏の分の食券も購入してセシリ亞、簞を連れて昼食を受け取りに行く。その時も簞は一夏に何か言いたそうだったが、空腹には勝てなかつたのか鰯の塩焼き定食を購入しに向かつた。

その後、戻つて見てもまだ、言い争いをやめていない、一夏と鈴音を見てリアムは、はあ、とため息をついた後

「あ、織斑先生、御苦労さまです」

その場にいない、千冬の名前を出す。

すると、案の定

「ここもあー!? ち、ち、千冬さんー!?

「ま、待つて、千冬姉! これは鈴がー!?

二人は顔の前に手を持つていき防御の体勢をとる。

「ほり、一夏、これ、一夏の分の昼食」

そう言つて一夏に鮭定食を渡すリアム。

「え? リアム……千冬姉は?」

周りを見回しながら一夏が聞く。

「いないよ。嘘も方便だろ?」

「はあ、良かつた……」

千冬がいのを知ると一夏は胸をなでおうす。あいのむすび拳骨を受けるのは、やはり、嫌なのだろう。

「えつ？ えつ？ 何で千冬さんいの？」

ただし、鈴音だけは未だに状況が良く、飲みこめていないようだつた。

その頃、生徒達から僅かな時間解放される昼の休憩時間を利用して、千冬と真耶が昼食をとつていた矢先

「くつちゅん」

クールな顔立ちの人間からは到底、想像できない可愛らしくいやみしたのは真耶ではなく千冬だった。

「どうしたんですか？ 織斑先生、風邪ですか？」

隣の机で大きなお弁当を食べている真耶が千冬を心配そうに見つめる。

「だ、大丈夫だ、山田君……大方、またあの馬鹿どもが私の噂でもしているのだろう」

しかし、千冬の顔は若干、赤い。おそらく、自分が可愛らしくしゃみをして、それが後輩である真耶に聞かれてしまったのが多少なりとも恥ずかしいのだろう。

「はあ、そうですか…………あ、おいしいしい」

真耶は本当に分かつてているのか分かつていなか分からぬ、曖昧な返事を返しつつも自分のお弁当に入った唐揚げに箸をすすめるのだった。

何気に食い意地をみせる真耶に千冬は苦笑するのだった。

「ふう」

部屋に備え付けられたシャワーを浴びてジャージに着替えたリアムは冷蔵庫にあるミネラルオーターを飲んだ後、いつものように一夏の部屋に向かう。一夏にISの基礎を教えるためだ。

初めは一夏のことを思つている筈が教えた方が良いと思つたリアムは筈に先生役を変わつていたのだが……数日後に一夏に『筈の説明は分からんんだ!』と抗議されたため、また行くことになつ

た。

雛は仮にもEISの開発者である束の妹だから、と思っていたので安心していたリアムだが、ここで先入観の怖さを思い知らされた。

一度、実際に雛の教える様を見せてもらつたら

『一夏、そこには、あれだ、その気合だー（ざいわく、雛も分からないようだ）』

『ええい！ なぜ分からなんだ！（竹刀たけのこを一夏に向ける）』

『い、一夏！？ ま、待て、私達はまだ学生だ！？（一夏の顔を近づくと）』

『私は眠い！ もう寝るぞ！（どうやら、一人で一つの机を使うのが恥ずかしくなつたのだろう）』

これが、ただの初々しい恋人の室内で行われているなら微笑ましいのだが……現在、一夏は授業についていけていらないから、夜の九時から十一時まで補習のような形で勉強をみてもらつていてのだからさすがに、これはいけない。

このまま基礎ができなければ一夏はEISの理論のテストを全て赤点で卒業することになつてしまつ。EIS学園には留年という制度がない。赤点だつた場合、退学になるのだが一夏の場合は特異ケースなので退学はありえない。よって、そういうことになつてしまつ。それは……あまりに酷いだろう。

それに、もし、そのようなことになれば、それなりにプライドが高くシスコンな一夏は『千冬姉の名前に傷つけた……』と言つて一生のトラウマになりかねない。シスコンならありえる話しだ……
… 例え、周りはそう思わなくとも。

さすがに友人としてそんな一夏を無視できないリアムは、『うして一夏の部屋に向かっているのだ。

ちなみに、なぜ、留年という制度がないのかと云ふと、留年するところ」とはEHS学園に一年長くいるということになる。その分、EHS学園でEHSの活動データが長くとれるのだ。

留年という制度があれば代表候補をわざと留年させる国ができるかもしれない。だから、留年という制度がEHS学園にはない。

それに、既にEHS学園に入った時点での、それなりに優秀なので毎年、赤点をとる生徒などいないはずなのだ……通常の場合。

「一夏の馬鹿！」

リアムが、一夏の部屋に向かっている最中、一夏の部屋の方から突然、鈴音の叫びに近い声が聞こえてきた。

(……また一夏……何かデリカシーのないことをしてたのか?)

鈴音が一夏の部屋から、一矢張りに走つて来る。

リアムは「」のまま、見て見ぬふりをするつもりだった。これは一夏と鈴音の問題なのだから。

鈴音は泣いていた

彼女の瞳の色はおかしくなったのかもしれない。だけど、俺には、いや、僕にはそれは、それは……その瞳に映る色は……それは……

リアムは鈴音が走つて行つた方向へと走り出した。

その夜、星の光は輝きを失い、星はゆっくりと涙を降らすのだった。

Episode 06 KNF、恐怖する（後書き）

女神「次回、自身満々にKNFを発動させる、と言った馬鹿は誰かしら？」

翼「…………面倒じゃいません…………」

神「で、言訳は？」

翼「大まかな流れを少し、いじつた関係で…………」

神「最終話までのプロットはできているのでしょうか？」

翼「…………は…………大まかな道筋は…………」

神「はあ？」

翼「え……と、確かに本筋はアンケートをとったおかげでできたのですが…………」

神「それで」

翼「核はできるけど、機体（細かい話）はできないんですね」
神「ようするに物語の本質に関わってくる話はまとまっているけど、細かい話ができるいないのね。例えば、蘭ちゃんの『テートをいつするかとか、蘭ちゃんの『テートをいつするかとか、だから、このEpisodeは若干、繋ぎみたいで残念な感じに仕上がったのね』」

翼「言い訳のしようがありません…………」

神「はあ、これだから、馬鹿は」

翼「すみません」

神「それで次回、次回、今回はノ（狙つたようなタイミング）で現れただけだから、次はKFが発動？」

翼「はい！」

神「それなら、一つにまとめてEpisode 06で良かつたんじゃないの？」

翼「若干、分量が多くなりすぎた関係で…………」

神「はあ、まあ、次回、どうな風に鈴ちゃんとフラグをたてるか楽しみにしているわ。蘭ちゃんは一夏に一日惚れだつたから、リアム

にも一田惣れとこの形をとつたんでしょうけど、鈴ちゃんはそんな

簡単じゃなでしょ？ きちんと一夏君が好きな理由があるんだから」

翼「そのあたりも含めて慎重に書いていきたいと思います」

神「では、また次回、お会いしましょ？」

翼「勝手に閉められた！？」

Episode 07 KNFの違和感

また、あの喪失感、絶望感、罪悪感が僕を襲つてくる。まるで、体を蝕む何かのように。

耳に与えられた音は絶望しか奏でない。

信じられない。

信じたくない。

目の前にいる大人が煩わしい。

冷静に物事を考えられない自分が煩わしい。

心のどこかで目の前の大人が嘘を言つていない、と言つて居るところが煩わしい。

職員室にあるテレビのニュースから悲鳴と共に爆発が聞こえてくるのが煩わしい。

急に学校が休みになつたのが煩わしい。

今朝まで、笑顔だったのだ。

『いか変な父さんも

優しいけど、マイペースなリーナ母さんも

厳しいけど、できれば褒めてくれるアリス母さんも

機械のことに詳しいムーア母さんも

いつもと回じ回す田舎

いつもと回じ回すに学校に来て

いつもと回じ回すに退屈な授業を受けて

いつもと回じ回す……

なぜ?

「君の両親は…………半日前に起きたロサンゼルスのショッピングモールが爆破…………されたのにまきこまれ…………」

なぜ？ 政府の高官だといつ男がこんな嘘をつくんだ？

なぜ？ 男はそもそも、本当のことについての風に話をするんだ？

分からぬ

理解できない

信じたくない

自分の全てを肯定してくれる人達が…………

僕の喪失感、絶望感、罪悪感を、いつもたやすく消し去ってくれる程、優しいあの人達が…………なぜ？

分かっている。

これはただの現実逃避。

だけど、だけど、僕はこのことを受け入れられない

受け入れたくない

言葉にするだけで泣きそうになる

でも、その言葉は僕の心に突き刺さる

まるで悪魔が嘲笑うかのように僕の中で暴れまわる

父さんが

リーナ母さんが

アリス母さんが

ムーラ母さんが

死んだ

走る。

リアムは何も考えられず走る。

少女は後ろからリアムが走つて来たのに気づいたようで、リアムから逃げるよう走る。

消灯時間はまだ、先だと言うのに彼ら一人以外、廊下を歩く者はいなかつた。

少女は彼を振り払いいためだけに、寮の外に出る。

まさか、規則を破つてまで、追いかけて来ると思つていなかつたから。

「何なのよつー！」

少女、鈴音は叫ぶ。

後ろを振り返りもせずに、自分とある一定の距離をとつてアムに向かつて

「…………

鈴音に『何なのよつー』と呼ばれて、何も言えない。

ちょうど、寮からの外出が許可されていた時間が終わり、寮の周りの電灯から光が消える。鈴音とリアムを照らすのは月の光だけだった。

そうなつても、ただ、リアムは無言で彼女の後ろに立つていた。

「あんた、何？ ストーカーってわけ？ もしかして、あたしが初日、事務所を探していた時にタイミングよく現れたのも、あたしのことをストーキングしていたからなの？」

鈴音は田じりに涙をためながら、リアムの方を向いて叫ぶ。

「…………」

その言葉を聞いてもリアムは何も答えない。

まるで、何かを迷っているような……そんな雰囲気がリアムにはあった。

「何とか言いなさいよ……」この変態…」

鈴音も通常の状態ではなかつた。先ほどまで、彼女は織斑一夏の部屋にいた。そこで彼女は知つてしまつたのだ、自分を自分でいさせてくれた結婚の約束を一夏が勘違いしていたことを。

父と母が別れて、自暴自棄になつた時も、この約束があつたから生きていた。それほどまでに彼女の中では重い約束だつた。

確かにその約束を一夏は覚えていた、しかし、勘違いしていたのだ。いくら、前向きな彼女でも頭の中が混乱してしまつていても何

もおかしくない。

「…………あたしの前から消えなさいよー」

よほど何も言わないリアムの態度が彼女の気にさわったのか、彼女は涙を右手の袖でふいて、リアムに向かって左手を向ける。

彼女の左手の周りに淡い光が集まる。

ISの部分展開。

すぐにリアムはそのことを察した。彼が部分展開を好んで行うからではない。

アメリカ軍にいた時、彼の周りにいたのはナターシャを初めとした代表候補ではなく、正式な国家代表達がいた。彼女等もごく生活の一部のようにISを部分展開していた。それを常に見ていた彼にとって、たかが、代表候補である鈴音の部分展開を見きれないはずがなかつた。

「…………本当にむかつくわね！」

彼の目の前に大型の青龍刀が向けられる。

命の危機。

そんな状態になつても彼は眉一つ動かさなかつた。

「言つとくけどねー！ あたしは本気よー！」

月が雲に隠れ、一人の間には暗黒しか生まれない。

彼らがお互いを認識できるのは寮から漏れ出す僅かな光のおかげだ。

「…………たんだ」

「はあ?」

リアムの口から絞り出された言葉を上手く聞きとれなかつた鈴音はみけんにしわをよせたまま、もう一度、リアムの言葉を待つ。

再び、雲から光を奪い返した月の光で鈴音がリアムの顔を確認できるようになった時、彼の瞳から涙が流れていった。

「つー?」

その顔を見て、さすがに、驚く鈴音。まさか、ISを部分展開したのが、彼を泣かせてしまつた原因だったのだろうか? と多少、罪悪感に蝕まれるも、すぐに心の中で首を振る。

「……こいつは自分を追いかけ回しているストーカーだ、遠慮なんて必要ないと。

月明かりに照らされながらも、リアムはゆっくりとその顔を震わせる。

「似ていたんだ」

その声は鈴音が今まで聞いたことのないほど、綺麗で透き通るよ

うな綺麗な声だった。

不覚にも一瞬、じじつの声に聞き入ってしまった自分に心の中で拳骨を浴びせて再び、リアムの言葉を待つ。

「初めて会った時から感じていた違和感。それが今、やっと分かつたんだ」

リアムの声はとても、穏やかで、今までストーカーだの、変態だの叫んでいた鈴音の方が、まるで変な人に見える。

しかし、不思議なことに今まで怒りを最高値まで溜めこんでいた鈴音は不思議な程、彼の言葉を聞いていると落ちつけた。

「君は僕に似ている」

リアムの声はゆっくりと、しつかり、鈴音の中に浸透していく。

久しぶりに一夏と再開した。E.S学園に千冬さんがいたのは予想外だったけど、一夏に会えた喜びに比べたら、そんなのどうでも良い。

朝、再開して話した時、分かった一夏は一年前から何も変わっていない。まあ、一年でそんなに男の子から男の人に変わつてたら、逆に不審に思うけど。

あいにく、一夏とあたしは同じクラスじゃなかつたから、せめて昼食だけでも一緒にとろつと思った。日本に来たら、やつぱりラーメンを食べたいじゃない。だから、あたしはラーメンを注文して一夏が食堂に現れるのを待つた。

遅い……

いつたい、あたしをいつまで待たせるのよー

……やつと来たと思ったら、あいつ……女の子を一人も連れて來た。

まあ、一人の金髪はどうやら、一夏ではなく、リアム・イーリーって男と一緒にいたいだけみたいだから問題ない。だけど、問題なのは、当然のように一夏の隣に座る黒髪をポニーtailにした女、篠ノ之箇だ。事前に政府からもらつていてる情報にも載つていた、こ

の子、IISを開発した篠ノ之博士の妹だ。

……まあ、強敵だけど……あたしは一夏の『幼馴染』なんだから、数歩、リードしているから、そんなに焦らなくていいわ……と、思っていたら、あたしがセカンド！？ 何よ、セカンド幼馴染って！？

確かに、篠ノ之さんの方が早かつたのかもしれないけど、あたしのことを見せて、一番目ですって！ 一夏に抗議すると篠ノ之さんは、勝ち誇ったような顔をした。

ぐぬぬ！

この女、敵ね。

不意に、昼食の席で一夏は『親父さん、元気か？』と聞いてきた。

……正直に言つて、分からぬ。両親が離婚してから一度も会つていない。一応、一夏には苦笑でごまかしたけど……あたしが苦笑したのを見て、リアム・イーリーはなぜか、あたしを見つめていたけど、一夏以外の男の事なんてどうでも良い。

一夏と戸口争っている間に、いつの間にか、昼休みが終わってしまった。

だけど、言い争えて嬉しいな……中国でいた時は満足に言い争いができる友達もいなかつたし……

夜、一夏の部屋に行つてみたら、なんと、あの篠ノ介さんがいた……

何ですよー。

何でそこそこにいるのよー。

ソレソレ元気なのね……

先に一緒にいたから?

あたしが一夏と一緒にいなかつたから?

たまたま、遅れた、あたしは一緒にいられなくて。たまたま、一緒にいた幼馴染のあんたは一夏と一緒にいられるわけ?

……だけど、だけど、まだ、あたしには『約束』がある。

一夏との約束。

そう、『結婚』の約束。

あたしが酢豚を美味しく作れるようになつたら、毎日、あたしの酢豚を食べてくれる。本当は味噌汁って言つらしきけど、そんなの恥ずかしいじゃない。

日本から離れた後も酢豚の練習だけは欠かさなかった。

IHSの訓練でヘトヘトになつて周りの皆が、けが人のようにベッドに倒れ込んでいく中、あたしは必死な思いで一夏との『結婚の約

束』のために腕の筋肉が痙攣しかけているにも関わらず、酢豚の練習をした。

もちろん、一夏と結婚した後のこととも考えて、離婚前に父さんに教わっていた中華料理も練習した。

全では一夏と笑つてみたいから。

なのに……あらう」とか、一夏は……

「あれだろ？ 鈴が酢豚を上手く作れるようになつたら、毎日、酢豚を奢ってくれるって約束だろ？」

それを聞いた時、あたしは怒りより、先にあたしを絶望感に包まれた。

両親が離婚して、寂しくて、悲しくて、どうしていいか分からないうちも、この約束があたしを支えてくれた。

枕を涙で濡らしていた時も……この約束があつたから、涙を拭いて、また歩けた。

あたしにとっては、とても、とても、大切な約束。

だけど……あいつにとっては……

それが分かつた時、また、父さんと母さんが離れ離れになつた時、味わつた孤独感があたしを襲う。

あの時は、一夏との約束があつたから、また、歩き出せた。

だけど、だけど、その一夏との約束が潰えた今……

「一夏の馬鹿！」

気づいた時には、あたしは瞳に涙をためて、一夏を殴った後、一夏と『篠ノ之簣』の部屋を後にしてた。

寂しい

寂しいよお

パパ

ママ

翼「やつそくですが！」の鈴ちゃんは原作よりも一夏君に依存しています！」

女神「幼児退行？」

翼「原作では、きつちりとは書かれていないけど、一夏君に鈴ちゃんはちよつと依存しているふしがあったような気がしたから、作者はそこにピント当たって、この状況を書いていきたいと思っています」

神「…………よつば、また、作者の独自解釈？」

翼「うん…」

神「…………そうなの」

翼「ついでに言つと、原作はもちろん、全巻持っています！　けどIS - unconscious - を書くときは、読んでいません！」

神「はあ？　何でよ」

翼「PCのキーボードをつつ時、両手を高速？　で使うから、持ちながらだと書く速度が遅くなるから嫌なの。だから、一夏のクラス代表に決定の時の山田先生の言葉も違つし、原作のお話は最低限しか書いてないの」

神「そういうえば、一夏とセシリアの決闘シーンも…………鈴と一夏の再開シーンもなかつたわね…………」

翼「うん！　作者は原作と同じシーンを極力書きません！　皆さん、ご了承ください」

神「ちなみに私はアニメ派よ」

翼「という、ことで次回、またお会いしましょっ」

神「1~8話目にして、未だに原作一巻を終わってない一次作も、こぐらいいぢやない？」

翼「それは言わないで（泣」

「君は僕に似ている 父さんと母さん達を失った、あの時の僕に」

そう言われた時、あたしは口を開けた状態で啞然としていた。

「はあ！？ あたしとあなたが似ている！？ 何でよー！」

なぜだが分からぬけど、あいつの言葉に悪意がないのは分かる。それどころか、あたしを気づかうよな意味にも聞こえる。

他人の言葉の意味が、ここまで分かるなんて……初めてのことだ。

……だけど、気づかってくれていたとしても、目の前のこいつとあたしが似ているという言葉には反対だ。

それどころか、苛立ちさえ覚える。目の前のこいつは明らかに温室育ちで何の苦労もなく生きてこれた人間だと睨つ。

あたしが不幸のどん底にいるとは思えないけど、絶対にあたしよりは恵まれていると思った。

最後の方で何か言つていたような気もあるけど、そんなことは関係ない。

「…………あの時の俺と同じ田をしているからかな？ まるで捨てられて子犬みたいな」

「あたしは犬じゃないわよ！」

そんなことは向こうも言われずとも分かっていると思うし、あたしも分かつている。

だけど言はずにはいられない。

「あんた何かに、あたしの何が分かるって言ひのよー。」

「分からぬ」

「分からぬなら言うなー。」

あたしはエスの部分展開を解いて、あいつの傍までズカズカと歩いて行って、こいつの襟を掴んだ。

何で、こいつにこんな悲しそうな顔をされないといけないのよー！

寂しいのはあたしなのよー！

「何なのよー！あんたは、別にあたしはあんたの何でもない。だから無視してなさいよー！」

ああ、自分で言つのもなんだけど、例え、どんな形でも、あたしを気づかってくれている人間に言つ言葉ではないのは分かつている。

だけど……

「…………無視できない」

「はあ！？ あんた、知らないの？ そいつ身勝手な奴のことを世間ではお節介つて書ひのよー。」

「だけど、そいつ時に一人でいれば 余計に寂しくなるだけだから」

まるで経験談を話すように田の前の男は、言葉を紡ぐ。

セ二で、氣づいた。

「こいつが、あまりにも変態 とこいつよりもこいつの突拍子もない行動と言葉に対し、怒りをぶつけことで、あたしの胸の中からか先ほどの、寂しさがなくなっていることを。

怒りに気が紛れただけかもしれない。

いや、絶対そうだ。

そうだ。全然、こいつのおかげじゃない。

ところが、こいつは、ただの変態だ。

「あ、あたしは寂しくないわよー。」

嘘だ。

心の中で誰かが呟く。

お父さんに会えなくなつて、明らかに変わってしまった母さんと

会わなくなつて、一夏に約束を忘れられていた寂しさが薄れているのは目の前の男の行動と言葉のおかげ、だと。

だけど、そんなの認められない。

認めたくない。

目の前の男はただの変態だから。

ただ、ストーカーだ。

「うん」

何よ、何で、あなたにそんな分かりきられたような返事をされないといけないのよ！

あたしは、あたしは！

「帰る」

そう言つて寮の方に向かつてトボトボと歩いて行く。

あたしの後ろであいつがどんな顔をしているのだろう……か？

でも、あたしの知つたことじゃない。

あんな失礼な奴のことなんて。

鈴音は泣いていた

それは別におかしい事ではなかつたのかもしれない。だけ
ど、俺には、いや、僕にはそれは、それは…………その瞳に映る色は
……

突然、親と会えなくなってしまった子供のモノだから

あれは、俺の転生後の父さんと母さん達が死んだ時のことだ。

正直に言えば、俺は普通の精神状態ではなかつた。

父さんと母さん達の友人が気づかってくれた、おかげで、何とか葬儀は一週間後になることになつたが、その一週間、俺は抜けがらのようだつた。

自分が転生者であることは云えていなかつた。

父さんと母さん達に嫌われるのがただ、嫌だつた。

だから、自分が本当は、あなた達の子供ではなく、その存在を奪つた他の誰か、だ と言つのが怖かつた。今、思い返しても卑怯だと思つし、安易に転生などという選択をした俺を殴りたかつた。

そして、何より父さんと母さん達にそのことを、言わなかつたことを当時の俺はとても後悔した。

それに転生して間もない俺は、とても、よそよそしかつた
と思つ。

色々と父さんと母さん達に引け目を感じていたからだろう。

だけど、父さんと母さん達は、そんな俺を肯定するかのように優しく接してくれた。俺が単に都合の良い風に解釈していただけなのがかもしれない。

だけど、確かに、父さんと母さん達は俺の存在を肯定してくれていた、と思う。なぜかは分からぬけど。

そんな父さんと母さん達を失つた後の俺は酷かつた。

支えを失った家のよう崩れていた。

そんな俺と一緒にてくれたのは……レーナさんだつた。

何もせす、ただ、抜けがらのよう生きている俺にレーナさんは何も言わずに世話をしてくれた。

そして、葬儀の前日

「お一人は寂しいですか？」

「…………」

「私も実は、ある方に出会うまで、たつた一人でした。何も信用できない。自分の持っているモノなどない。他人など必要ないと思つていました」

「…………」

「ですが、たつた一人のお方に会つただけで、私の人生は大きく変わりました。一人は寂しいことに気づいたんです。おそらく初めから持たなかつた私と、持つていて失つた若様では、その失望の大きさは比べものにならないでしょう。だけど

それ以上に、一人だと自分で思い込むことは寂しいことなのですよ

「全人類が若様を一人にしたとしても、私が若様の傍にいます。若様が寂しい思いをされたのなら、私は若様のお傍にいます。ですか
ら、一人だ、と自分で思い込むのはおやめください」

その日、父さんにも母さん達にも見せたことのない本当の涙をレーナさんに見せた。

一人だと思う、それがこれほど、辛いとは思わなかつた。

人は一人では生きていけない。

ただの偽善な言葉。

だけど、この時程、この言葉の意味が分かつたことはない。

俺はレーナさんから学んだ。

一人じゃない時の喜びを。

自分勝手に一人だと決め込んだ時の辛さを。

全ての人を寂しさから救うことなんて、ちっぽけな俺にはできな
い。

だけど、俺の目の前にいる『自分を一人だと決めこんで泣いてい

るナ『がいれば助けようと思つた。

お節介だと言われても。

偽善と言われたとしても。

もらつた優しさの分だけ、他人にも優しさを返そつと思つた。

ねえ？

リーナ母さん

アリス母さん

ムーラ母さん

僕つて間違つているのかな？

これが間違いなら、僕は世界が間違いでもいいと思うな。

だつて、あの時、レーナさんの胸の中は、暖かかったから。

……だけど、今回はやり方を間違えた。

突然の衝動に動かされるまま、行動したのはいいけど、これは完全に嫌われた。

慰めるどころか、どう考へても俺は、凰さんを襲っていた変態だ。

血口嫌悪した所で何も変わらないのは事実だけ。

本当に父さんと母さん達とレーナさん、ナターシャ姉さんが関わると、衝動に動かされるばかりで、思考できなくなってしまうのはどう考へても悪い癖だ。

セシリアの一件で反省したつもりだったんだけど……

アメリカなら、どう考へても訴えられている。

いや……日本でも同じか……

謝りたい……だけど、今、凰さんの所に行つても間違いなく、追い返されるだけ。

一夏を経由して……ダメだ。

そもそも、一夏と両親絡みのことなのだから。

このことをナターシャ姉さんに話したら、まず、間違いなく、お説教より先に爆笑されるだろうな……アメリカにいる時も一回、同じようなことをしてしまった時に相談したら、爆笑されたからな

レーナさんは忙しいからな……ただでさえも、俺の我儘をきいてもらっているから今は俺の悩みを聞いてもらっている時間はないだろう……

本当に悪つい、いつこう時、リーナ母さんがいたら……

アリス母さんがいたら……一日は説教だな

ムーラ母さんなら……笑いながら、相手に金を渡して解決しな
れこつて言つだらうな。

父さんは、『初対面の好感度は低い方がギャルゲーではお得だぞ
！ デレた時の嬉しさが倍増するからな』と笑つて……そうか。
事実、問題、父さんは、母さん達の前でもギャルゲーを普通にプレー
する兵だから……変態行為やセクハラをした時の対処を方を……
一番、知つてゐるな。

ああ、父さん、あなたにに関しては今ほど、いないことを残念に感
じたことはありません。

あなたなら、全世界のオタクたちの神に

と、俺は何て馬鹿なことを考えていたんだ……

それよりも……今は凰さんへの謝り方を考えないと……

そうだ……この前、ナターシャ姉さんが困った時はイーリスさ
んに相談しなさいって言つていたような……

よし、帰つて相談しよう。

Episode 08 KNFの後悔（後書き）

女神「いまいち、この頃、KNFの切れが悪いわね。それに文章量も少なくなつてない」

翼「ぎくつー？」

神「それに、感想にも全然、返信できていないよつだし」

翼「ぎくつー？ べ、別に『リザイン』の攻略に忙しかつたり、春の新作アニメを見ている時間が多いで、執筆に使う休み時間が減っている訳じゃない……です」

神「…………… そうなの、ね？」

翼「ぎくつー？ …… そうです。ごめんさい（涙）」

神「はあ、それで、リザインの感想は？」

翼「めっちゃ面白いです！」

神「リザインは、R18の同人ゲームなので、18歳未満の方は気になつても買わないでくださいね」

翼「誰か、リザインのファンの人がいたら…… ぐはあ」

神「仲間と語り合う前に、執筆しる」

翼「（返事がない、ただの屍のようだ）」

神「『』愛読ありがとうございました。ちなみに、裏情報なんですが、鈴ちゃんのEpisodeを書くにあたり翼は、アニメ版の『あかね色に染まる坂』の一話を参考にしています。

リアム 親切にも案内する 後を追いかける（変態行為）

準一 不良から助ける アンタ承なしにキスする（変態行為）

え？ 若干、違つて？ 同じようなもんでしょ（笑）

ちなみに、翼はあかね色に染まる坂のPC版、PS2版、アニメDVD

VD、および、星空へも持つていて。f enoのファンよ、次に日雇いのバイトをしてお金が入った時は青空を買う予定らしいわ。浪人なんだから、いつできるか不明なのにな。

と、ここでお時間が来てしまいました。では失礼します」

Episode 09 KNF、相談相手を間違える

『ははは、なんだ。おまえが電話していくからってつきり、国家規模の大型演習でもやりたいとか言い出すかと思えば、ただの色恋ざとかよ』

電話の向こう側で豪快に笑われているのが容易に想像できる。

今更ながら、なぜ、この人に電話をするような悪手をとつてしまつたのか、後悔せざるを得ない。

この人は昔から戦闘狂バトルマニアで戦闘バトルのこと以外はからつきし、頭にないような人だったんだ。

『しつかし、おまえがそこまで気にかける子が日本にいるとはな。チャイニーズだっけ?』

「あ、はい……」

『そういうえば、入隊したての頃、ナタルに内緒で親を亡くした女のケアをやってたな……あいつは今、どこに配属されているんだ?』

……また、この人は俺の黒歴史をほりだそうとする……正直に言って、イーリスさんが言っている、その子の時も初めは自爆して……そこから、どうしていいか分からず、たまたま、そのあたりにいたイーリスさんに相談にのつてもらつたような……

「…………その子、もう、除隊しました」

『まつ』

「何でも、親が死んで自棄を起こして周りの反対を押し切って軍に入つたとか……」

『それで、普通の幸せでも見つける とでも言つて除隊したんじゃないのか?』

「…………何で分かつたんですか?」

『ふふ、内緒だよ、内緒。おまえは知らなくていいことだからな』

……何か含みのある言い方だ。

この件について俺以上に何か知つていてるのかもしねないし、ただの戦闘狂バトルマニアとしての勘かもしねない。

できれば、後者と願いたい。

『しかし、前も言つたが、相談する相手を間違つたな。こいつこいつとはナタルに相談すべきだな』

ナタルとはナターシャ姉さんがイーリスさんからのみ呼ばれている愛称である。元々、戦闘狂バトルマニアで浮いていたイーリスさんと優秀すぎて浮いていたナターシャ姉さんはI.S学園時代に親友になり、イーリスさんは愛称で呼ぶようになったとか……それだけしか教えてくれない。いくら聞いても、どうして、そう呼ぶようになったのか教えてくれない。

それにしても……『前も言つたが』か……普通に前の時のこ

とも覚えているじゃないですかイーリスさん……あえて、俺に何もアドバイスしないのか……

『おつと。今のはじ。おまえのことを使態だの言つた、そのチャイニーズの命が危なくなるからナタルに相談するのはやめておけ。さすがに、あいつでもチャイナとの国際情勢は分かっているだらうから下手なことしないだらうが……おまえのこととなると予測がつかないからな。相当なブラコンになつちまつてるぜ、おまえと離れて』

「…………確かに、ブラコンの氣がありましたけど、いくらナターシヤ姉さんでも中国と全面戦争の火種になる事なんて」

『ありえるぞ』

「え?」

『この間、やつぱり、おまえを本国に戻して監禁しようとした案が政府の中であつたらしいんだけど、もし、そのような暴挙に国がでるのなら、おまえを連れて亡命するぞ　　と国の高官を脅したらしい。まあ、元々、政府の高官の暴挙なんてE・V社の社長さんが軽くあしらつていたんだけど、ナタルがそんなことを言いだしたから高官は大慌てで、その会議すらしなくなつたよ』

……俺を庇ってくれるのは嬉しいけど……いや、亡命は色々と問題があるだろ……でも、俺のいない所でそんなことが起きていたなんて……俺がもつと優秀だったなら、ある程度、政府の動きは予測できただろうに。俺も、まだまだ勉強不足だな。

「それで、結局、何も、アドバイスはくれないんですね?」

『若者は歎め

「…………イーリスさんも、まだ若いじゃないですか？」

『ははは、これは一本とられたな。そういうえば、シールドビットの使い方は少しは上手くなつたか？』

「…………あまり、進展はありませんね」

『さうか、さうか、もっとそっちの方も励めよ。今のおまえじゃ、ヴァルキリーレベルだ。歴代のブリュンヒルデには及ばない』

「…………さういうイーリスさんもじやないですか？」

『ん？　HJ学園に行く前にボコボコにしてやつたのを、もう忘れたのか？』

「ボコボコつて、あの時はグングールとシールドビットくらいしか、ロールアウトしてなかつたじゃないですか。今なら、デュランダルとアイギスがあります。前みたいな一方的なことにはなりませんよ！」

『さうか、さうか、それなら、本国に帰つて来るのを楽しみにまつていいぬよ』

…………しまつた。今の言葉、戦闘狂バトルマニアには禁句のだったんだ。

Jの人に「んな」と言つてしまつたら模擬戦を一日中させられぬ……

いつもはナターシャ姉さんが助けてくれていたけど、今はどこかに行つていかないからな……どうじょつ。

『じゃあ、そろそろ、訓練の時間だから切るぞ』

「あ、はい。ありがとうございました」

携帯電話が切れる。

ふう……それにしても、イーリスさんに俺の新装備の情報を教えただけで、何もアドバイスもえなかつた……はあ、結局は自分で考えるしかないのか……

部屋に戻った、あたしは、まず、自分の携帯を確認する。一応、これでも代表候補だから、緊急の案件があつた場合、困るから……どんなに気分が優れなくても、やるべきことくらいこする。

そしたら……本国の教官から電話が入っていた。

はあ、あの人、厳しいから苦手なんだけどな……

あたしは渋々、同室の子にお願いして少し、外に出でちゃう。一応、国家機密のような案件かもしないから。

『凰鈴音代表候補生、なぜ、連絡が遅れたかは聞かないでおきましょつ』

「あ、ありがとうございます」

……挨拶とか、もしもし、とかなしでいきなり、フルネームを呼ぶなんて……びっくりした。

『本日の案件ですが、あなたはこちらが依頼したリアム・イーリーに関しての報告書を作成していませんね?』

「えー?」

確かに政府の高官からはリアム・イーリーについて調べるよう言われていたけど……まさか、あれって命令だったの!?

『やはりですか、あなたの性格からして無視を決め込むと思ついました』

「…………なんで、あたし、なんですか? 他にも中国の生徒は……」

「……」

あんな変態のことを調べるだなんて……

『それは、あなたが国家代表候補だからです。他の生徒と違い、あなたは色々な特典を持っている変わりに守秘義務に始まり、色々な

義務があります。それは専用機を持ち国家代表候補になつた時点で理解していると、こぢらは認識していますが?』

「た、確かに、そうですけど」

『言いたくなかったのですが、何か勘違いしているようですが、言わせていただきます。あなたは何を勘違いしているのですか? こぢらがやれと言えば、あなたはNOと言う返答はできないのですよ? 国家代表候補になつた時に、我々はあなたに、もっと慎重に考えるべきだ。今すぐ、決断することはない、と忠告したのにも関わらず、あなたは、その話が来た時すぐに、了解して国家代表候補になつた。今さら、何を言つているんですか?』

「つ……」

何も言ひ返せない。

事実だから、あたしは国家代表候補の話しが来た時、一つ返事で代表候補になつた。周りの教官達は、すぐに決める必要はない、と言つていたけど、悩むなんて女々しい事したくなかった、あたしはすぐに「了解したのだ。

でも、それで一夏と再開できたのだから、それ自体は後悔していない。

『分かつたのなら、明日から彼について調べてください。彼に関する情報はアメリカの戦力を測る意味でも重要な意味があります。それはあなたも分かっていますね?』

「……分かりました」

『きつんと、こちらで調べた情報に関しては田を通しておいてくださいね、では』

「失礼します」

それだけ言って、あたしは電話を切る。

はあ、何で好き好んで、あんな変態のことをあたしが調べないと
いけないのよ。

とりあえず、外に出ていてもらった同室の子を部屋の中に戻つて
来てもらい、その後、あたしは変態リアム・イリに関する資料に田を通す。

性別・男

年齢・十五歳

身長・183センチ

体重・69キロ

こんなプロフィールなんて……正直に言ってどうでも良い。だ
って興味がないんだもん。あたしはそのまま、プロフィールを読み
進めて行く。

そして、ある項目で田を止める。

家族構成・戸籍上は本人のみ（現在、従姉で国家代表のナターシ
ヤ・ファイルス世話になっている）

“ひへこ‘うじよ。

あいつって、どつかのボンボンじゃなかつたの？

そして、あたしはある言葉を見た時に旋律する。

ロサンゼルス爆破テロにて両親を失う

ロサンゼルス爆破テロって一般市民に五百人以上の死者を出した最悪のテロだ。今でも小学生の時にニュースで見たことを覚えてい る。まるで、映画の中みたいな出来事が現実に起こった……とい うことで、日本でも大きく報道されたから。

正直、あの時、子供ながらに怖いと思つた。

だつて、普通のショッピングセンターがドンドン爆発して…… 次の日、同じクラスの馬鹿な男は面白がつていたけど……

あの事件で両親を失つた？

何て悪い冗談なの？

でも……これは中国の中でも、アメリカのCIAに匹敵するよ うな機関が調べた情報だから間違つていい可能性は、ほほない。

もし、曖昧な情報だつたら、ここに書かず、裏がとれるまでは隠 されている。

逆に言えばここに書かれている場合は裏がとれてい る事だ。

……あいつも両親を……

いや、あたしの場合まだ、会える可能性があるけど……あいつは……

って何を同情してくるのよ、あたし……

あいつは、ただの変態であたしが同情してあげることなんて全然、ないんだから！

…………でも、明日から、ここのことについて調べないとけないよね…………気が重いな…………それも一夏と喧嘩をしてしまったから一夏からこここの情報を聞きだすのはまずい。

…………とか、一夏のこと思い出すと腹がたつてきた。本当に…………クラス対抗戦では、さつとじかとのめりやめりやにしてやるんだから！

はあ、今日はなんか疲れたな…………もう、寝よ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9451r/>

IS - unconscious -

2011年5月3日07時48分発行